島原市文化財調査報告書　第17集

上油堀遺跡・下油堀遺跡

農業競争力強化基盤整備事業　農地整備事業(畑地帯担い手育成型)
三会原第3地区に伴う埋蔵文化財発掘調査

２０１７

長崎県島原市教育委員会

島原市文化財調査報告書　第17集

上油堀遺跡・下油堀遺跡

農業競争力強化基盤整備事業　農地整備事業(畑地帯担い手育成型)
三会原第3地区に伴う埋蔵文化財発掘調査

２０１７

長崎県島原市教育委員会

発刊にあたって

本書は、三会原第３地区の農業競争力強化基盤整備事業　農地整備事業（畑地帯担い手育成型）に伴って実施した上油堀遺跡と下油堀遺跡の発掘調査報告書です。

今回の調査では、縄文時代早期を中心とした遺物や遺構が確認され、島原市の歴史に新たなページを加えることができました。

本書が文化財保護行政及び学問の進展に寄与することができれば幸いに存じます。

最後になりましたが、今回の調査にあたり、ご協力をいただいた長崎県島原振興局と三会原土地改良区の皆様に心より感謝申し上げ発刊のことばといたします。

平成２９年１２月

島原市教育委員会

教育長　森本　和孝

例　言

1. 本報告書は、長崎県島原市油堀町に所在する上油堀遺跡及び下油堀遺跡の三会原第３地区圃場整備事業に伴う緊急発掘調査報告書である。
2. 下油堀遺跡発掘調査に関わるものとして、範囲確認調査についても概要と出土遺物について記載した。範囲確認調査の期間は以下の通りである。

範囲確認調査期間	平成23年度	平成24年 3月 7日～平成24年3月23日
	平成24年度	平成24年 5月29日～平成24年6月 7日
		平成24年 9月12日～平成24年9月13日
		平成24年11月16日
		平成24年12月18日
		平成25年 2月 8日～平成25年2月 9日

調査担当　宇土　靖之

3. 島原市教育委員会が主体となり、株式会社大信技術開発の支援を得て発掘調査及び整理・報告書作成作業を行った。期間は以下の通りである。

本調査	平成28年度	平成28年12月17日～平成29年 2月21日
	平成29年度	平成29年 5月22日～平成29年 8月31日
整理・報告書作成作業	平成29年度	平成29年 5月22日～平成29年12月28日

4. 本調査関係者

調査主体	島原市教育委員会	教育長	宮原　照彦(～H29.7.11)
			森本　和孝(H29.7.13～)
		教育次長	寺田　集施(～H29.3.31)
			伊藤　太一(H29. 4. 1～)
		課長	松本　恒一
調査担当	島原市教育委員会	主任	宇土　靖之
	株式会社大信技術開発	調査主任	竹田　将仁
		調査員	吉岡　慈文
		調査員	横山　精士
		整理調査員	加世田　尊
		整理調査員	柳田　利明
		整理調査員	大坂　亜矢子

5. 調査地における基準点測量は株式会社大信技術開発が行った。
6. 遺構及び土層実測、実測図トレースは株式会社大信技術開発が行った。
7. 遺物の整理作業及び実測、実測図トレースは株式会社大信技術開発が行った。

8. 発掘調査及び整理作業参加者

・発掘調査

木村光江・姫田壽文・加藤健・中島輝幸・宇土典宏・倉永新子・浅野克己・横田直人
森川梓・堤田壽・町田敏夫・倉永敏勝・高木恵子・永尾国治・霜田寛・森本正利
荒木恵子・野田守彦・田浦哲也・松本美香・宮島彰利・森俊二・其田晃桂・元島文治
柴原淳・永橋久雄・小平寿秋・筑紫晴道・柴田洋一・長山賢三

・調査関連測量

松尾千尋・田崎英治

・仮設関係

中島健太郎

・整理作業

村上隆幸・辻村史武・柳田利明・大坂亜矢子・倉本いづみ・前田智美・田中由里子

9. 自然科学分析に関しては、長崎県埋蔵文化財センターの協力のもと株式会社大信技術開発の横山が担当した。

10. 発掘調査及び報告書作成にあたり、以下の方々にご教授をいただいた。
中尾篤志(新幹線文化財調査事務所)、川道寛(長崎県埋蔵文化財センター東アジア考古学研究室)、片多雅樹(長崎県埋蔵文化財センター)

11. 調査中の空中写真撮影は、株式会社大信技術開発が行った。

12. 本書で用いた方位は全て平面直角座標系(第1系)による座標北(G.N)である。

13. 記録類及び出土遺物は、島原市埋蔵文化財収蔵庫に保管している。

14. 本書の執筆は、宇土靖之、株式会社大信技術開発の竹田将仁、加世田尊、横山精士、吉岡慈文、が分担執筆し、目次に執筆者名を記した。

15. 付編の「下油堀遺跡で発見された倒木痕(SX13～SX15)に関する地質学的考察について」は、熊本大学教育学部谷口隼人が執筆した。

凡例

1. 本調査において検出した遺構には、遺構記号と数字を付している。本書において使用した遺構記号は以下の通りである。
道路状遺構…ＳＦ　土坑…ＳＫ　ピット…ＳＰ　土坑および風倒木、不明遺構…ＳＸ
なお、本書は調査中に検出した段階で付した記号のまま記載している。

2. 調査中出土した遺物を測量機械を用いて出土位置の記録を行っている。遺物に付した番号の頭文字は以下の通りである。
Ｐ…土器　Ｓ…石器
なお、本書は遺物観察表においてその番号を記載している。

3. 本書に掲載した遺構実測図は、２０分の１、４０分の１である。遺物実測図の縮尺は、土器は２分の１、３分の１である。石器は１分の１、２分の１である。

本文目次

序文
例言
凡例
第Ⅰ章　遺跡の位置と環境……1　(吉岡)
　第1節　地理的環境……1
　第2節　歴史的環境……1

第Ⅱ章　調査の経緯・概要……4
　第1節　発掘調査に至る経緯……4　(宇土)
　第2節　調査の概要……4
　　1．範囲確認調査……4
　　(1)　範囲確認調査の概要……4　(宇土)
　　(2)　範囲確認調査出土遺物……6　(加世田)
　　2．本調査……7　(宇土)

第Ⅲ章　上油堀遺跡……10
　第1節　基本層序……10　(横山)
　第2節　上油堀1区遺構と遺物……13
　　1．上油堀1区検出遺構……13　(竹田)
　　2．上油堀1区出土遺物……13　(加世田)

第Ⅳ章　下油堀遺跡……14
　第１節　基本層序……14　(横山)
　第２節　遺構と遺物……27
　　1．検出遺構……27　(竹田)
　　(1)　土坑……27
　　(2)　落し穴状遺構……30
　　(3)　焼土遺構……31
　　(4)　ピット……32
　　(5)　道路状遺構……32
　　2．出土遺物……35　(加世田)
　　(1)　倒木痕出土遺物……35
　　(2)　３層出土遺物……40
　　(3)　表土及び２層、その他出土遺物……61

第Ⅴ章　自然科学分析……75　(横山)
　第1節　蛍光Ｘ線分析による黒曜石の産地推定……75
　　1．分析方法……75

2．分析結果…… 81
第Ⅵ章　ま　と　め…… 81
第1節　検出遺構…… 82 (竹田)
第2節　出土遺物…… 82 (竹田・加世田)
第3節　油堀3層の年代について…… 82 (横山)
第4節　3層の区域による年代差について…… 83 (横山)
第5節　最後に…… 83 (竹田・吉岡)
遺物観察表
写真図版
附編
下油堀遺跡で発見された倒木痕（SX13～SX15）に関する地質学的考察
…… 135 (谷口)
抄録・奥付

挿図目次

第１図　上油堀遺跡・下油堀遺跡位置図…… 3
第２図　三会原第3地区工区割及び試掘坑配置図…… 5
第３図　範囲確認調査出土遺物…… 6
第４図　島原市大グリッド図…… 8
第５図　中グリッド及び調査区配置図…… 9
第６図　上油堀1区遺構及び土層配置図…… 10
第７図　上油堀1区土層実測図…… 11～12
第８図　上油堀1区出土遺物…… 13
第９図　1区～7区遺構及び土層配置図…… 15
第10図　8区～10区遺構及び土層配置図…… 16
第11図　2区・3区・4区土層実測図…… 17～18
第12図　5区・6区土層実測図…… 19～20
第13図　7区土層実測図…… 21～22
第14図　8区土層実測図…… 23～24
第15図　9区・10区土層実測図…… 25～26
第16図　SK02実測図…… 27
第17図　SK02出土遺物実測図…… 27
第18図　SK03実測図…… 28
第19図　SK03出土遺物実測図…… 28
第20図　SX09実測図…… 29
第21図　SX23実測図…… 29
第22図　ＳＸ２７実測図…… 29
第23図　SX04実測図…… 30
第24図　SX04出土遺物実測図…… 31

第25図　SX24実測図…… 31
第26図　SX24出土遺物実測図…… 31
第27図　SP01・SP02・SP03実測図…… 32
第28図　SF01及びSF02実測図…… 33～34
第29図　SX11出土遺物実測図…… 35
第30図　SX12・SX13出土遺物実測図…… 37
第31図　SX14出土遺物実測図…… 38
第32図　SX14・SX15出土遺物実測図…… 39
第33図　1区～7区3層出土土器実測図①…… 44
第34図　1区～7区3層出土土器実測図②…… 45
第35図　1区～7区3層出土土器実測図③…… 46
第36図　1区～7区3層出土土器実測図④…… 47
第37図　1区～7区3層出土土器実測図⑤…… 48
第38図　1区～7区3層出土土器実測図⑥…… 49
第39図　1区～7区3層出土土器実測図⑦…… 50
第40図　1区～7区3層出土土器実測図⑧…… 51
第41図　1区～7区3層出土土器実測図⑨…… 52
第42図　1区～7区3層出土土器実測図⑩…… 53
第43図　1区～7区3層出土石器実測図①…… 54
第44図　1区～7区3層出土石器実測図②…… 55
第45図　8区3層出土土器実測図①…… 58
第46図　8区3層出土土器実測図②…… 59
第47図　8区3層出土石器実測図…… 60
第48図　表土出土土器実測図①…… 64
第49図　表土出土土器実測図②…… 65
第50図　表土出土土器実測図③…… 66
第51図　表土出土石器実測図①…… 67
第52図　表土出土石器実測図②…… 68
第53図　8区2層出土土器実測図①…… 69
第54図　8区2層出土土器実測図②…… 70
第55図　7区・8区2層出土石器実測図①…… 71
第56図　7区・8区2層出土石器実測図②…… 72
第57図　接合遺物出土状況図…… 73～74
第58図　九州黒耀石採取地及び推定産地位置図…… 79
第59図　出土石器類の産地推定班別図…… 80

付　編

図1　下油堀遺跡における基本土層柱状図……139
図2　(02)第２層構成物　(03)第3層構成物　(04)第4層構成物
(05)第5層構成物　(06)第6層構成物　(07)第7層構成物
(08)第8層構成物　(09)第9層構成物　(10)第10層構成物
(11)第11層構成物　(12)第12層構成物　(13)第13層構成物
(14) 第14層構成物……140
図3　(上)SX13の断面 (下) 断面図……142
図4　SX13各層構成物 (a)a層 (b)b層 (c)c層 (e)e層……143
図5　(上)SX14の断面 (下) 断面図……144
図6　SX14各層構成物(a)a層 (b)b層 (c)c層 (ｄ)d層 (f)f層 (h)h層……145
図7　(上)　SX15の断面(下)断面図……147
図8　SX15各構成物 (a)a層 (c)c層 (d)d層 (g)g層 (h)h層　(i)i層……147

表目次

第１表　上油堀遺跡・下油堀遺跡周辺遺跡一覧表……2
第２表　実測石器類の分析値表……7
第３表　点上げ石器類の分析値表……7
第４表　一括取り上げ石器類の分析値表……7
第５表　範囲確認調査出土遺物観察表……87
第６表　上油堀1区出土遺物観察表……87
第７表　遺構出土遺物観察表……87
第８表　倒木痕出土遺物観察表……88
第９表　1区～7区3層出土遺物観察表①……89
第10表　1区～7区3層出土遺物観察表②……90
第11表　1区～7区3層出土遺物観察表③……91
第12表　8区3層出土遺物観察表……92
第13表　表土及び2層、その他出土遺物観察表①……93
第14表　表土及び2層、その他出土遺物観察表②……94

写真図版目次

図版１　範囲確認調査TP18近景　範囲確認調査TP18土層堆積状況……97
図版２　範囲確認調査TP18出土遺物……98
図版３　調査地と有明海を望む(手前 上油堀遺跡調査区)　上油堀1区全景……99
図版４　作業風景　上油堀1区雲仙火山灰検出状況　上油堀1区南壁土層①
上油堀1区南壁土層②　上油堀1区出土遺物……100
図版５　調査地と普賢岳を望む(手前 下油堀遺跡調査区)　下油堀2・3区全景……101
図版６　下油堀1・4区全景　2区西壁　2区南壁　4区西壁　3区西壁……102

図 版 7　4区南壁　1区遺構検出状況　2区3層検出状況　3区遺構検出状況
4区3層検出状況　SK02検出状況　SX04検出状況(西から)
SX04断面……103
図 版 8　SX04底部ピット(西から)　SX04底部ピット断面状況　作業状況
SX09断面　土器出土状況……104
図 版 9　下油堀5・6・7区全景　5区東壁　5区北壁　6区東壁　7区東壁……105
図版10　7区北壁　7区南壁　5区3層検出状況　7区3層検出状況……106
図版11　石器出土状況　調査風景　SX14石器出土状況
SX14石器出土状況　下油堀8・9・10区全景……107
図版12　8区東壁土層　8区西壁土層　8区北壁土層　9区南壁土層
10区西壁土層　10区北壁土層　8区3層検出状況
8区張り出し部削平状況……108
図版13　9区削平状況　10区3層検出状況　SF01検出状況　SF02検出状況
SK03断面　SX23断面　SX24検出状況　SX24断面……109
図版14　SX27断面　土器出土状況　石器出土状況　作業風景……110
図版15　SK02・SK03・SX04出土遺物……111
図版16　SX11出土遺物……112
図版17　SX12・SX13出土遺物……113
図版18　SX14・SX15出土遺物……114
図版19　1区～7区3層出土土器①……115
図版20　1区～7区3層出土土器②……116
図版21　1区～7区3層出土土器③……117
図版22　1区～7区3層出土土器④……118
図版23　1区～7区3層出土土器⑤……119
図版24　1区～7区3層出土土器⑥……120
図版25　1区～7区3層出土土器⑦……121
図版26　1区～7区3層出土土器⑧……122
図版27　1区～7区3層出土土器⑨……123
図版28　1区～7区3層出土石器①……124
図版29　1区～7区3層出土石器②……125
図版30　8区3層出土土器……126
図版31　8区3層出土石器……127
図版32　表土出土土器①……128
図版33　表土出土土器②……129
図版34　表土出土土器③……130
図版35　表土出土石器①……131
図版36　表土出土石器②……132
図版37　8区2層出土土器……133
図版38　7区・8区2層出土石器……134

第Ⅰ章　遺跡の位置と環境

第1節　地理的環境(第1図)

上油堀遺跡及び下油堀遺跡が位置する島原半島北東部は、雲仙山系の裾野からゆるやかに有明海に向かってのびる火山性扇状地で構成されている。

雲仙火山は島原半島の中央部の普賢岳を中心とするいくつもの山々の総称であり、周囲の裾野も含めて東西20ｋｍ、南北25ｋｍの広大な範囲を占める。火山体の中央部には東西性の断層群からなる雲仙地溝があり、現在も南北に拡大し沈降し続けている。雲仙火山は、高岳・九千部岳など侵食が進んだ古期(50万年から10数万年前)の火山体と、普賢岳・眉山・妙見岳・野岳などの火山原面を比較的よく残す新期(10万年より若い)の火山体とからなる。

今次調査区の周辺には、南落ちの正断層である一本松断層が東西に走り、妙見岳由来の一本松火砕流や普賢岳由来の礫石原火砕流などの火砕流堆積物が確認されている。

古くから活発な火山活動が繰り返され、形成されてきた島原半島であるが、平成２年から７年にかけて発生した普賢岳の噴火災害は全国的にも記憶に残るものであろう。平成3年6月3日16時8分に発生した火砕流により、死者41名・行方不明者3名を出す惨事となった。

さらに有史以来最も甚大な被害を出した寛政四年(1792年)の噴火活動は、眉山の大規模な山体崩壊をもたらし、これによって発生した津波は、島原のみならず対岸の熊本まで甚大な被害を蒙り、約15，000人の犠牲者を出したといわれている(いわゆる「島原大変肥後迷惑」)。今次調査地南側には、眉山と寛政四年に流出した新焼溶岩によって形成された焼山を見ることができる。

古来より火山と密接に関わりながら生活を共にしてきた当地は、県内有数の農業地帯でもあり、三会地区においても、白菜や生姜といった農作物を生産する田畑や養鶏場が散在し、本市の一次産業を支える地域でもある。

第2節　歴史的環境(第1表・第1図)

上油堀遺跡及び下油堀遺跡は、島原市の北部に広がる三会地区に所在する。三会地区には広大な畑地が広がる。この「三会」という地名については、古くは、「美江」・「三戸」・「三重」・「三江」と記されていたという。元来の意味としては「三江」すなわち、洗切川・大橋川・中川の川尻に三つの入江があったことに由来するとされている[1)]。

島原半島北東部では、旧石器時代からの人類の営みが確認されている。島原市内では明瞭な旧石器時代の遺跡が確認されていないものの、雲仙市国見町の百花台遺跡群や魚洗川遺跡群、小ヶ倉遺跡からは剥片尖頭器・細石刃などが出土している。

縄文時代の遺跡としては、礫石原遺跡や肥賀太郎遺跡、小原下遺跡、一野遺跡、大野原遺跡など多くの遺跡が知られる。早期のものとしては、一野遺跡から早期に位置付けられる一野式土器や弘法原式土器と呼ばれる円筒形土器が出土した。中期の遺跡については、確認できず、後期の遺跡としては1997年から1998年にかけて調査が行われた大野原遺跡がある。大野原遺跡からは、後期後半の粘土貯蔵穴とみられる遺構や焼土土坑が確認され、現在も有明町文化会館地下において展示紹介されている。

今次調査遺跡は、雲仙岳の火山活動により形成された河岸段丘上に位置する。礫石原遺跡から一野遺跡にかけては、河岸段丘上に連なるように遺跡が確認されている。礫石原遺跡、一野遺跡、上一野遺跡[2)]、肥賀太郎遺跡などから、縄文時代晩期の遺物の出土例が報告されている。また、縄

文時代早期の遺跡としては、一野遺跡Ⅳ層から条痕文を施した円筒形深鉢が出土したことが報告されている[3)]。さらに、礫石原遺跡からも下菅生Ｂ式と思われる土器や塞ノ神式土器が確認されている[4)]。

また、今次調査は標高約150mから200mの間に広がる範囲が対象となった。島原半島の中腹部ともいえる標高地であり、同標高に所在する遺跡としては、南島原市の権現脇遺跡[5)]・下末宝遺跡[6)]、雲仙市の弘法原遺跡[7)]・松尾遺跡[8)]などが知られている。いずれも縄文時代早期の包含層を有している。中でも下末宝遺跡からはまとまった数の押型文土器が、松尾遺跡からは今次調査においても出土した耳栓や平栫式もしくは塞ノ神式土器などが出土している。

1) 澁江芋麿『三會村物語』1953年

2) 長崎県有明町教育委員会1990『上一野・原口Ａ遺跡』有明町文化財調査報告書 第8集

3) 長崎県有明町教育委員会1992『一野遺跡』有明町文化財調査報告書 第11集

4) 長崎県島原市教育委員会1988『礫石原遺跡』島原市文化財調査報告書 第4集

5) 長崎県南島原市教育委員会2006『権現脇遺跡』南島原市文化財調査報告書 第1集

6) 長崎県深江町教育委員会2005『下末宝遺跡・上畦津遺跡』深江町文化財調査報告書 第1集

7) 長崎県吾妻町教育委員会1983『弘法原遺跡』吾妻町の文化財 7
長崎県吾妻町教育委員会1992『弘法原遺跡』吾妻町の文化財 13

8) 長崎県国見町教育委員会2002『松尾遺跡』国見町文化財調査報告書（概報） 第2集

地図No	遺跡名	種別	立地	時代	地図No	遺跡名	種別	立地	時代
	森岡遺跡	遺物包含地	台地	縄文		東鷹野遺跡	遺物包含地	台地	縄文
	上松高野遺跡	遺物包含地	台地	弥生		一本松遺跡	遺物包含地	台地	縄文
	払山横穴古墳	古墳	平地	古墳		二ツ石遺跡	遺物包含地	丘陵	縄文
	小原上遺跡	遺物包含地	丘陵	縄文		礫石原遺跡	墳墓,集落跡	丘陵	縄文
	国土神社裏横穴	墳墓	丘陵	古墳		礫石原古墓	墳墓	丘陵	古代
	小原下B地点遺跡	遺物包含地	平地	縄文		大塚後遺跡	遺物包含地	台地	縄文,弥生
	小原下遺跡	集落跡,遺物包含地	丘陵	縄文,中世		南楠沢遺跡	遺物包含地	台地	弥生
	松尾遺跡	遺物包含地	丘陵	古墳,古代		長貫B遺跡	遺物包含地	台地	縄文,弥生
	一野遺跡	遺物包含地,古墳	丘陵	縄文,弥生,古墳		津吹遺跡	遺物包含地	丘陵	縄文,弥生
	山ノ内遺跡	遺物包含地	丘陵	古墳,古代		三会中学校遺跡	遺物包含地	台地	縄文
	上一野遺跡	遺物包含地	丘陵	縄文		大塚古墳	古墳	丘陵	古墳
	灰ノ久保遺跡	遺物包含地	丘陵	縄文		畑中遺跡	遺物包含地	平地	弥生,古墳,古代,中世
	下源在高野遺跡	遺物包含地	台地	縄文		三会下町海中遺跡	遺物包含地	海底	縄文,弥生
	上源在高野遺跡	遺物包含地	丘陵	縄文		下宮遺跡	遺物包含地	平野	縄文,弥生,中世
	山ノ内上横穴古墳	古墳	丘陵	古墳		稗田原遺跡	遺物包含地	平地	縄文,弥生,中世
	原口B遺跡	遺物包含地	丘陵	弥生,古墳		人塚古墳	古墳	丘陵	古墳
	上中野遺跡	遺物包含地	台地	弥生,古墳		鬼の家古墳	古墳	丘陵	古墳
	景華園遺跡	墳墓	海岸段丘	弥生		大塚下遺跡	遺物包含地	台地	中世
	中野川遺跡	遺物包含地	川床	弥生		坪浦遺跡	遺物包含地	台地	縄文
	寺中城跡	城館跡	丘陵	中世		尻無遺跡	遺物包含地	台地	縄文
	西川遺跡	遺物包含地		弥生		大タブ沢遺跡	遺物包含地	台地	縄文,中世
	寺中B遺跡	遺物包含地	平地	弥生,古墳		立野遺跡	遺物包含地	丘陵	縄文
	寺中A遺跡	遺物包含地	丘陵	弥生		弓弦遺跡	遺物包含地	丘陵	縄文
	原口A遺跡	遺物包含地	台地	縄文,弥生		釘原遺跡	遺物包含地	丘陵	弥生,古墳
	長貫A遺跡	遺物包含地	丘陵	旧石器,縄文		長塚古墳	古墳	平地	古墳
	下油堀遺跡	遺物包含地	河岸段丘	縄文,弥生		道田遺跡	墳墓	平地	弥生
	上油堀遺跡	遺物包含地	河岸段丘	縄文		熊野神社遺跡	その他の生産遺跡（製鉄）	平野	古代,中世

第1表　上油堀遺跡・下油堀遺跡周辺遺跡一覧表

第1図　上油堀遺跡・下油堀遺跡位置図

第Ⅱ章　調査の経緯・概要

第1節　発掘調査に至る経緯

島原市三会地区において、長崎県島原振興局による農業競争力強化基盤整備事業　農地整備事業（畑地帯担い手育成型）（以下、農地整備事業）が計画され農地整備事業を所管する長崎県島原振興局と島原市教育委員会との協議結果により、事業計画範囲内に所在する下油堀遺跡、上油堀遺跡、長貫A遺跡、礫石原遺跡、大タブ沢遺跡を対象に島原市教育委員会が平成23年度から平成24年度にかけて調査坑を任意に41箇所設定して範囲確認調査を実施した(第2図)。

調査の結果、上油堀遺跡、下油堀遺跡で遺物包含層から遺物が確認された。よって長崎県島原振興局と島原市教育委員会と協議を行い、工事により遺物包含層まで掘削が及ぶため、協議の結果、上油堀遺跡と下油堀遺跡の一部について本調査を実施することとなった。

第2節　調査の概要

１．範囲確認調査

(1)　範囲確認調査の概要

農地整備事業の計画範囲のうち、周知の埋蔵文化財に係る圃場及びその周囲を対象として、任意に調査坑を設定し範囲確認調査を行った(第2図)。

範囲確認調査結果の全体的な傾向として、表土や耕作土から遺物が出土するが、一方で近現代の圃場の造成や耕作により遺物包含層まで削平されている状況であった。

ただし、下油堀遺跡のTP18から平栫・塞ノ神式と考えられる耳栓等が出土し(第3図)、TP17、TP37についても同時代の遺物と遺物包含層が確認された。

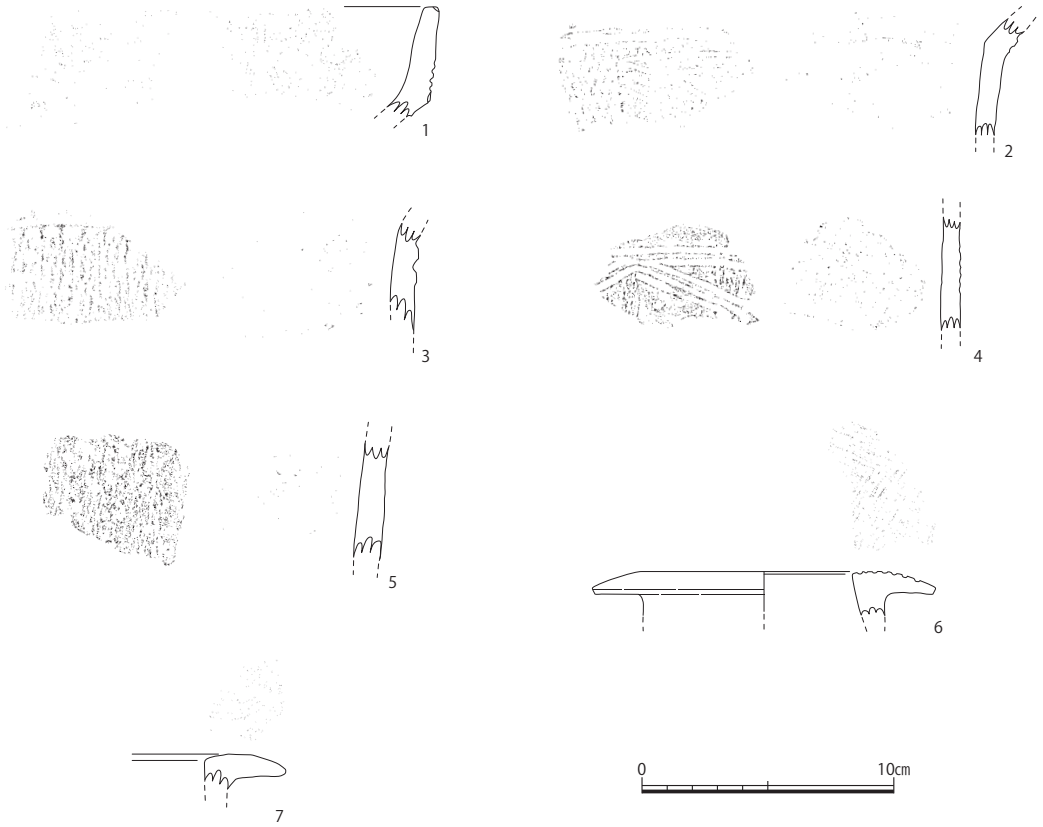
上油堀遺跡のTP20からは縄文晩期の土器が確認され、遺物包含層もしっかりと残る状況が確認された。

第2図　三会原第3地区工区割及び試掘坑配置図

(2)　範囲確認調査出土遺物

1～5は平栫・塞ノ神式土器群の資料で、いずれも3層相当層から出土した。**1**は頸部で屈曲し、直線的に立ち上がる口縁部の資料である。口唇部は平坦に作られる。口唇部外面と屈曲部外面に刻目を施した後、屈曲部直上に横位沈線が1条入る。外面上部は斜位「＼→／」沈線3条とそれを挟むように刺突連点文を施す。**2**はくの字に屈曲する頸部で、屈曲部内面に明瞭な稜を有する。外面は屈曲部に2条の横位沈線が認められ、下部は横位及び斜位沈線の間に1条ないし2条の刺突連点文を施した後に縦位の撚糸文をいれる。内面は丁寧なナデ調整を施す。**3**はくの字に屈曲する胴部片で、縦位の撚糸文をいれた後に沈線及び連続刺突文で区画する。**4**は胴部片で、縦位の撚糸文を配した後に横位沈線２条を施し、その上から山形状に沈線を3条施文する。**5**はやや厚手の胴部片で、4条の撚糸文が認められる。

6・7は耳栓である。3層相当層から出土した。いずれも胎土に角閃石を含み、在地の粘土を使用していると思われる。6の外面はナデ調整後、幅1～2㎜の沈線を7条、山形状に配する。外縁部にも1条の沈線が見られ、外縁端部は面取りされる。文様帯裏面は粗いナデを施し、屈曲部には爪痕が残る。**7**の外面はナデ調整後、幅1～2㎜の沈線を7条円形に配し、その対に沈線を円形に区画し連続刺突文を円形状に充填する。外縁端部は面取りされる。



第3図　範囲確認調査出土遺物(Ｓ=1/3)

2.　本調査

遺跡名は長崎県遺跡地図に掲載されている「上油堀遺跡」「下油堀遺跡」を使用した。

本調査は、上油堀遺跡272㎡、下油堀遺跡2,872㎡を対象として本調査を実施した(第5図)。

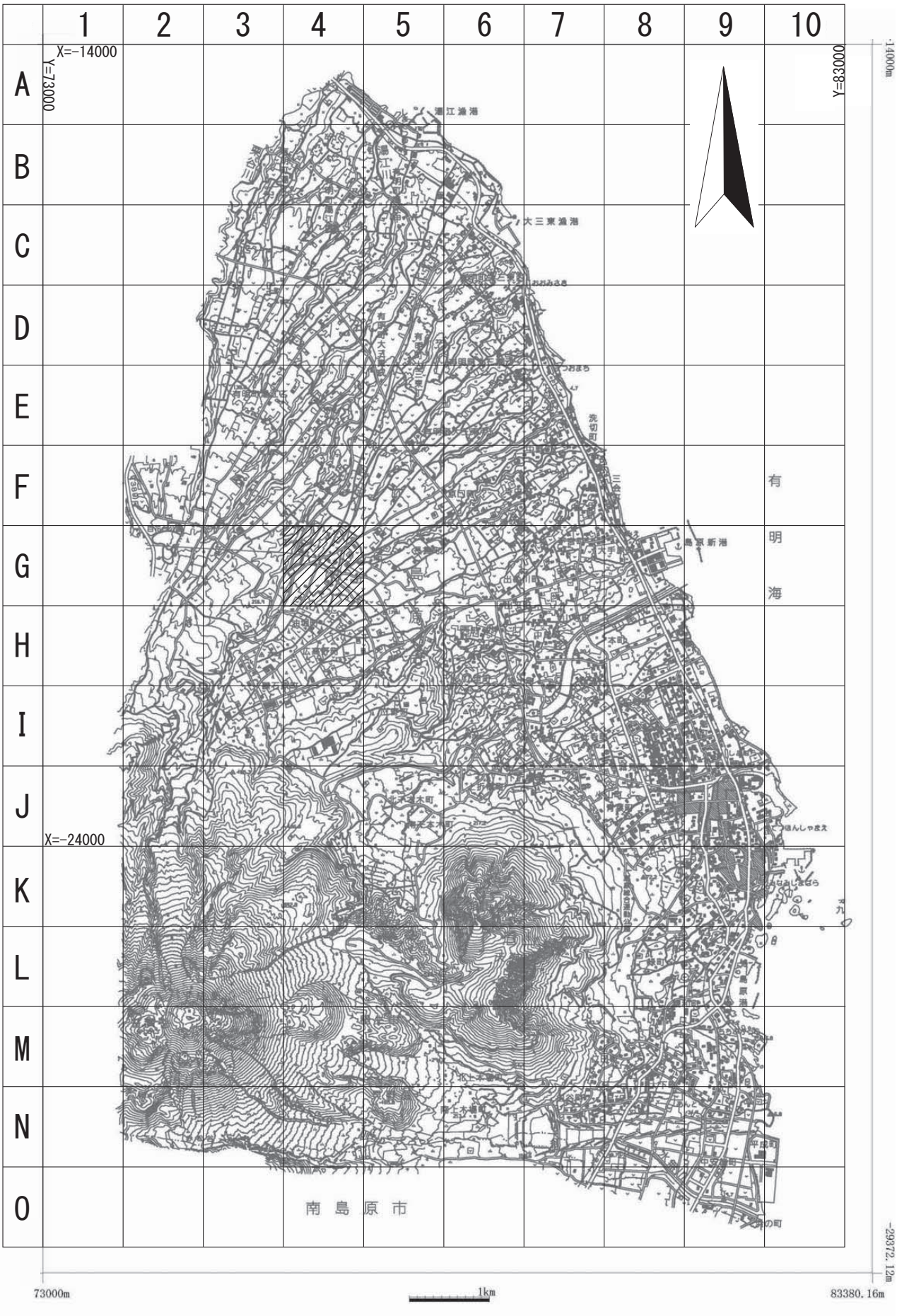
グリッドは平面直角座標系(第Ⅰ系)を基準に、島原市全域を大･中･小グリッドの３区分を用いて、発掘調査区にグリッド杭を設置した(第4図・第5図)。グリッドの起点はＸ=-14,000m、Ｙ=73,000mの交点とし、大･中･小グリッドはそれぞれ1,000m四方、100m四方、4m四方を最小単位とした。各々のグリッドの名称は「行名称-列名称」で表記し、南北行が始点より北から南へアルファベット１文字で表示し、始点から南の行へA→B→C…の順に使用した。東西列が始点より西から東へ算用数字で表示し、始点から東の列へ1→2→3…の順に使用した。発掘調査で使用する基本グリッドは小グリッドによる区画で、発掘調査における遺構配置図や遺構図の作成、出土した遺物や表面採集遺物などの取り上げ、報告書中における遺構説明など、すべて今回設定した小グリッドに基づいて行った。

下油堀遺跡は調査区を10区にわけ、平成28年度に１区から４区の発掘調査を実施し(第9図)、平成29年度に下油堀遺跡の５区から10区の発掘調査と上油堀遺跡の発掘調査を実施した(第9図・第10図)。

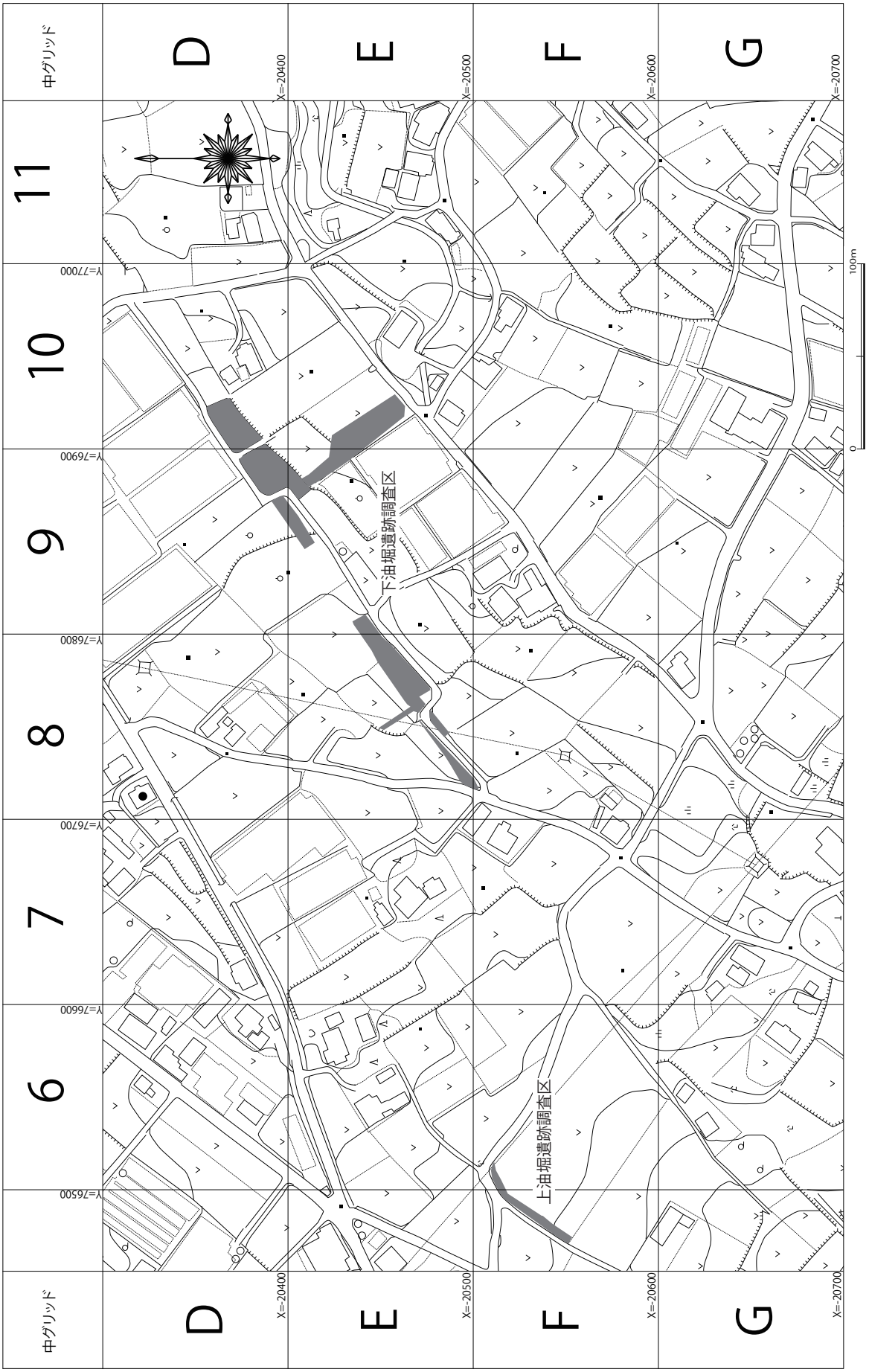
調査は重機によって表土剥ぎを行い、調査対象地に４m四方のグリッドを設定し、層位ごとに遺構と遺物の検出作業を人力によって行った。

遺構実測は個別遺構図(S=1/10)、土層図(S=1/20)の作成を行い、これ以外の遺構は全体遺構実測図(S=1/100)を作成した。遺構写真は35m/m白黒フィルム及びカラーリバーサルフィルムを使用し調査員が随時撮影を行った。調査区全体写真は6×6判白黒フィルム、6×6判カラーリバーサルフィルムを用いて、ラジコンヘリによる空中写真撮影を行った。年代が特定できるなど重要な遺物については、出土位置の座標観測を行った。

整理調査は島原市埋蔵文化財収蔵庫で遺物の洗浄と注記作業を行い、株式会社大信技術開発作業場で注記作業と復元作業及び遺物実測、デジタルトレース、拓本、写真撮影を行った。遺物については、報告書掲載遺物をⅠ種、座標観測遺物等をⅡ種、それ以外のものをⅢ種に分類し、収蔵用のプラスチックコンテナに収納した。コンテナを判別しやすいように、Ⅰ種には赤ラベルを、Ⅱ種には青ラベルを、Ⅲ種には黒ラベルを貼り付け、出土遺構･遺物の内容を明記している。出土資料及び全ての記録資料は平成29年度現在、島原市埋蔵文化財収蔵庫で保管しており、遺物の一部は大野原遺跡展示館で展示予定である。



第4図　島原市大グリッド図



第5図　中グリッド及び調査区配置図

第Ⅲ章　上油堀遺跡発掘調査

上油堀遺跡において発掘調査を行った調査区を以下、上油堀１区とする。

第1節　基本層序

今回の調査において確認した上油堀1区の基本層序は以下に示す5層である(第7図)。

1層　暗褐色土～黒褐色土。耕作土。現代に形成された堆積した層である。雲仙普賢岳の平成噴火時の火山灰含む。

2層　黒色土。遺物を包含するが、耕作機械の影響を強く受けた層。粘性は弱い。

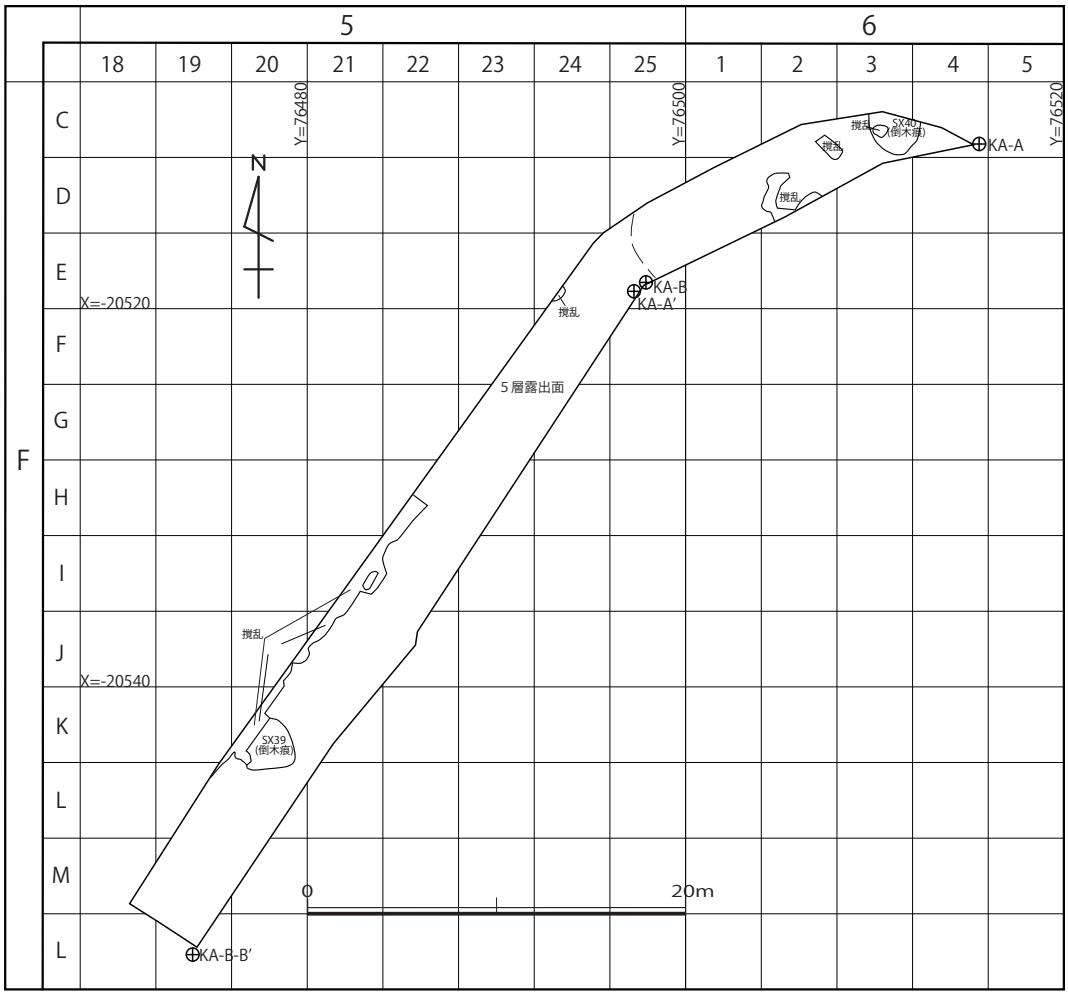
3層　褐色土。遺物包含層。1cm～50cm大の火山性の礫を少量含む。粘性が弱く、しまりも弱い。下位の4層との境界層理面が不規則な火炎構造を示すことから4層堆積後のかなり早い時期に形成された事が示唆される。

4層　黒褐色土。粘性が弱く、6mm以下の火山性と見られる細礫が少量含まれる。

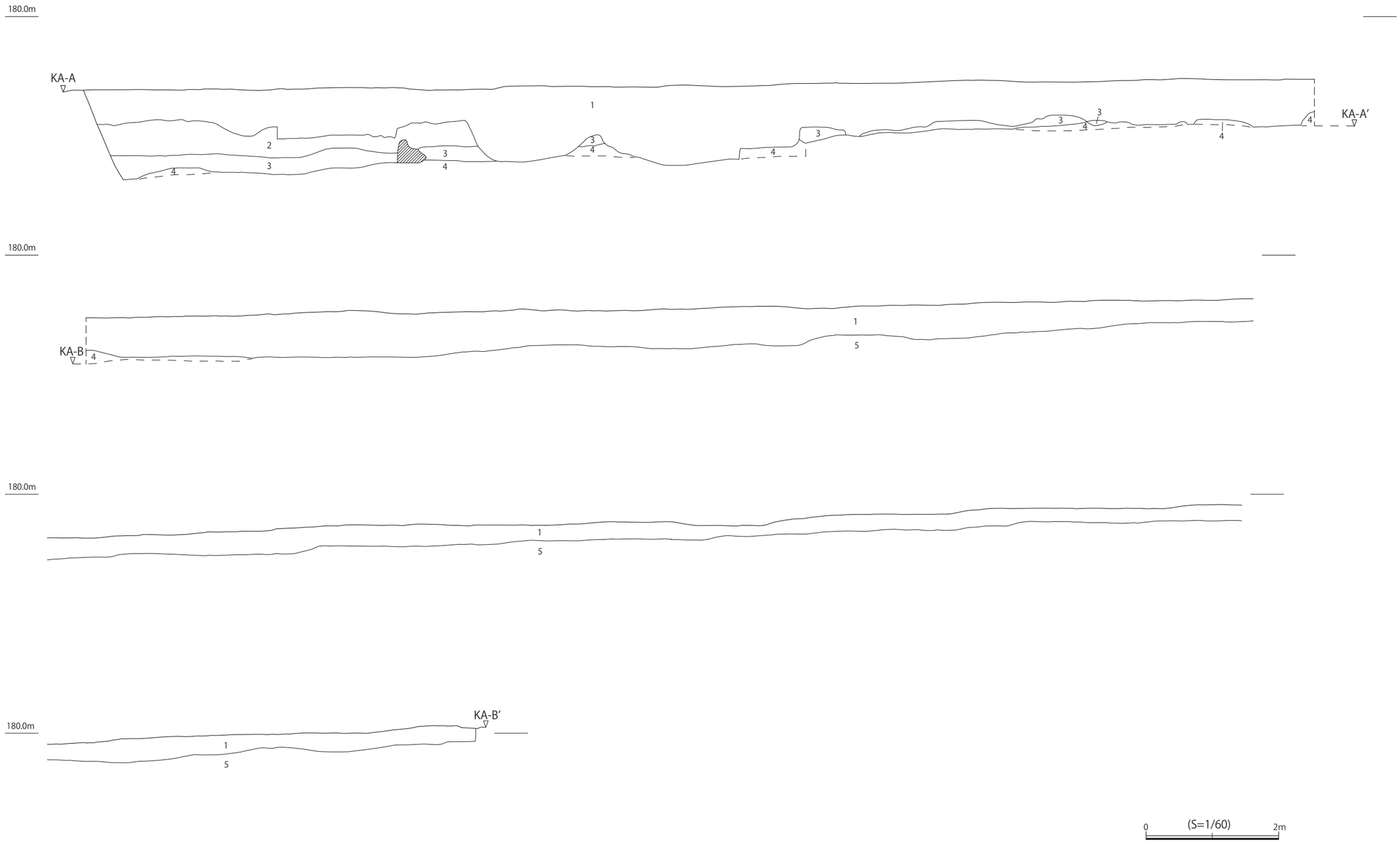
5層　灰黄褐色土。粒径10cm以下の火山性の粗礫～粗石を含み、粘性が非常に弱く、しまりが非常に強い。下位層の礫石原火砕流に伴う所謂“かしの実層”と呼ばれる火山性の降下堆積物[1)]と考えられる。

【参考文献】

1) 矢野綱之　1971 『島原半島に分布する“かしの実層”について』　佐賀大学農学部彙報　31:15-20



第6図　上油堀1区遺構及び土層配置図(Ｓ＝1/400)



第 7 図　上油堀 1 区土層実測図 (S ＝ 1/60)

第2節　上油堀1区遺構と遺物

1. 上油堀１区検出遺構

上油堀1区は、耕作により大きく削平を受け、遺物包含層である3層も調査区の海側、調査区面積の約1/5残存する程度で残りの4/5は4層及び5層上面まで掘削を受けていた。遺構とよべるものは確認されず、擁壁工事や耕作に伴う撹乱や倒木痕が検出された。撹乱及び倒木痕と認識できるものに関しては平面検出状況の記録を行っている(第6図)。

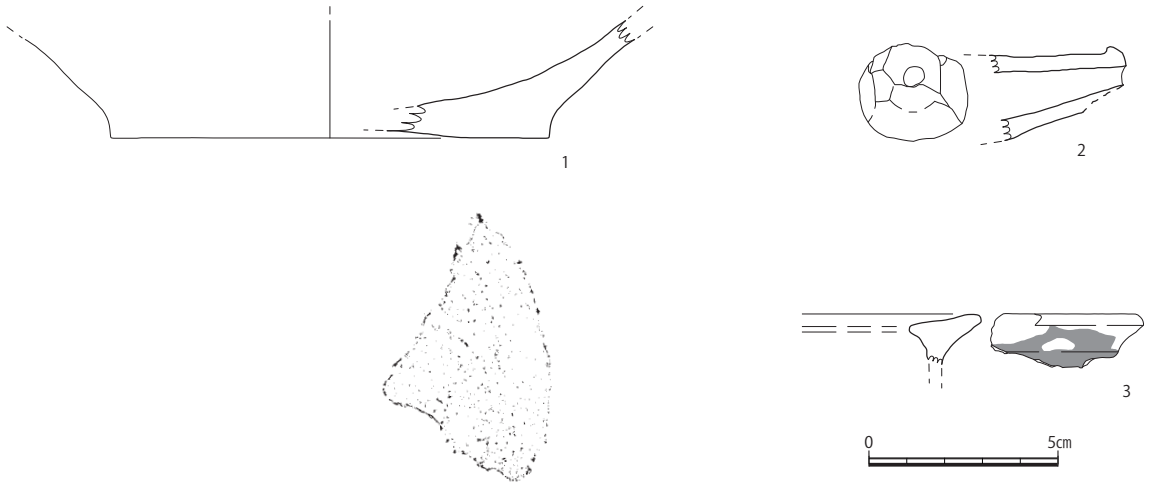
2. 上油堀1区出土遺物

上油堀1区は、削平の影響から遺物包含層の堆積状況が悪く、遺物も実測に耐えるものが少なかった。そこで表土などから出土した代表的な遺物を3点記載する(第8図)。

1は縄文時代晩期、深鉢形土器底部の資料である。復元底径は11.6㎝を測る。内外面はナデ調整を施し、底面は未調整である。わずかに上底を呈し、わずかに張り出しを持って立ち上がる。

2は注口土器の注口部で、胴部接着面から口にむかって内径が狭くなり、最大径で1.2㎝、最小で0.5㎝程度である。粗く成形され、注口下部は欠損する。

3は弥生時代中期の鋤先形を特徴とする甕形土器の口縁部。口縁部外面が上がり、内外面ともに丹塗りの痕跡がある。



第8図　上油堀1区出土遺物(Ｓ＝1/2)

第Ⅳ章　下油堀遺跡発掘調査

第1節　基本層序

今回の調査において確認した下油堀遺跡調査区の基本層序は以下に示す18層である(第11図・第12図・第13図・第14図・第15図)。

1層　暗褐色土～黒褐色土。耕作土。現代に形成された堆積した層である。各調査区で単層から4つの層に分層できるが、調査区ごとに耕作・造成方法が異なる為に様々な様相を示す。土層図では1a層・1b層というように分層を行っているが、ここではまとめて1層とする。

2層　黒色土。遺物を包含するが、耕作機械の影響を強く受けた層。粘性が弱く、耕作の状態によって5mm以下の細礫が少量含まれる調査区も見られる。

3層　褐色土。遺物包含層。1cm～50cm大の火山性の礫を少量含む。粘性が弱く、しまりも弱い。下位の4層との境界層理面が不規則な火炎構造を示す個所も多く、4層堆積後のかなり早い時期に形成された事が示唆される。

4層　黒褐色土。粘性が弱く、6mm以下の火山性と見られる細礫が少量含まれる。

5層　灰黄褐色土。粒径10cm以下の火山性の粗礫～粗石を含み、粘性が非常に弱く、しまりが非常に強い。下位層の礫石原火砕流に伴う所謂“かしの実層”と呼ばれる火山性の降下堆積物[1)]と考えられる。

6層　暗オリーブ色礫層。粒径1cm以下の中礫を主体とし、粘性が非常に弱く、しまりが非常に強い。1万9千年～2万4千年前に形成された礫石原火砕流層[2)-3)]と考えられる。

7層　褐灰色砂岩層。5mm以下の細礫を少量含む砂質を主体とした層。

8層　暗オリーブ色砂岩層。1mm以下の中砂を主体とした層。粘性が非常に弱く、しまりが非常に強い。

9層　黒褐色土。しまりが非常に強く粘性が弱い。火山性だと考えられる黄褐色を中心とした粗砂～細礫を含む。

10層　黒褐色土。しまりが強く、褐色土と白色中砂を含む。

11層　黒褐色土。しまりが非常に強く、白色中砂を多量に含む。縦方向に裂罅が多数走る。

12層　暗褐色土。白色中砂と黒褐色土を含む。粘性が強く、しまりも非常に強い。

13層　黒褐色土。白色中砂を少量含む。粘性が強く、しまりも強い。

14層　褐色土。稀に火山性砂礫を含む火山灰層

15層　褐色土。火山性砂礫を10％程度含む火山灰層

16層　褐色土。火山性砂礫を1％程度含む火山灰層

17層　礫層。数cm～20cm程度のやや円磨された火山礫が主体で、礫間の土は、上位の16層から下位の18層の土へ連続的に遷移する。

18層　褐色土。1mm～2cmの火山性の粗砂～中礫を多量に含み粘性が非常に弱い。

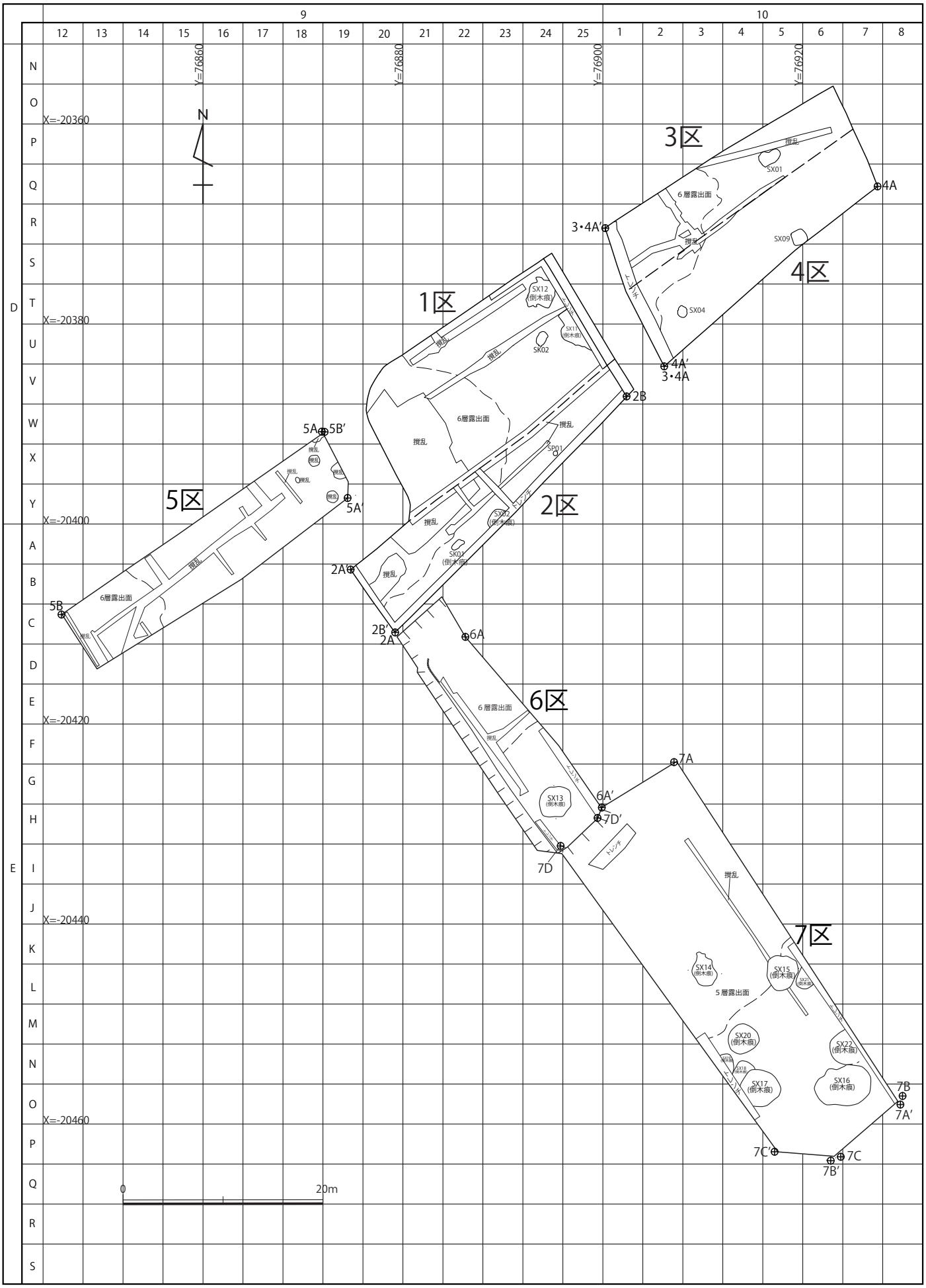
※７・８・９層は、6層の礫石原火砕流の流入によって変質形成された層と考えられる。

【参考文献】

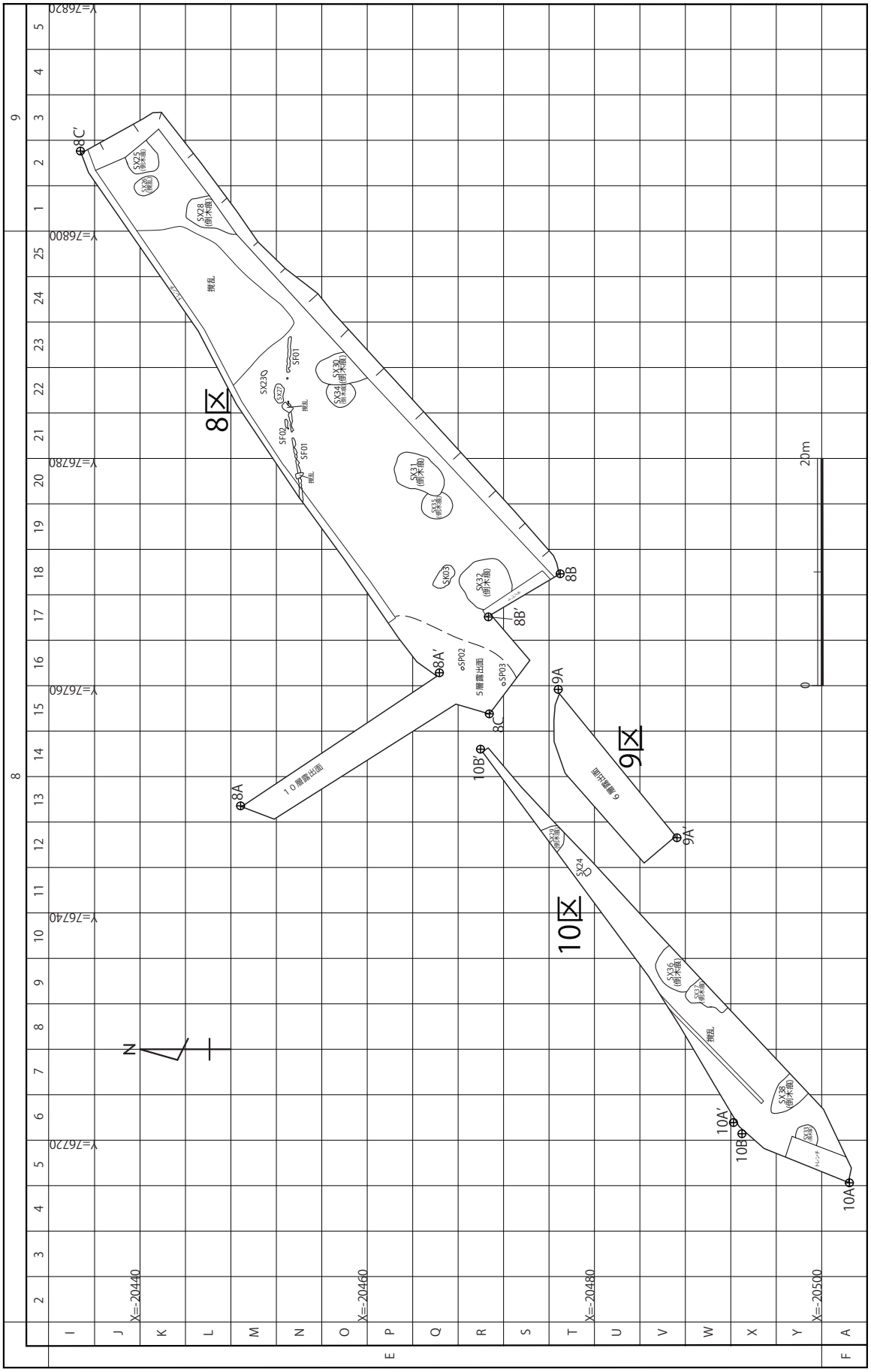
1) 小林哲夫・中田節也　1991 雲仙火山，火砕流・岩屑なだれ堆積物の^{14}C年代と発達史 日本火山学会講演予稿集　1991年秋季大会　140

2) 渡辺一徳・星住英夫　1995 雲仙火山地質図　火山地質図8　地質調査所

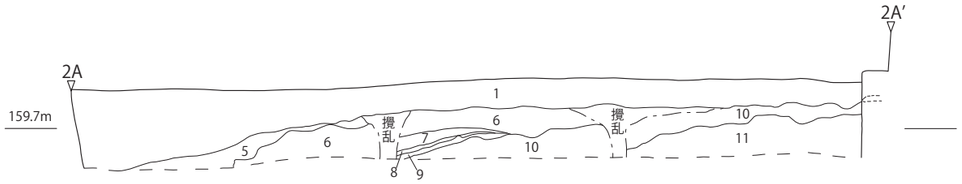
3) Reimer et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26 cal kyr BP. Radiocarbon 46, 1029-1058



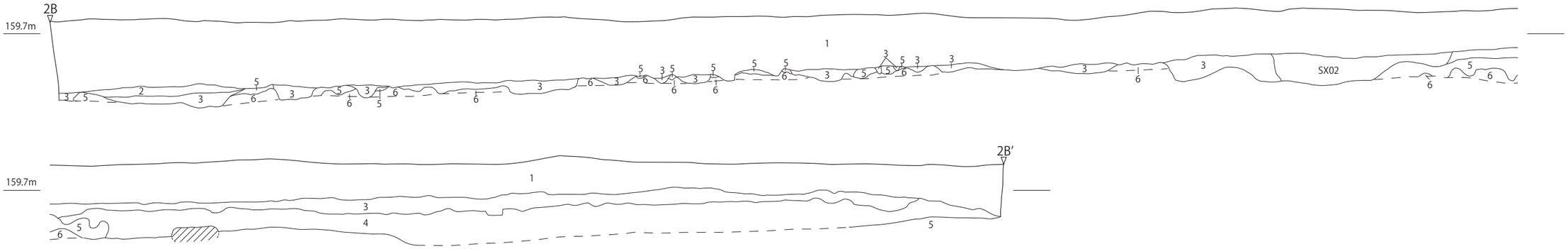
第9図　1区~7区土層配置及び遺構配置図(S＝1/500)



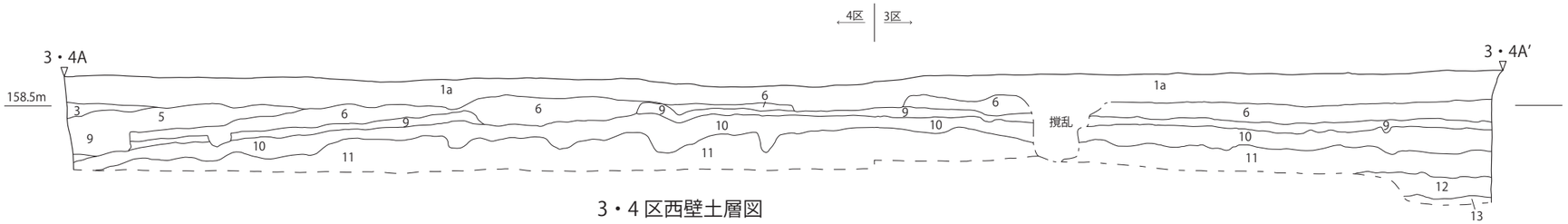
第10図　8区~10区土層配置及び遺構配置図(Ｓ＝1/500)



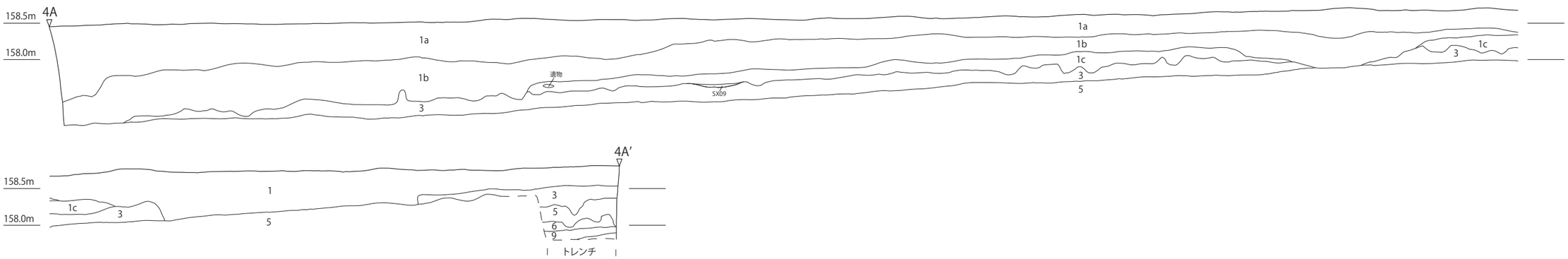
2 区西壁土層図



2 区南壁土層図



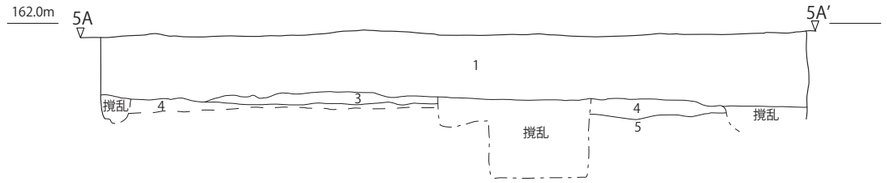
3・4 区西壁土層図



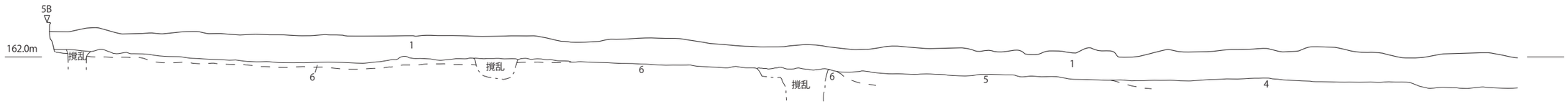
4 区南壁土層図

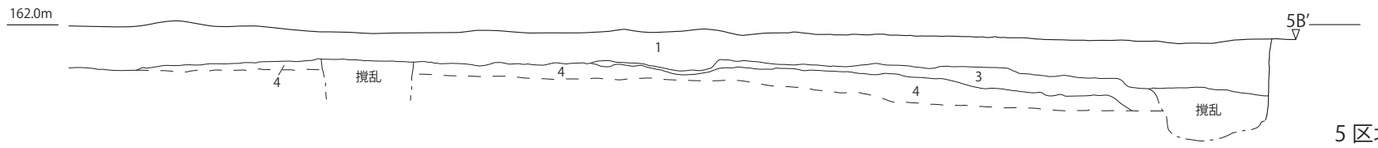
第 11 図　2 区・3 区・4 区土層実測図 (S ＝ 1/60)

0 (S=1/60) 2m

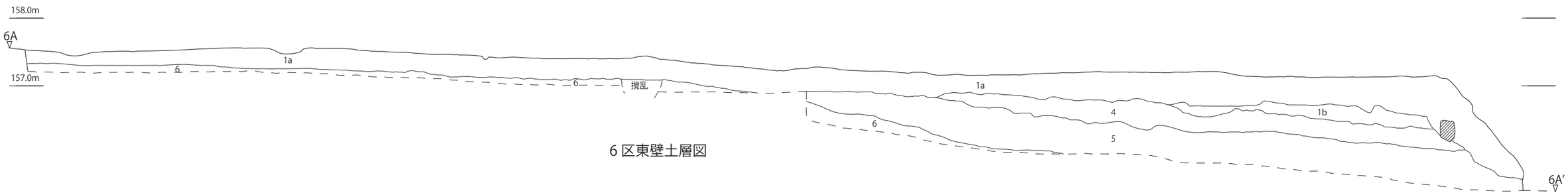


5 区東壁土層図





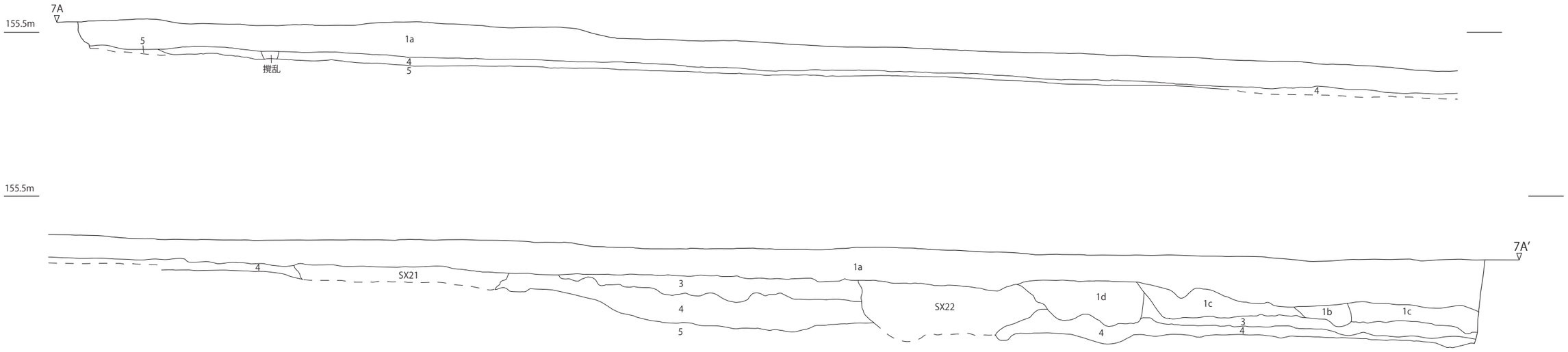
5 区北壁土層図



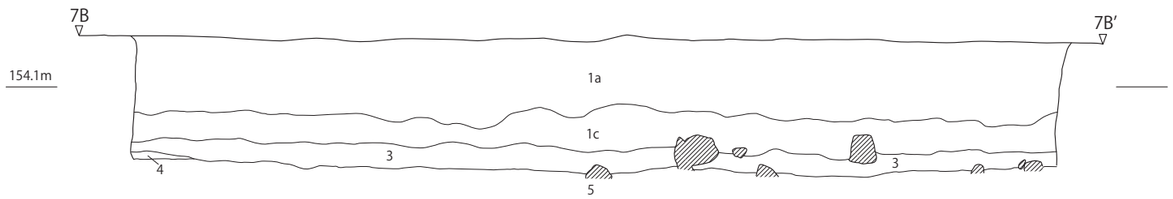
6 区東壁土層図

0 (S=1/60) 2m

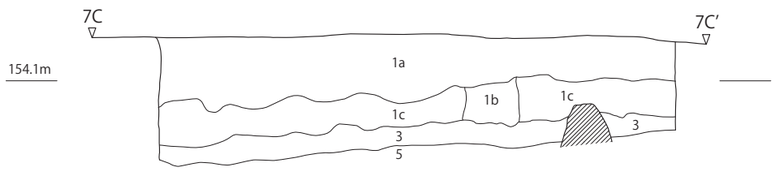
第 12 図　5 区・6 区土層実測図 (S ＝ 1/60)



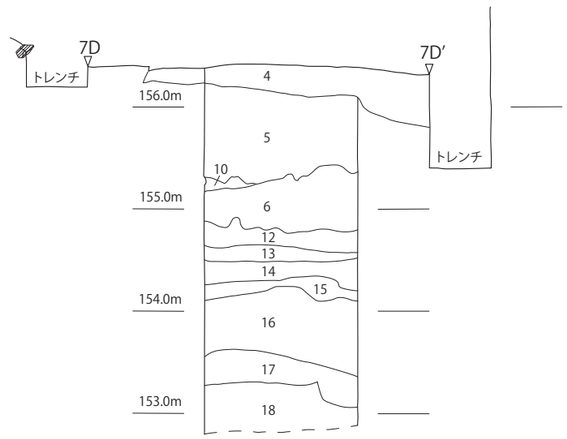
7 区東壁土層図



7 区南壁土層図 -1



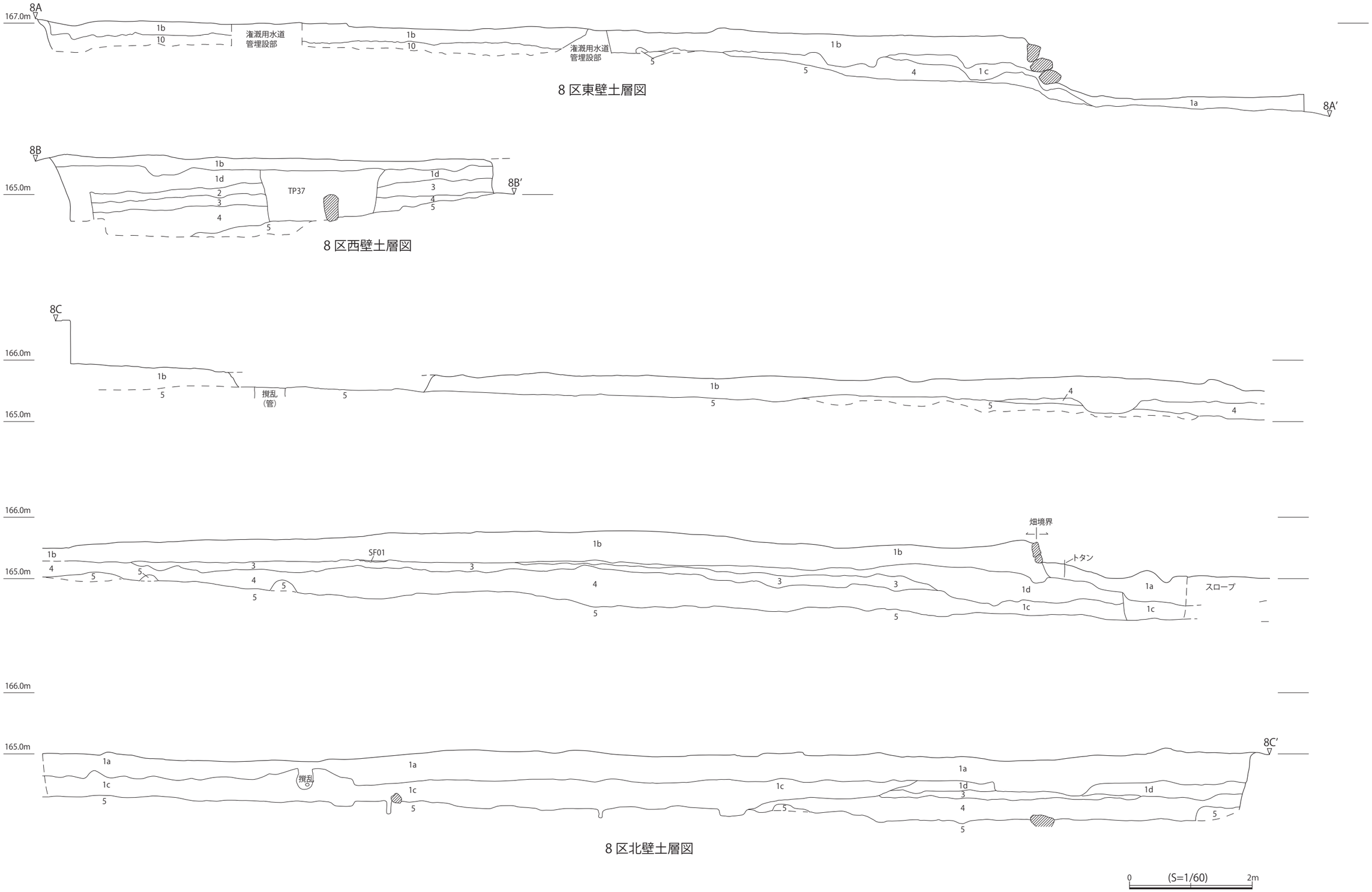
7 区南壁土層図 -2



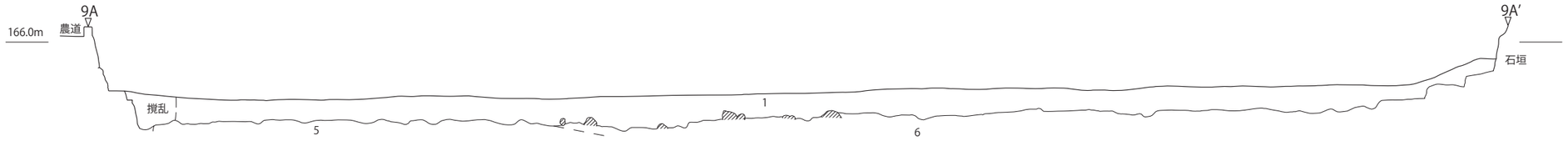
7 区北壁トレンチ土層柱状図

0 (S=1/60) 2m

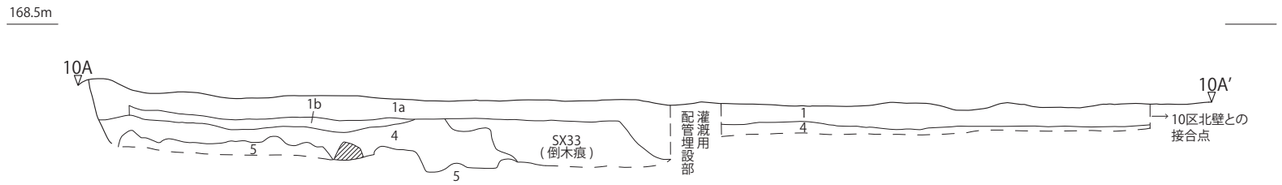
第 13 図　7 区土層実測図 (S ＝ 1/60)



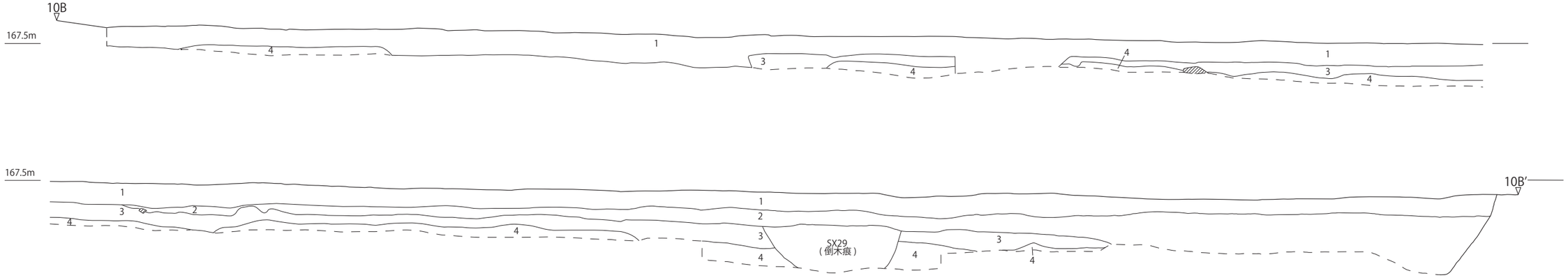
第 14 図　8 区土層実測図 (S ＝ 1/60)



9 区南壁土層図



10 区西壁土層図



10 区北壁土層図

0 (S=1/60) 2m

第 15 図　9 区・１０区土層実測図 (Ｓ＝ 1/60)

第２節　遺構と遺物

１．検出遺構

下油堀遺跡地区においては、1区～10区を設け発掘調査を行った(第9図・第10図)。島原半島有数の耕作地帯ともあって耕作やそれに伴う造成工事によって大きく削平されている部分も多い。そのような状況であっても道路状遺構や落し穴状遺構等を検出した。また多くの倒木痕も検出した。調査中、倒木痕と判断できたものに関しては、検出状況を記録し、状況によっては断面堆積状況の写真記録を行った。以下、遺構と判断されるもの、遺構の可能性があるもの、またそれに伴う出土遺物について報告を行う。

(１)土坑

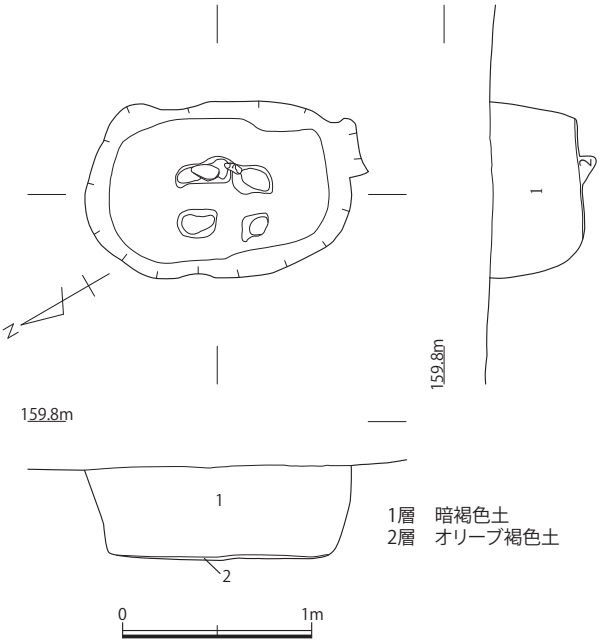
SK02

遺構(第16図)

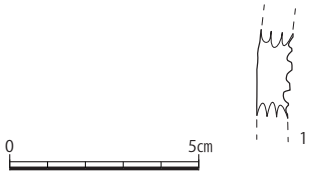
5層かしの実層を掘削して設けられた楕円状の土坑である。1区D9-U24グリッドに位置し、表土直下の５層上面で検出した。耕作機械によって上面は掘削されているものと思われる。底部に凹みが確認されたが、逆茂木等の遺構とは認識できなった。掘削等の影響により生じた凹みと思われる。埋土は２層に分層でき1層目には塞ノ神式土器と思われる土器片を含む。2層目は底面に薄く堆積した層であった。

遺物(第17図)

1は平栫式系土器の胴部片か。横位の刺突文の間に1条あるいは2条の横位沈線を配する。内面はナデ調整を施す。



第16図　SK02実測図(Ｓ＝1/40)

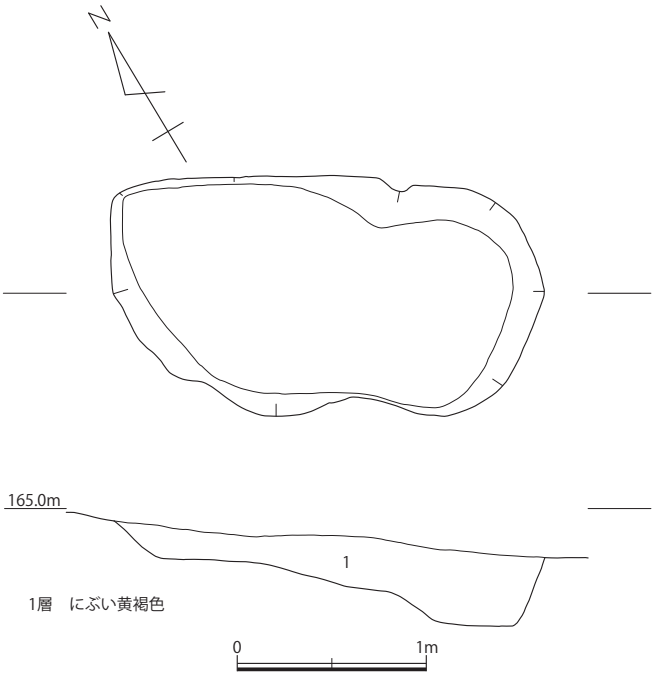


第17図　SK02出土遺物実測図(Ｓ＝1/2)

SK03

遺構(第18図)

8区E8-Q18グリッドに位置し、4層上面において検出した。3層掘削中に上面付近から遺物(第45図99)が出土した。3層上面より掘り込まれた土坑の可能性がある。埋土は単層で、しまりが強く粘性が弱い、にぶい黄褐色土である。1㎜～5㎜大の礫と2㎜～3㎜大の炭化物を少量含む。縄文時代晩期以降の遺構と考えられる。



第18図　SK03実測図(Ｓ＝1/40)

遺物(第19図)

1～3は縄文時代後・晩期の土器である。

1は外反して立ち上がり、屈曲して直線的な短い頸部を持つ口縁部である。口唇部は平坦に作られ、胎土には金雲母を含む。屈曲部内面に段を持ち、外面は口縁部文様帯に２条の横位沈線を施す。

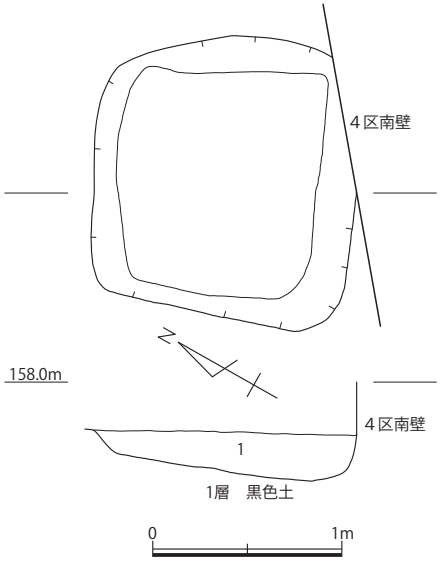
2は外反して立ち上がり、屈曲して緩やかに外反する頸部を持つ口縁部。口唇部は平坦に作られ、屈曲部外面は明瞭な陵を持つ。口縁部文様帯には太めの横位沈線が２条施される。

3は胴部が外反しながら立ち上がり、屈曲して直線的に立ち上がる頸部を持つ。内外面ともに粗いナデ調整が施される。

第19図　SK03出土遺物実測図(Ｓ＝1/2)

SX09(第20図)

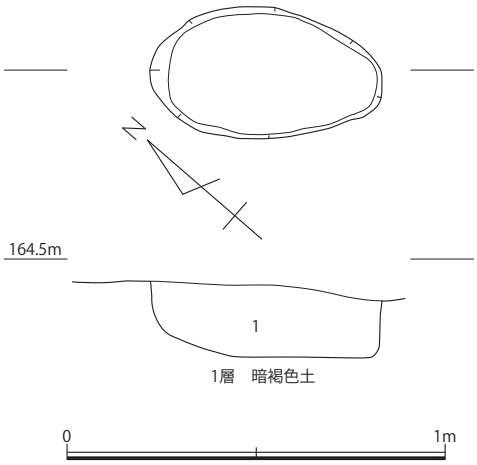
4区D15-R5グリッドにおいて検出した遺構である。1c層(耕作機械の影響を強く受けた耕作土)直下より掘込まれた隅が丸い方形土坑である。埋土には炭化物及び焼土、土器の小片を含むが非常にしまりの弱い埋土である。比較的新しい時代の土坑と思われる。



第20図　SX09実測図(S＝1/40)

SX23(第21図)

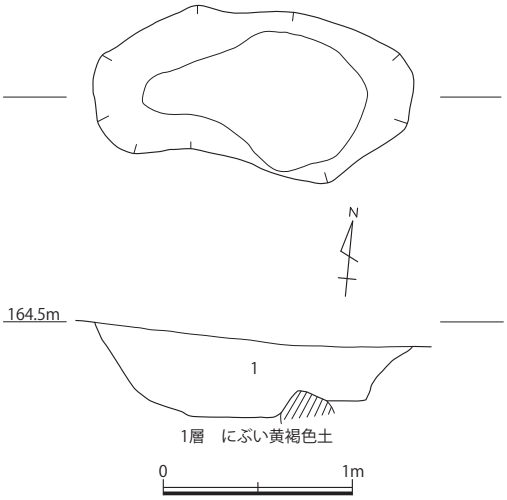
8区E8-M22グリッドにおいて検出した土坑である。平面形は卵形であり3層上面において検出した。埋土は暗褐色土で3㎜～5㎜大の礫を含み遺物は含まない。人為的に掘り込まれた土坑の可能性がある。



第21図　SX23実測図(S＝1/20)

SX27(第22図)

8区E8-N22グリッドに位置し、3層上面において検出した土坑である。平面形は歪な楕円形である。埋土は単層で、しまりが強く粘性は弱い、にぶい黄褐色土である。2㎜程の炭化物と思われる粒を微量含む。遺物は含まない。人為的に掘り込まれた土坑の可能性がある。



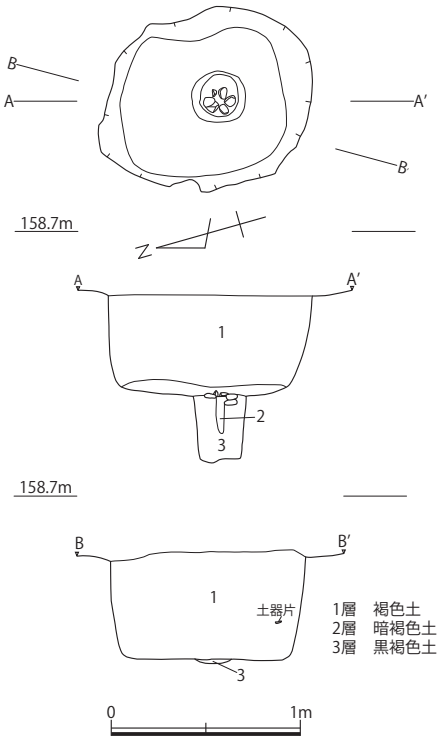
第22図　SX27実測図(S＝1/40)

(2)落し穴状遺構

SX04

遺構(第23図)

4区D10-T2グリッドに位置し、表土直下の5層上面で確認した遺構である。上面は耕作等により大きく掘削を受けており本来の深さは不明である。平面形状は円形に近い楕円状であり、底部にピットを設け、断面形状は漏斗状になる。形状から落し穴遺構の可能性が考えられる。底部ピットの平面検出時、中央に何かを取り囲むように配置された礫を確認した。断面では礫に取り囲まれた中央に縦に細長い痕跡を確認した。棒状の何かを立てていた可能性がある。埋土より平栫・塞ノ神式土器片が出土している。このことから、縄文時代早期、平栫・塞ノ神式土器の時期以前に構築された遺構の可能性がある。



第23図　SX04実測図(Ｓ＝1/40)

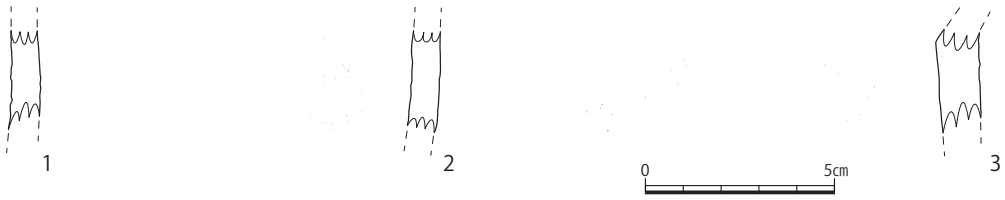
遺物(第24図)

1～3は縄文時代早期、平栫・塞ノ神式土器群の資料である。

1は胴部片で、外面は刺突連点文と撚糸文を施す。

2は胴部片で撚糸文を施す。

3はくの字に屈曲し内面に明瞭な陵を持つ胴部片。斜位もしくは曲線状の撚糸文を施した後に沈線で区画する。



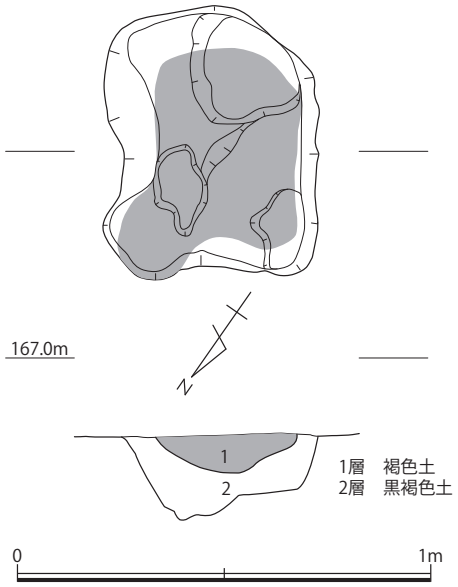
第24図　SX04出土遺物実測図(Ｓ＝1/2)

(３)焼土遺構

SX24

遺構(第25図)

10区E8-T11グリッドに位置し、3層上面より検出した遺構である。平面形は方形に近い歪な形状で炉跡の可能性がある遺構である。埋土は2層に分層でき、1層目はしまりが弱く粘性も弱い褐色土で焼土と思われる。層中からは縄文時代後期頃の坂の下式土器と考えられる底部片(第26図1)が出土している。2層目は、しまりが強く粘性は弱い黒褐色土で５㎜程の礫を少量含む。底面は歪で凹凸が激しく人為的に堀込まれ、形成されたものとは考えにくい。2層目は被熱により変色し形成された土層の可能性が考えられる。出土遺物から縄文時代後期以降に構築された遺構と考えられる。

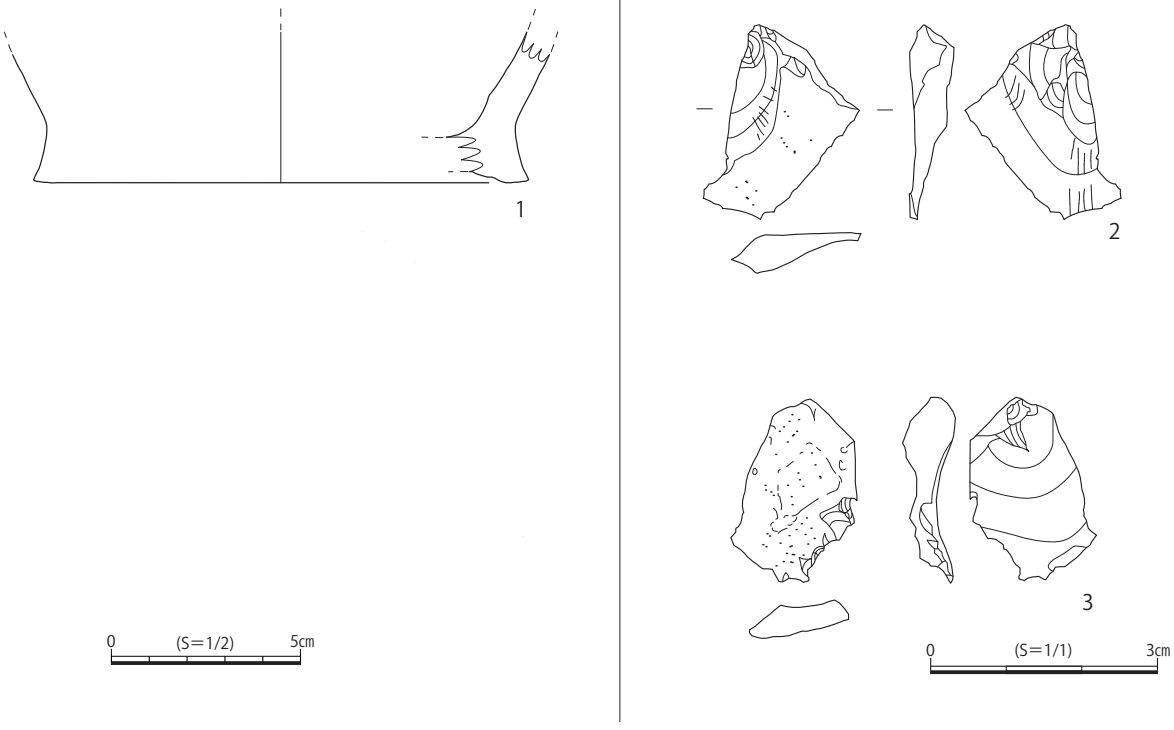


第25図　SX24実測図(Ｓ＝1/20)

遺物(第26図)

1は縄文時代後期の坂の下式土器と思われる底部。上底を呈し小さな張り出しを持って立ち上がる。胎土に滑石は含まれない。復元底径は13.2㎝を測り、底面に鯨底痕と思われる痕跡が認められる。

2・3は自然面を残した黒曜石剥片。



第26図　SX24出土遺物実測図(Ｓ＝1/1・1/2)

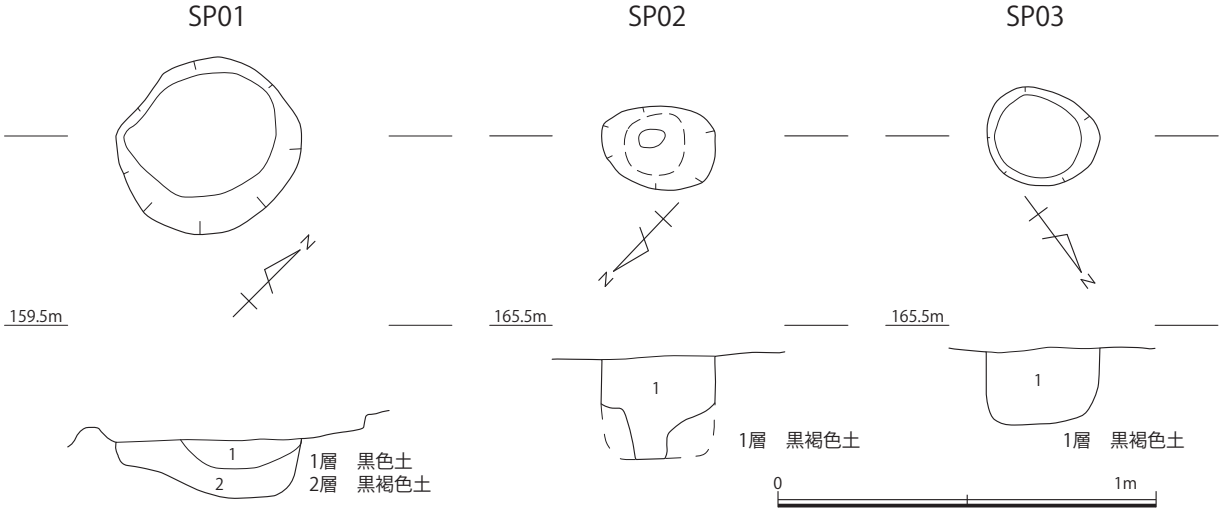
(4)ピット

SP01・SP02・SP03(第27図)

SP01は、2区D9-X24グリッドに位置し、5層上面において検出した。5層上面は非常に凹凸が激しくその凹み部分とも認識できるが埋土は2層に分層できた。遺構の可能性は否定できない。

SP02は、8区E8-R16グリッドに位置し、表土直下の4層上面において検出した。上面は耕作により削平されているものと思われる。近くにSP03を確認したが他にピットらしき遺構は確認できなかった。SP03との関連性は不明である。断面形状は漏斗状である。埋土からは、遺物は確認されていない。

SP03は、8区E8-S16グリッドに位置し、表土直下の4層上面において確認した。上面はSP02と同様、耕作によって削平されているものと思われる。断面はU字形で埋土に遺物は含まない。

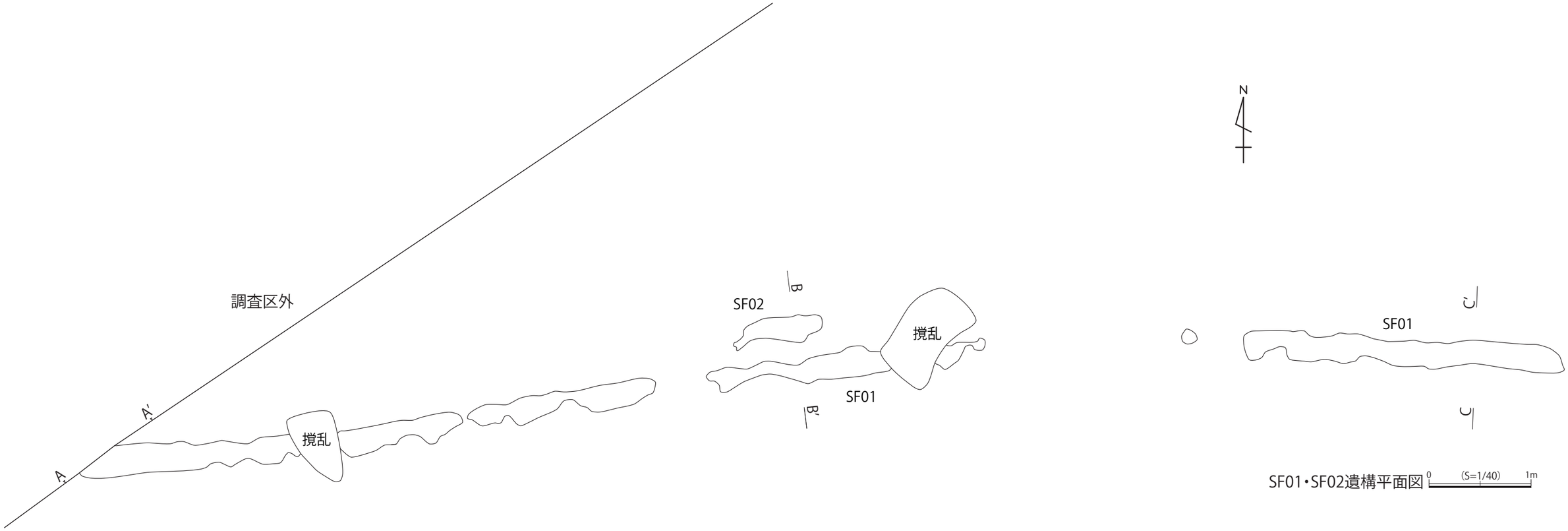


第27図　SP01・SP02・SP03実測図(S＝1/20)

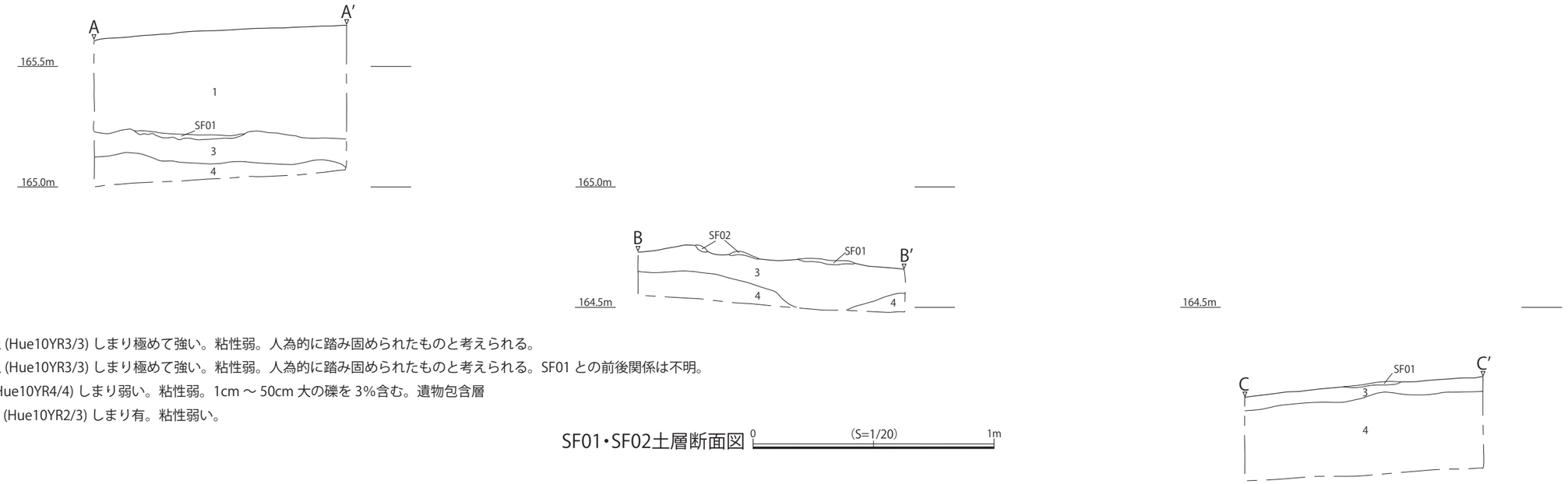
(5)道路状遺構

SF01・SF02(第28図)

8区E8-N20～E8-N23グリッドに位置し、3層上面より検出した道路状遺構である。SF01は、所々耕作等により撹乱を受け途切れている部分もあるが東西に延びる帯状の遺構である。東側は標高164.135mから西側は165.220mへと延びる。表面は非常に硬化しており中央付近が若干窪む。堆積は非常に浅く約2cm～3cm程度であり溝状に掘り窪めて新たに土を入れてたたきしめた可能性があるが、通路として使用さることにより自然に踏み固まって形成された可能性も考えられる。SF02はSF01に平行する遺構で表面は非常に硬化していた。帯状に連なる検出状況ではないが、堆積はSF01と類似している。SF01との前後関係は不明である。SF01とSF02共に構築または形成された時期は現在の畑地になる以前であろう。



SF01・SF02遺構平面図 0 (S=1/40) 1m



【土層注記】

SF01　暗褐色土 (Hue10YR3/3) しまり極めて強い。粘性弱。人為的に踏み固められたものと考えられる。

SF02　暗褐色土 (Hue10YR3/3) しまり極めて強い。粘性弱。人為的に踏み固められたものと考えられる。SF01 との前後関係は不明。

3 層　褐色土 (Hue10YR4/4) しまり弱い。粘性弱。1cm ～ 50cm 大の礫を 3%含む。遺物包含層

4 層　黒褐色土 (Hue10YR2/3) しまり有。粘性弱い。

SF01・SF02土層断面図 0 (S=1/20) 1m

第 28 図　SF01 及び SF02 実測図 (S ＝ 1/40・1/60)

2. 出土遺物

(1) 倒木痕出土遺物

各調査区において、多くの倒木痕を検出した(第9図・第10図)。以下、検出時及び半裁時に出土した遺物を掲載する。なお、SX13・SX14・SX15は付編において地質学的考察を行った。

SX11出土遺物(第29図)

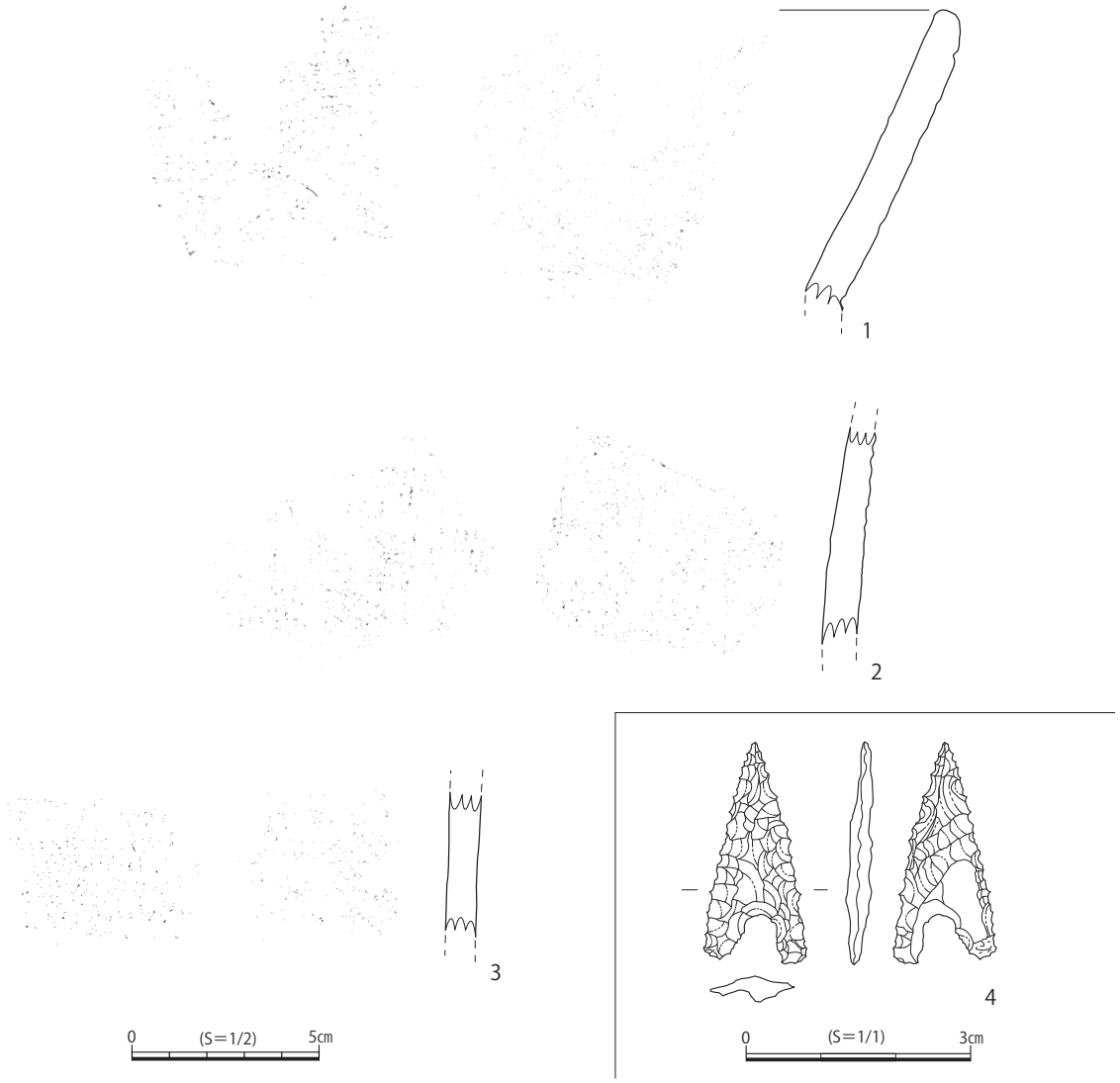
1〜**3**は縄文時代早期の塞ノ神式土器群の資料である。

1は厚手の口縁部で、屈曲部から緩やかに内湾して立ち上がる。口唇部は平坦に作り、屈曲部には横位沈線を施す。曲線状もしくは山形状に撚糸文を施した後に沈線によって区画する。

2は胴部片で、幅1㎝の撚糸文が4条認められ、横位沈線を施す。

3は胴部片で縦位の撚糸文を施す。

4は安山岩製の石鏃で裏面の一部を欠損する。二等辺三角形を呈し、U字の深い基部を持ついわゆる鍬形鏃である。両面ともに丁寧に加工されている。



第29図　SX11出土遺物実測図(S＝1/1・1/2)

SX12出土遺物(第30図)

1〜9は縄文時代早期、平栫・塞ノ神式土器群の資料である。

1は大きく開きながら立ち上がり、逆くの字に屈曲して肥厚する口縁部である。口唇部は平坦に作り、口唇部外面及び屈曲部外面に箆状工具による刻目を施す。外面上部は横位沈線と刻目の間を横位の刺突連点文で充填し口唇部刻目直下にも刺突連点文を施す。

2は胴部片で、撚糸文を施した後に沈線及び刺突連点文で区画する。

3はくの字に屈曲し、内面に明瞭な陵を持つ胴部片。撚糸文を施した後に斜位及び曲線状に沈線を施す。

4はくの字に屈曲し内面に明瞭な陵を持つ口縁部。口唇部は平坦に作り、外面には棒状工具による刻目が施される。屈曲部外面には曲線状もしくは横位の沈線が、外面上部には2条の横位沈線が施される。

5・6は厚手の口縁部。5は緩やかに内湾しながら立ち上がる。口唇部を平坦に作り、外面に細かい刻目を施す。外面には横位沈線が6条認められる。

6は口唇部を平坦に作り、外面に細かい刻目を施す。外面では2条の沈線が認められる。

7は胴部片で、撚糸文を配した後に2条の横位沈線を施す。

8は張り出しを持った胴部で、縦位の撚糸文を施す。

9は厚手の胴部片で、外面は半裁竹管状の刺突文と撚糸文の間を沈線で区画する。

10は安山岩製の磨石。両平坦面中央及び側面に、部分的に滑面がある。

SX13出土遺物(第30図)

1は逆くの字に屈曲し肥厚する平栫式土器の口縁部。口唇部を平坦に作り、摩耗しているが口唇部外面及び屈曲部外面に刻目を施す。外面上部は斜位沈線を2条配し、刻目との間を刺突連点文で充填する。外面下部は横位及び斜位の沈線もしくは短沈線が認められる。

SX14出土遺物(第31図・第32図)

1は安山岩製の打製石斧。左上端に突起状の基部を作出し、縁辺部を両面加工する。

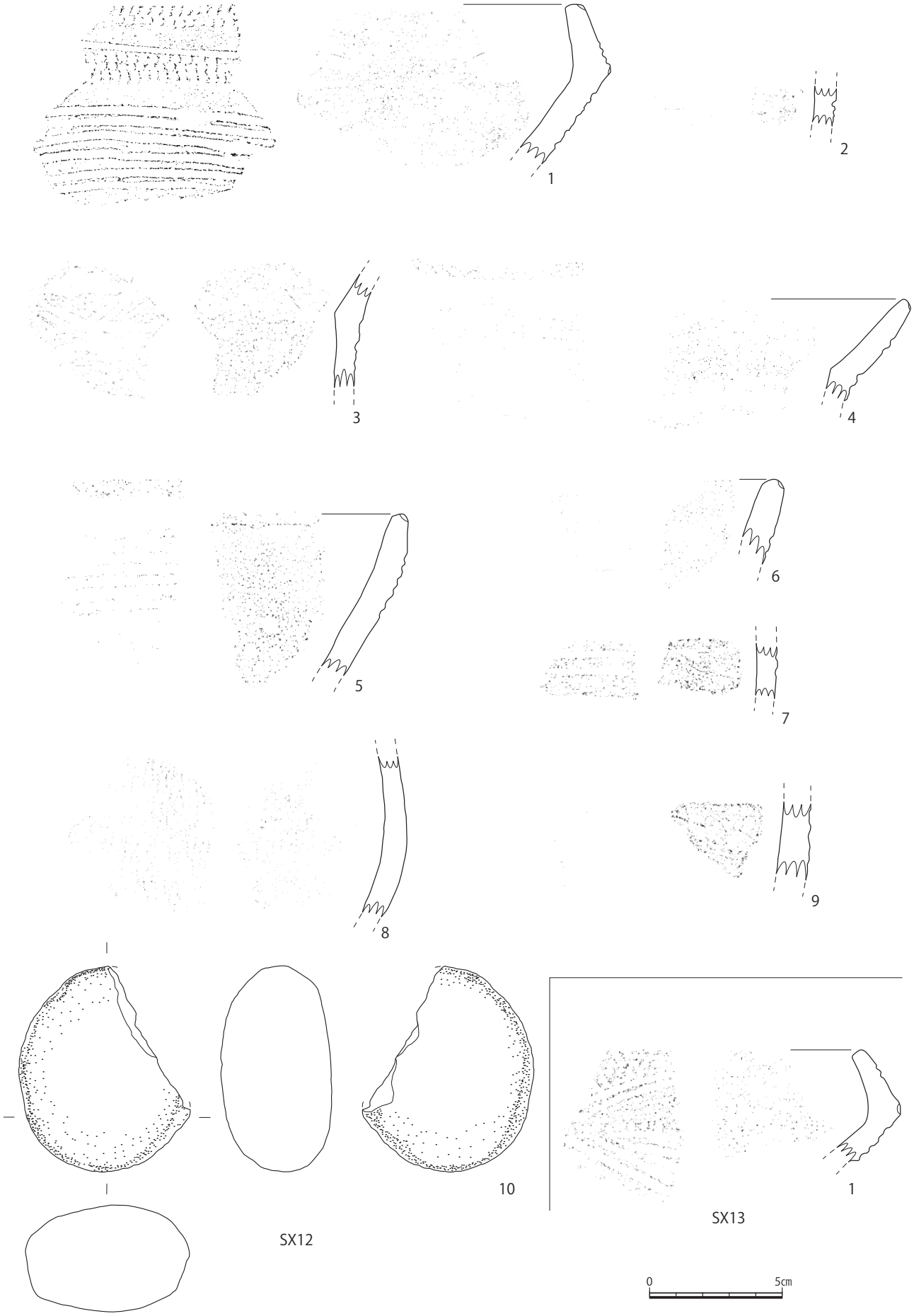
2は縦長の局部磨製石斧で、基部が先細りする形状となる。右側縁は下部のみ加工し、左側縁は基部のみ未加工で、それ以外は両面加工を施す。刃部に厚みを持たせ研磨する。

3はスクレイパーか。主要剥離面を残し、自然面も一部残る。裏面の下縁に細かい加工を施す。

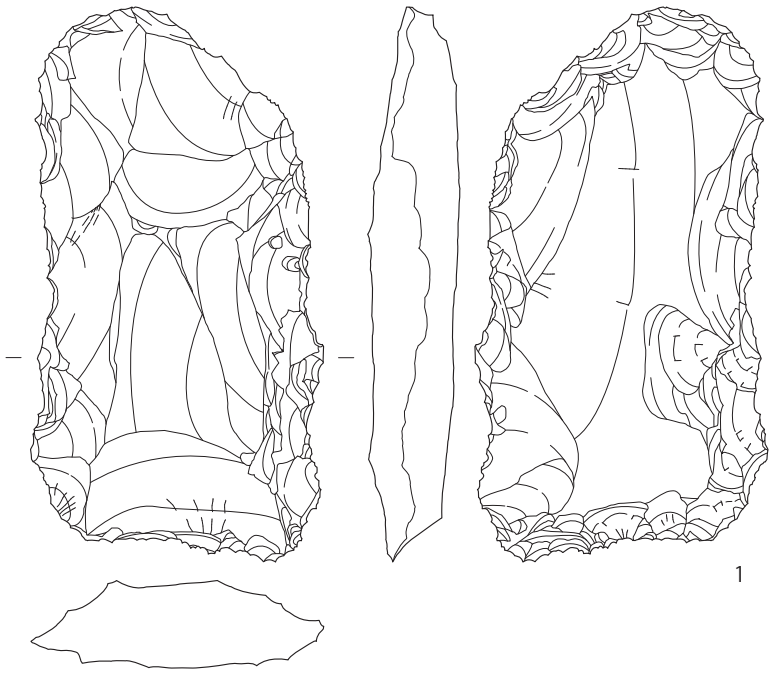
SX15出土遺物(第32図)

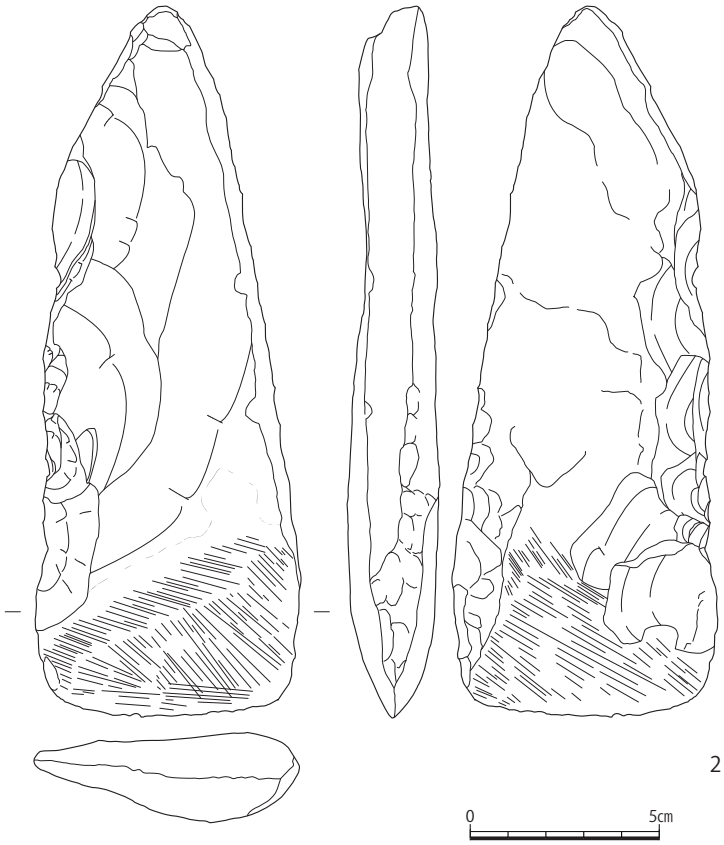
1は逆くの字に屈曲する平栫式土器の口縁部。口唇部を平坦に作り、屈曲部外面に刻目を施す。外面上部は幅１㎜の曲線状の沈線３条と刺突連点文1条を対にした幾何学文を呈する。外面下部は幅１㎜の横位沈線が３条認められる。

2は黒曜石製の石鏃。二等辺三角形状を呈し、U字の深い基部を持ついわゆる鍬形鏃。先端と片脚を欠損する。

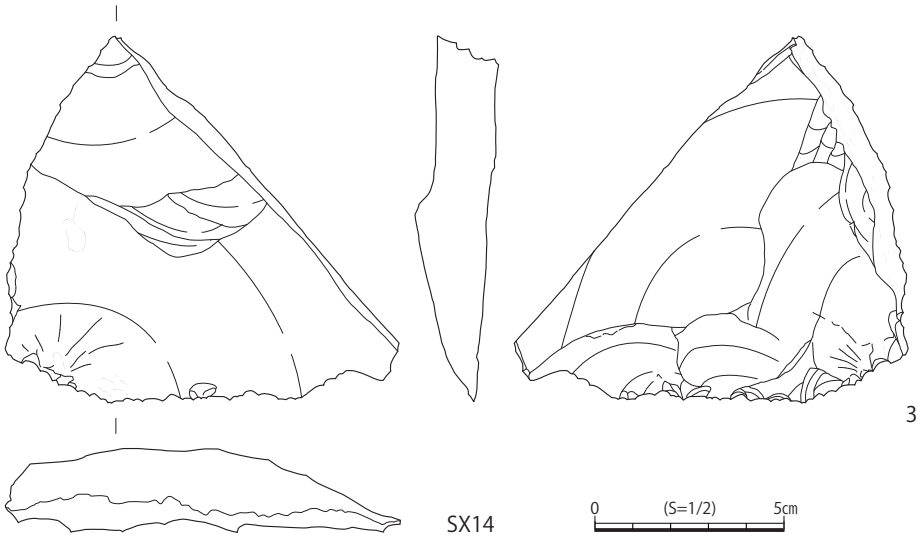


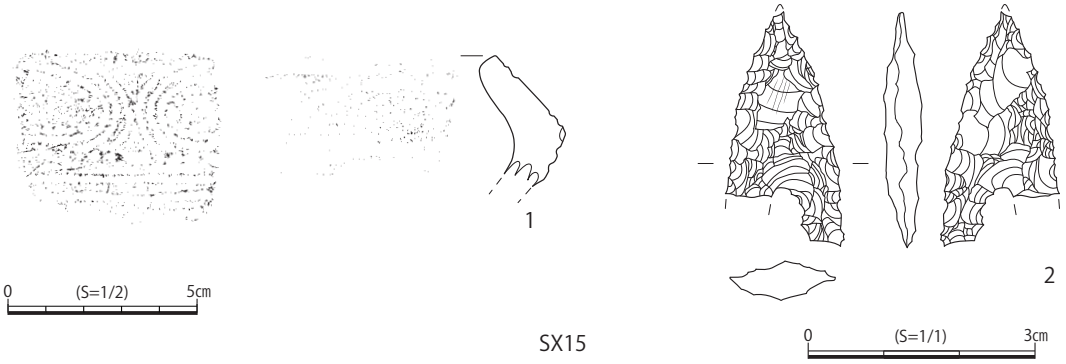
第30図　SX12・SX13出土遺物実測図(Ｓ＝1/2)





第31図　SX14出土遺物実測図(Ｓ＝1/2)





第32図　SX14(Ｓ＝1/2)・SX15(Ｓ＝1/1・1/2)出土遺物実測図

(2)　3層出土遺物

発掘調査中、各土層中から多くの遺物が出土した。以下、３層出土遺物を掲載する。

1区～7区3層出土遺物(第33図～第44図)

1区～7区の遺物包含層は縄文時代早期を主体とする土器が多く出土している。なかでも平栫・塞ノ神式土器群が大半を占め、次に押型文土器が続く。これらの中で特徴的なもの、実測に耐えうるものを掲載する。掲載した一部の接合遺物に関しては、第57図に出土位置を表している。

押型文土器(第33図・第34図・第57図)

押型文土器系は、1区～7区から多く出土している。おおむね田村式段階のもの考えられる。

1～5は楕円押型文の深鉢の資料である。**1**は、7区より出土した接合遺物である(第57図)。胴部から口縁部にかけて開きながら立ち上がり、口縁部で緩やかに外反する。復元口径は28.8㎝を測る。外面は全体に、内面は口縁部直下から2㎝程度まで、外面から内面にかけて連続して楕円押型文が施文される。**2**は、7区より出土した接合遺物である(第57図)。胴部から口縁部にかけての資料で、口縁部は肥厚し外反する。外面は1に比べて小さい楕円押型文を施し、内面は口縁部に原体条痕を2回に分けて施文する。口唇部にも原体条痕による刻目が施される。復元口径は32.2㎝を測る。**3**は胴部から口縁部にかけての資料で、緩やかに外反する。2と同様に口縁部を肥厚させ、外面は小さい楕円押型文を、内面は２回に分けて原体条痕を施文し、口唇部にも原体条痕による刻目を施す。**4**は底部に近い胴部と思われる。外面は粗大な楕円押型文を施す。**5**は胴部片で、外面は粗大な楕円押型文を、内面はナデ調整を施す。

6・7は押型文土器と共伴する壺形土器の資料である。**6**は、くの字に屈曲する口縁部の資料で外面は撚糸文と思われる。内面は横位の原体条痕を3～4条施した後に短い原体条痕を縦位に施す。口縁部外面→口唇部→口縁部内面の順で施文している。**7**は、壺形土器の頸部か。外面に撚糸文と思われる文様を施し、凸部分に刺突を施す。

8～10は手向山式土器新段階の胴部片資料と思われる。いずれも外面は綾杉状沈線が施され、内面はナデ調整される。なお、**9**の遺物に関して、３層出土として取り上げているがSX22との関連性が考えられる。

平栫・塞ノ神式土器(第34図～第42図・第57図)

11～74は縄文時代早期の平栫・塞ノ神式土器群の資料で、**11～42**は口縁部を屈曲させ肥厚させるもの、施文方法として沈線や刺突連点文、刻目を用いて幾何学文を呈するものなどの点から平栫式土器と捉えた。

11～13、16～19までは逆くの字に屈曲する口縁部の資料である。**11**は丸みを持ちながら屈曲する。口唇部は平坦に作られ、口唇部外面及び屈曲部外面に刻目を施す。外面上部は横位及び斜位沈線を施し、それに沿って刺突連点文を配する。外面下部では2条の沈線が認められる。**12**も11同様に丸みを持ちながら屈曲する。口唇部は平坦に作られ、口唇部外面及び屈曲部外面に刻目を施す。外面上部は曲線状の刺突連点文と横位及び斜位沈線に沿って刺突連点文を施し幾何学文を呈する。外面下部は横位沈線が認められる。**13**は口唇部に段を有し、口唇部外面及び屈曲部外面に刻目を施す。外面上部には横位及び斜位沈線に沿って刺突連点文を施し幾何学文を呈する。外面下部は横位沈線が4条認められる。**16**は屈曲後やや肥厚する口縁部である。口唇部は平坦に作られ、口唇部

外面及び屈曲部外面に細かい刻目を施す。外面上部には横位及び斜位沈線に沿って刺突連点文を施し幾何学文を呈する。外面下部は横位沈線が3条認められる。**17**は口唇部を平坦に作り、口唇部外面及び屈曲部外面に細かい刻目を施す。外面上部は縦位の刺突連点文3条と斜位の刺突連点文及び沈線を組み合わせた幾何学文を呈する。外面下部は3条の横位沈線が認められる。**18**は口唇部を平坦に作り、口唇部外面及び屈曲部外面に刻目を施す。外面は横位及び斜位沈線に沿って刺突連点文を施す。**19**は薄手の作りで口唇部を平坦に作る。外面は口唇部及び屈曲部に刻目を施し、長短の斜位沈線3～4条を挟むようにして刺突連点文を施す。

14・15、**20～25**は屈曲し、短い頸部を持つ口縁部の資料である。**14**は、7区より出土した接合遺物である(第57図)。胴部から屈曲し大きく開きながら直線的に立ち上がり、頸部で屈曲し肥厚する口縁部の資料である。全体の4分の1程度が残存し、復元口径は45.8㎝を測る。口唇部に段を持ち、口唇部外面及び頸部外面に刻目を施す。口縁部外面は３条を１単位に沈線を山形状に配し、それに沿って刺突連点文を施す。頸部直上にも刺突連点文を施し刺突連点文による三角形を呈する。曲線状の刺突連点文も認められる。胴部屈曲部には横位沈線が施され、その直上には横位及び斜位、曲線状の沈線を組み合わせた幾何学文を呈する。**15**は、7区より出土した接合遺物である(第57図)開きながら直線的に立ち上がり頸部で屈曲し口縁部で肥厚する。屈曲部外面には強い張り出しを持ち、口唇部外面とともに刻目を施す。外面上部は斜位の刺突連点文の間に3条の沈線を配し、外面下部は5条の曲線状沈線を施した後に4条の沈線を施す。**20**はやや厚手の口縁部で、口唇部外面及び屈曲部外面に刻目を施す。外面上部は2条の刺突連点文の間に3条の沈線を施し、外面下部にも沈線が認められる。**21**は厚手の口縁部で屈曲が弱くなる。口唇部は平坦に作られ、口唇部外面及び屈曲部外面に刻目が施される。外面上部は横位及び斜位の刺突連点文を施し、その間に長短の沈線を施す。**22**は薄手の口縁部で、屈曲後短い頸部を持つ。口唇部は平坦に作られ、口唇部外面及び屈曲部外面に細かい刻目を施す。外面は3条の縦位刺突連点文と斜位の沈線及び刺突連点文を組み合わせた幾何学文を呈する。**23**は薄手の作りで口唇部を平坦に作り、口唇部外面及び屈曲部外面に刻目を施す。外面上部は2条の横位沈線を1条の斜位沈線が横断し、それに沿って刺突連点文を配する。外面下部は1条の横位沈線が認められる。**24**は屈曲部が肥厚する口縁部で屈曲が弱くなる。口唇部は平坦に作られ、口唇部外面及び屈曲部外面に刻目を施す。外面上部は3条の横位沈線に沿って刺突連点文を配する。外面下部は1条の沈線が認められる。**25**は厚手の口縁部で屈曲部の境目が極めて弱くなる。口唇部は平坦に作られ、屈曲部外面には箆状工具による斜位の刻目が施される。外面上部は2条の横位沈線の間を2条の斜位沈線が横断し、それに沿って刺突連点文を施す。外面下部は撚糸文との境界に沈線を施す。

26～28は屈曲しない口縁部の資料である。**26**は薄手の作りで口唇部に刻目を施し、外面は曲線状及び斜位の沈線を組み合わせた文様を対にして配する。内面には丹塗りの痕跡が窺える。**27**はやや厚手の作りで口唇部外面に刻目を施す。外面は横位沈線と斜位沈線の長短を組み合わせた文様を施す。**28**はやや薄手の作りで、口唇部外面に刻目を施す。外面は4条の横位沈線を施す。

29・30は逆くの字に屈曲する頸部片で、**29**は屈曲部外面に斜位の刻目を、**30**は細かい刻目を有する。**29**は厚手の作りで、外面は横位及び曲線状の沈線を施す。**30**は薄手の作りで外面に横位沈線が4条認められる。

31～33はくの字に屈曲する胴部で、内面に明瞭な陵を持つ。**31**の外面上部は横位及び斜位、曲線状の沈線を施し、外面下部は撚糸文を施した後に沈線で区画し、無施文部には斜位沈線及び刺突連点文を施す。ここでは３層出土遺物として取り上げるがSX22との関連性が考えられる。**32**は内

傾しながら立ち上がりくの字に屈曲する。屈曲部には横位沈線を、外面下部には撚糸文を施した後に沈線及び刺突連点文で区画する。33は屈曲部外面に横位及び斜位沈線を施し、その直上に楕円状の刺突連点文を配する。

34〜42は胴部の資料。34の外面は撚糸文を施文後、横位及び曲線状の沈線と縦位の刺突連点文を施し幾何学文を呈する。35は撚糸文を施文後横位及び曲線状の沈線を施し、施文されない部分には曲線状の沈線を挟むようにして刺突連点文を施す。36は撚糸文を施文後沈線で区画し、無施文部には曲線状の沈線を挟むようにして刺突連点文を施す。37は張り出しを持つ胴部で、撚糸文を施文後刺突連点文で区画し横位及び曲線状の沈線を施す。38は厚手の作りで、撚糸文を施文後横位及び斜位、曲線状の沈線を施し縦位の刺突連点文で区画する。39は薄手の作りで、撚糸文を施文後横位沈線２条と横位及び縦位の刺突連点文を施す。40は撚糸文を施文後刺突連点文で区画する。41は幅1㎝程度の撚糸文が3条認められ、円形状に刺突連点文を配する。42は幅1㎝程度の撚糸文が2条認められ、沈線で区画する。無施文部には円形状の沈線のなかに刺突連点文を充填する。

43〜60は刺突連点文が減り、撚糸文を施した後に沈線を巡らすものを古段階の塞ノ神式土器と捉えた。

43〜46は口縁部の資料である。43はくの字に屈曲する口縁部で、ラッパ状に立ち上がる。内面には胴部との境目に明瞭な陵を持つ。口唇部は平坦に作られ、棒状工具による刻目を入れる。屈曲部外面には2条の横位沈線を施し、外面上部にも2条の横位沈線が認められる。外面下部は幅8㎜程度の撚糸文を5条確認できる。44は緩やかに内湾しながら立ち上がる。口唇部は平坦に作られ刻目を施す。外面は横位沈線が6条認められる。45は薄手の作りで、口唇部に段を有し刻目を施す。外面は4条の横位沈線が認められる。46はやや厚手の作りで口唇部に段を有し、刻目を施す。5条の横位沈線が認められる。

47〜49はくの字に屈曲する頸部片で、いずれも内面に明瞭な陵を持つ。47は厚手の作りで大きく開きながら直線的に立ち上がる。外面は斜位沈線を「＼→／」の順で施し山形状を呈する。48は直線的に立ち上がり、外面は長短の沈線を斜位及び曲線状に施す。49は厚手の作りで、屈曲部外面は幅1㎝程度の撚糸文を施した後に2条の横位沈線を施す。

50〜60は刺突連点文を用いない胴部片の資料。50は、7区より出土した接合し遺物である(第57図)。外反しながら立ち上がる胴部片。撚糸文を施した後、横位及び斜位、曲線状の沈線を用いて幾何学文を呈する。外面上部は斜位の撚糸文を施した後に沈線で区画する。51は下部に張り出しを持ち、撚糸文を施した後に4条の横位沈線を施す。斜位沈線も認められる。52はやや厚手の作りで、撚糸文を施文後横位及び斜位沈線を施す。53は撚糸文を施した後に横位沈線を4条施す。54は撚糸文を施した後、横位沈線を8条施し、縦位沈線を4条施す。斜位沈線も認められる。55は厚手の作りで、撚糸文を施した後に横位及び曲線状の沈線を施す。56は撚糸文を施した後に横位沈線を4条施す。無施文部との区画は施さない。57は上部に張り出しを持ち、幅1.3㎝の撚糸文を4条施し、その後横位及び斜位の沈線を施す。58は3条の沈線を横位及び斜位に施す。59・60は縦位の撚糸文を施す。

61〜69は撚糸文を施した後に沈線によって区画するものとして新段階の塞ノ神式土器と捉えた。61・62は口縁部の資料でともに精製土器である。61は緩やかに内湾しながら立ち上がる。口唇部端部は面取りされ刻目を入れる。撚糸文を横位及び曲線状に施した後に沈線で区画する。62は直線状に立ち上がり、口唇部端部は面取りされ刻目を入れる。撚糸文を横位及び曲線状に施した

後に沈線で区画する。

63～65はくの字に屈曲する頸部の資料で内面に明瞭な陵を持つ。**63**は横位と斜位の区画文を配する。**64**は曲線状に区画文を配し、屈曲部外面の境目に沈線を施す。**65**は山形状に区画文を配し、屈曲部外面の境目に沈線を施す。ここでは3層出土遺物として取り上げるがSX22との関連性が考えられる。**66**は横位の区画文を配する。**67**は幅1.3㎝程の撚糸文2条を沈線で区画する。**68**は斜位の区画文を配する。**69**は横位の区画文を配する。

70～72は底部の資料である。**70**は直線的に立ち上がり、外面に撚糸文を施す。**71・72**はわずかに上底を呈する。**72**は内傾気味に立ち上がり、内外面ナデ調整を施す。

73・74は無頸の壺形土器の資料である。**73**は内傾しながら立ち上がる口縁部で、口唇部を平坦に作る。9条の微隆起線が認められ、内外面ともに丹塗りの痕跡がある。**74**は胴部片で、5条の微隆起線が認められる。微隆起線は約3㎜間隔で刻目を有する。

75・76(第42図)はその他の土器もしくは時期不明資料である。**75**は縄文時代前期、西唐津式土器の口縁部と考えられる。緩やかに外反し、胎土に多くの結晶片岩片を含む。外面は口唇部直下に横位沈線を2条、連弧文3条、横位沈線2条の順で施文する。口唇部には斜位「＼」「／」の刻目が認められる。**76**は厚手の胴部片で内外面ナデ調整を施す。

出土石器(第43図・第44図)

7区3層を中心に縄文時代早期の土器に伴って石器や剥片等が出土した。同地点から出土した土器は縄文時代早期の土器が主体を占め、それに伴う石器として15点を掲載する。出土した石材は黒曜石が8割以上を占めるが、安山岩や凝灰岩、砂岩なども石材利用されている。

石鏃（第43図）

77は黒曜石製の石鏃でＵ字状の基部を持つ。やや扁平な形状で片脚を欠損する。**78**は二等辺三角形の形状で、やや浅いU字状の基部を持つ。**79**は深い抉りの基部を持ち細身の長脚鏃で、両面中央部を研磨する。両面の縁辺部に細かい調整を施す。**80**は深いU字状の基部を持つ凝灰岩製の石鏃で先端部及び基部を欠損する。両面の縁辺部に細かい調整を施す。

剥片（第43図）

81は黒曜石製の剥片で裏面左縁辺に細かい調整を施す。**82**は安山岩製の剥片。

掻器／削器（84・85）

83は凝灰岩製で自然面を残す。下縁に細かく両面加工を施す。**84**も凝灰岩製で一部自然面を残す。下縁は両面加工を施す。

石匙（第44図）

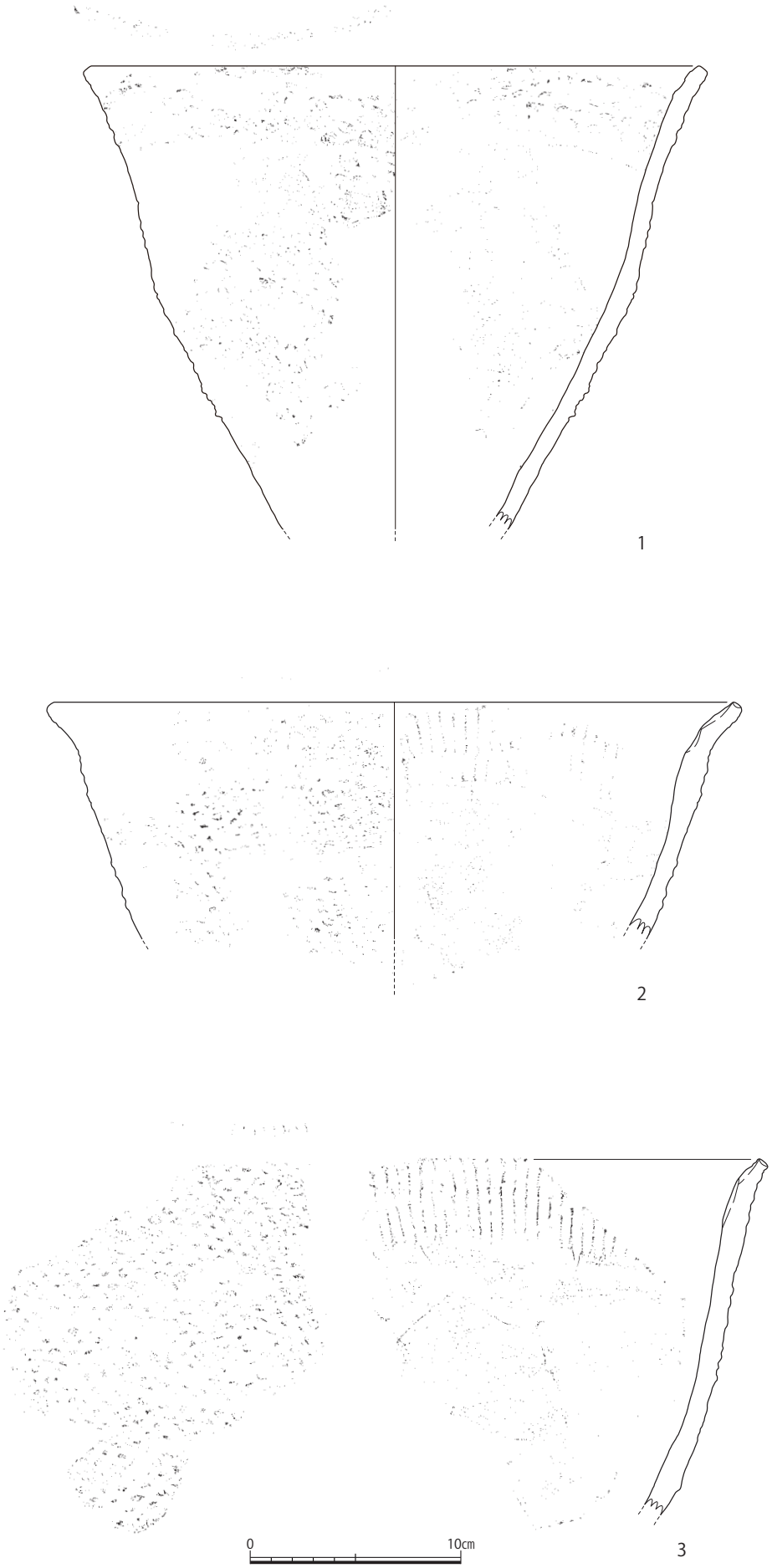
85は安山岩製の横型石匙で、小さい摘みを持つ。両面縁辺に細かい加工を施す。

石製品（第44図）

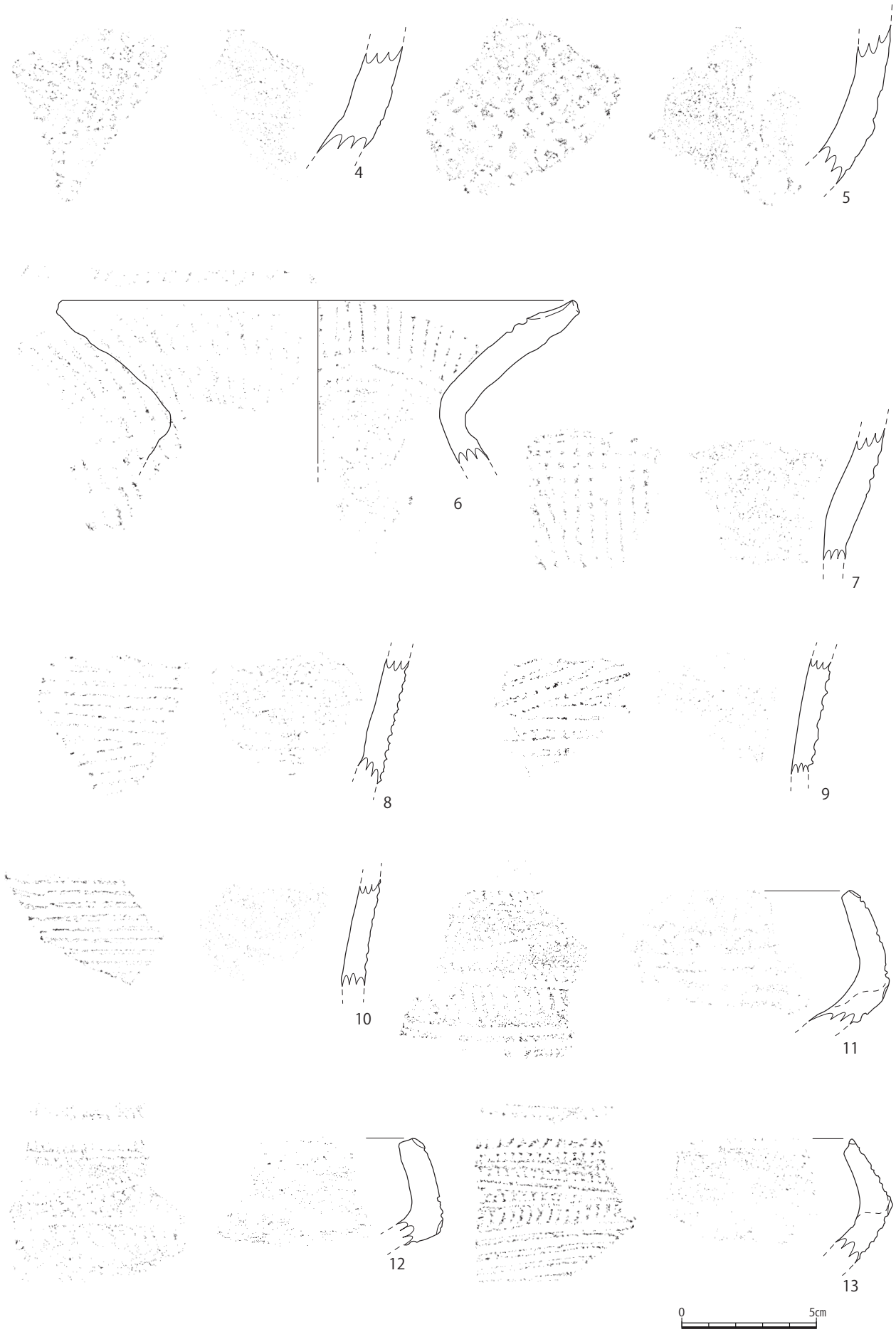
86は砂岩製の石製品で、側辺に加工を施す。打製石斧の可能性がある。

磨石／敲石（第44図）

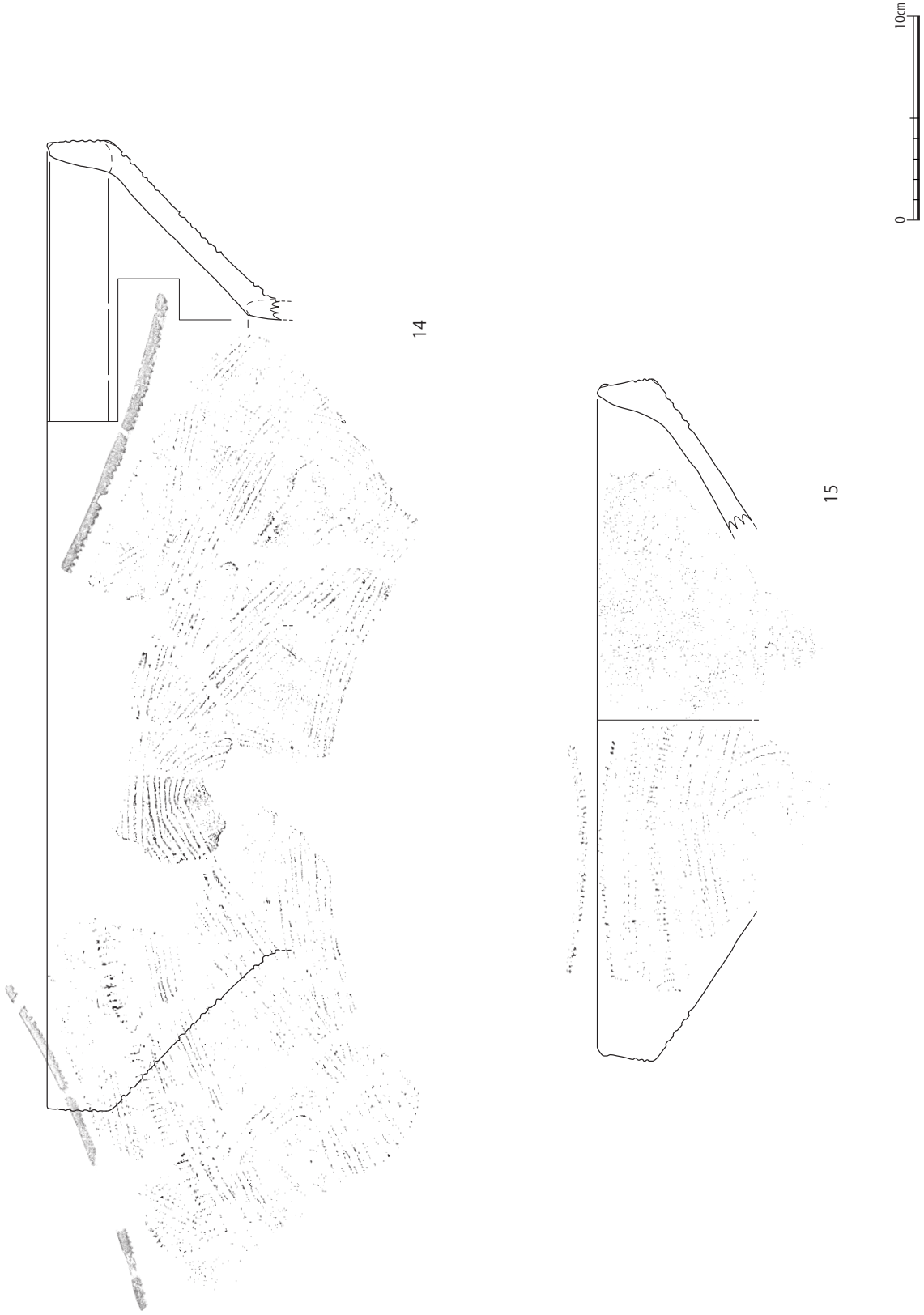
87は安山岩製の石材で側面及び表平面中央に使用痕を有する。**88**は安山岩製の石材で側面及び両平面上部に使用痕を有する。**89**は安山岩製の石材で側面に使用痕を有する。3分の1程度欠損する。**90**は安山岩製の石材で両平面中央に使用痕があり、その周辺及び側面の一部に滑面がある。



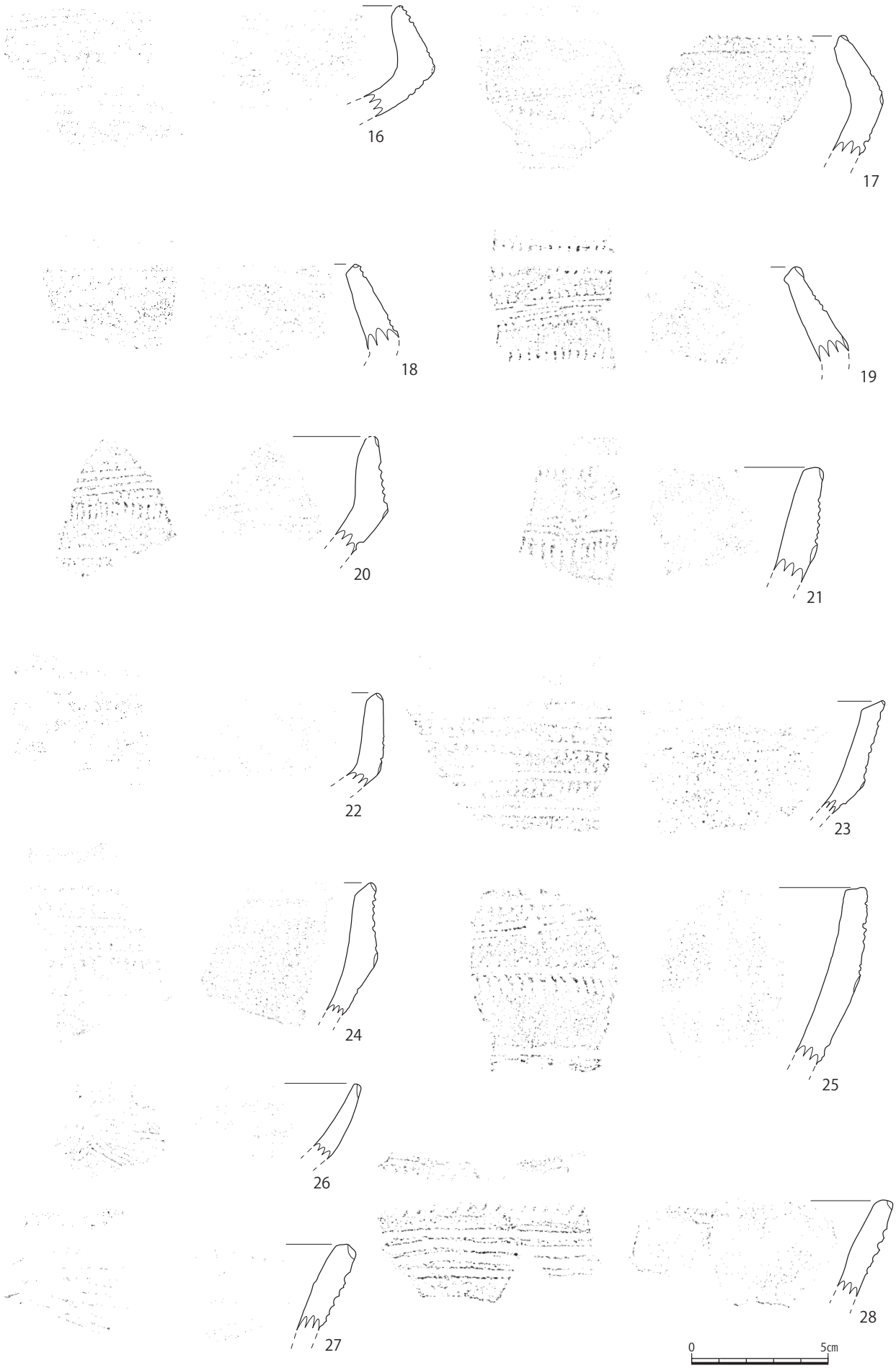
第33図　1区～7区3層出土土器実測図①(Ｓ＝1/3)



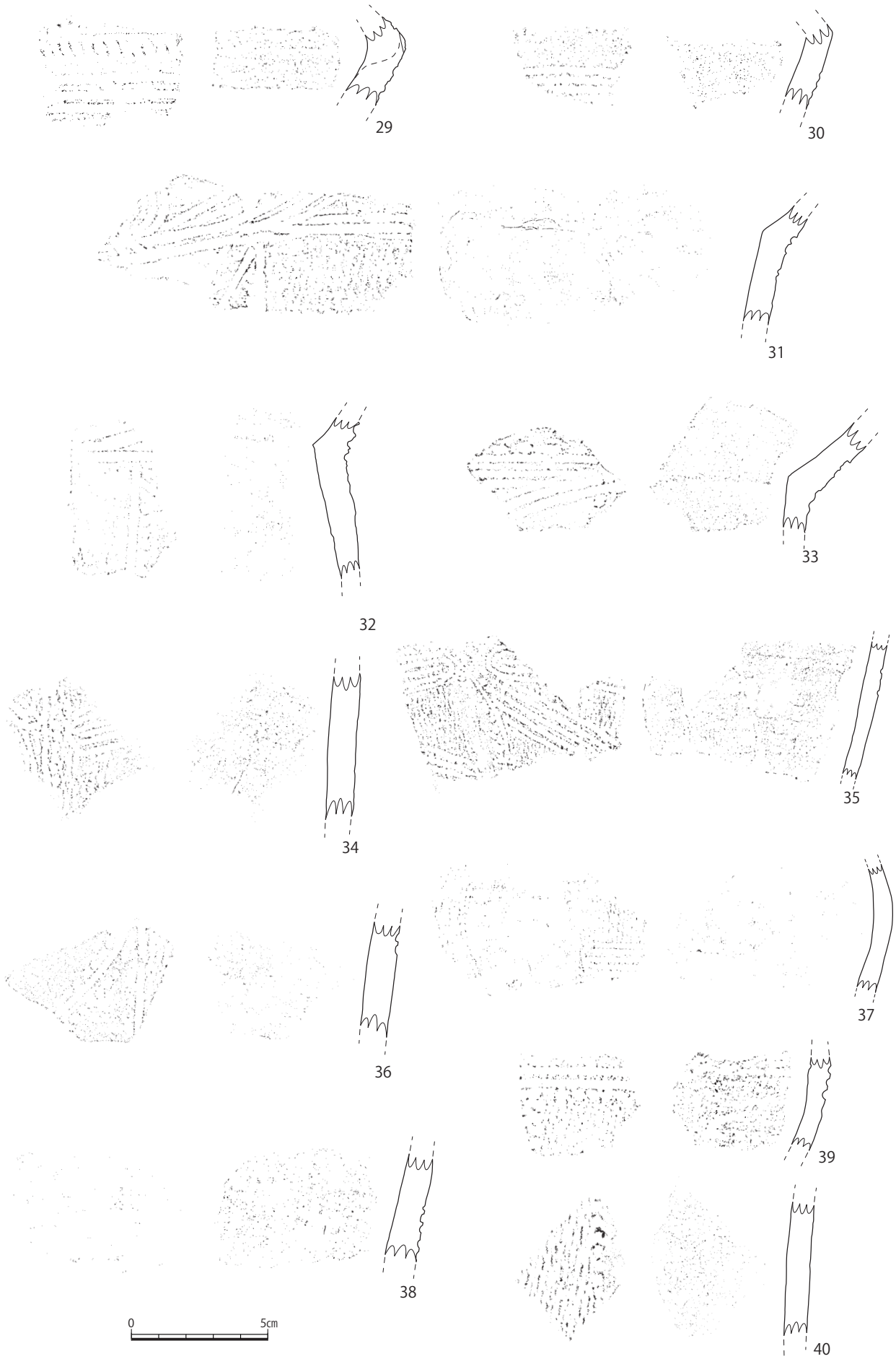
第34図　1区～7区3層出土土器実測図②(Ｓ＝1/2)



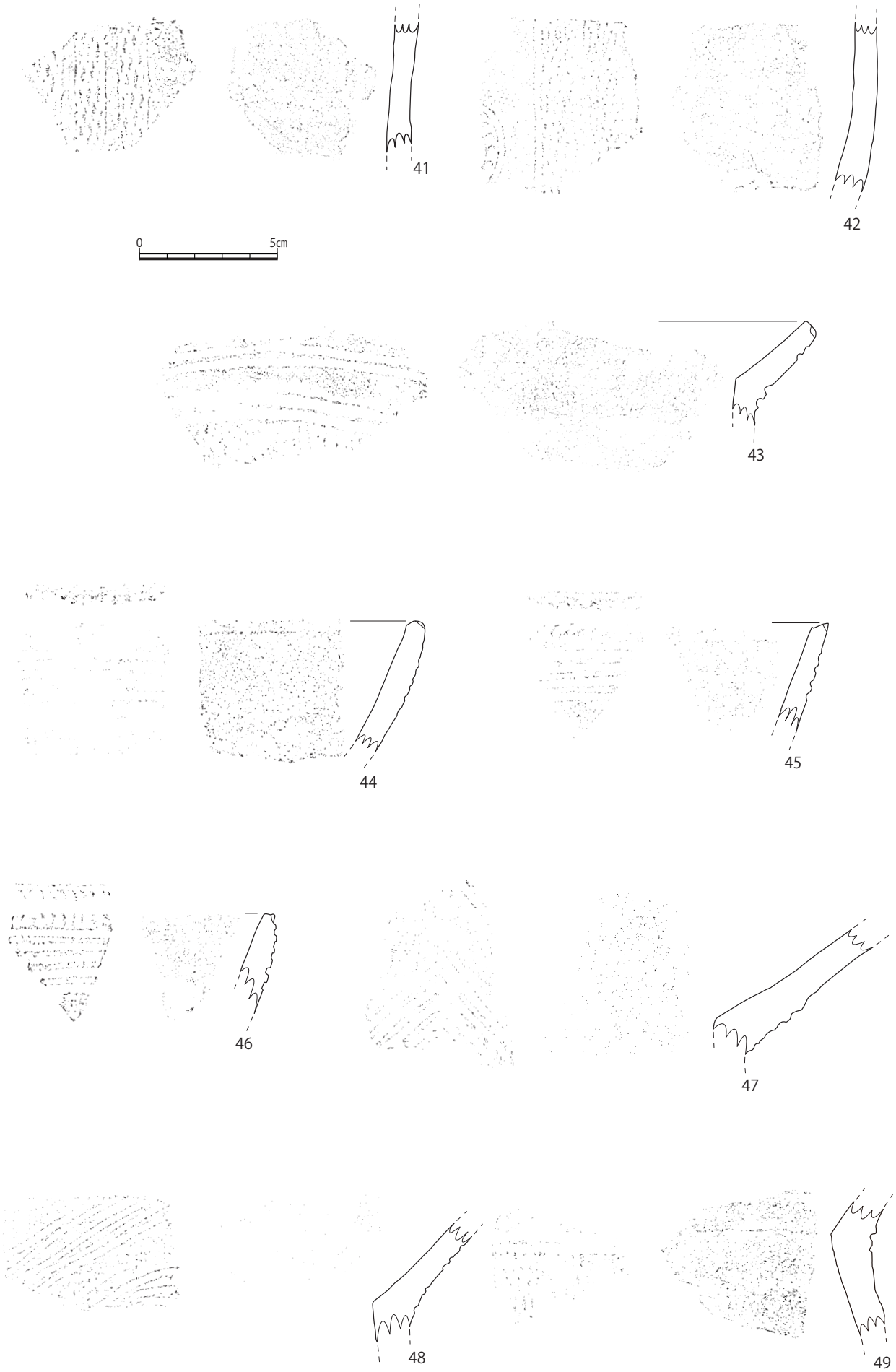
第35図　1区～7区3層出土土器実測図③(Ｓ＝1/3)



第36図　1区～7区3層出土土器実測図④(Ｓ＝1/2)

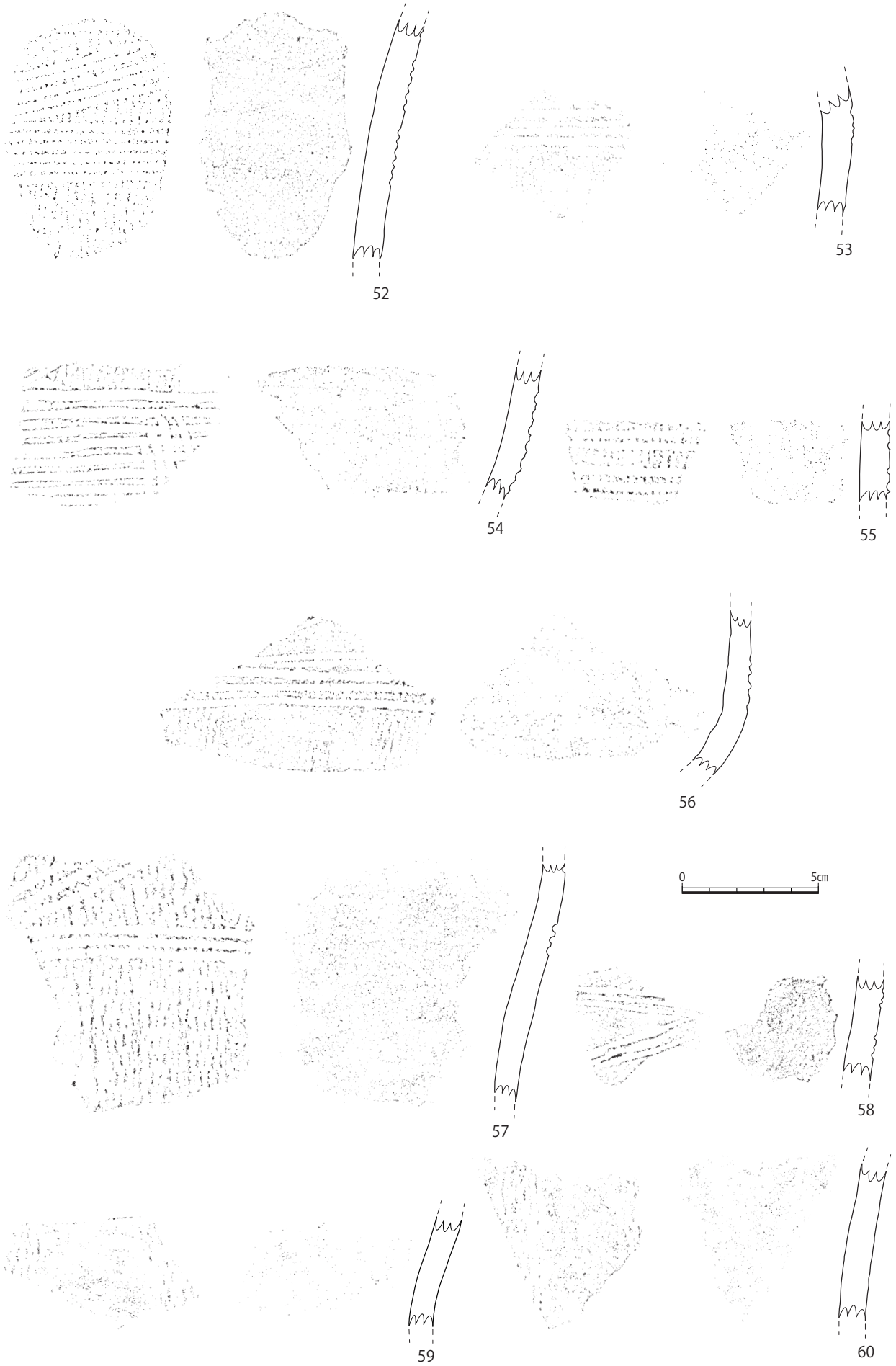


第37図　1区～7区3層出土土器実測図⑤(Ｓ＝1/2)

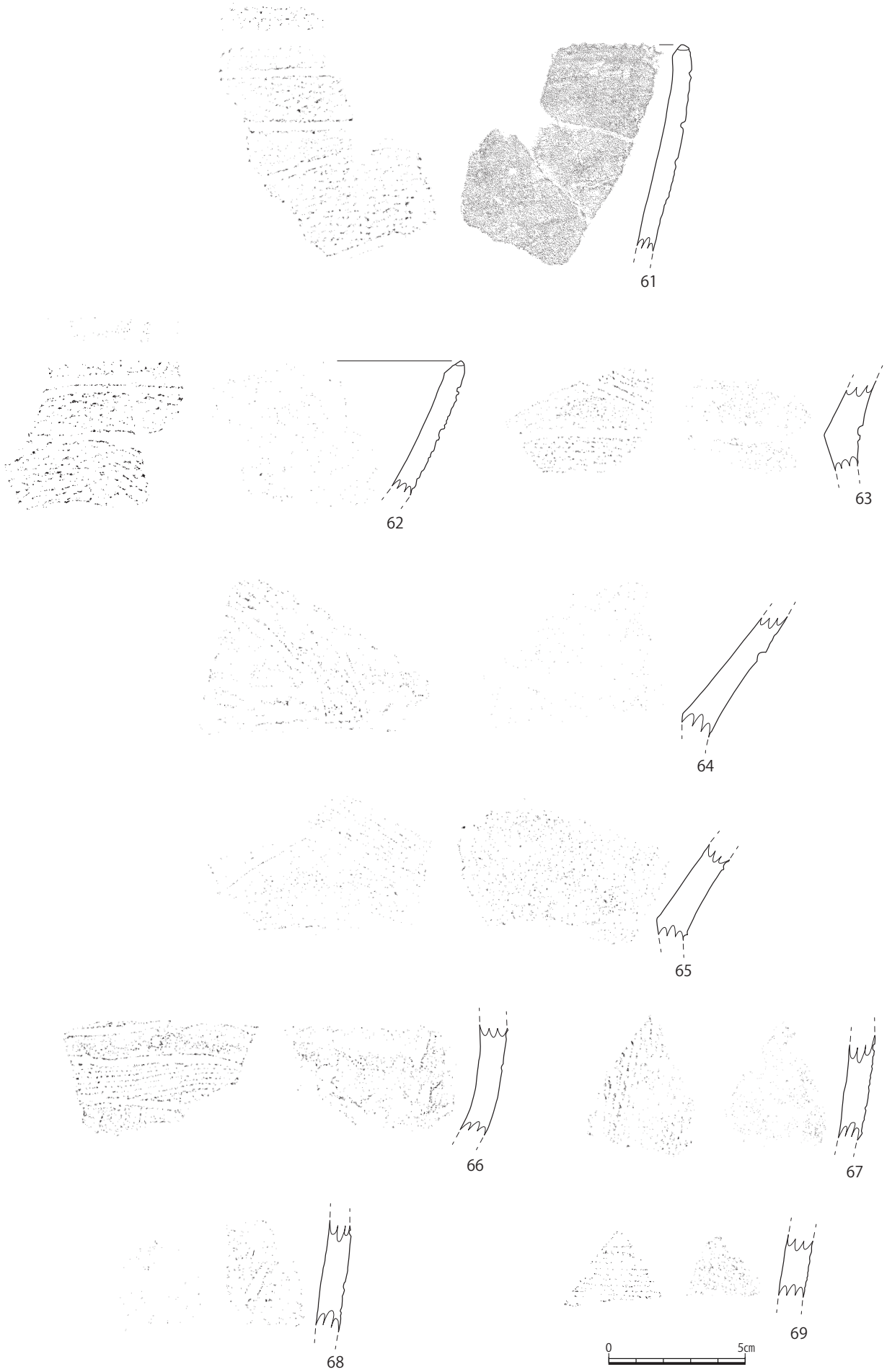


第38図　1区～7区3層出土土器実測図⑥(Ｓ＝1/2)

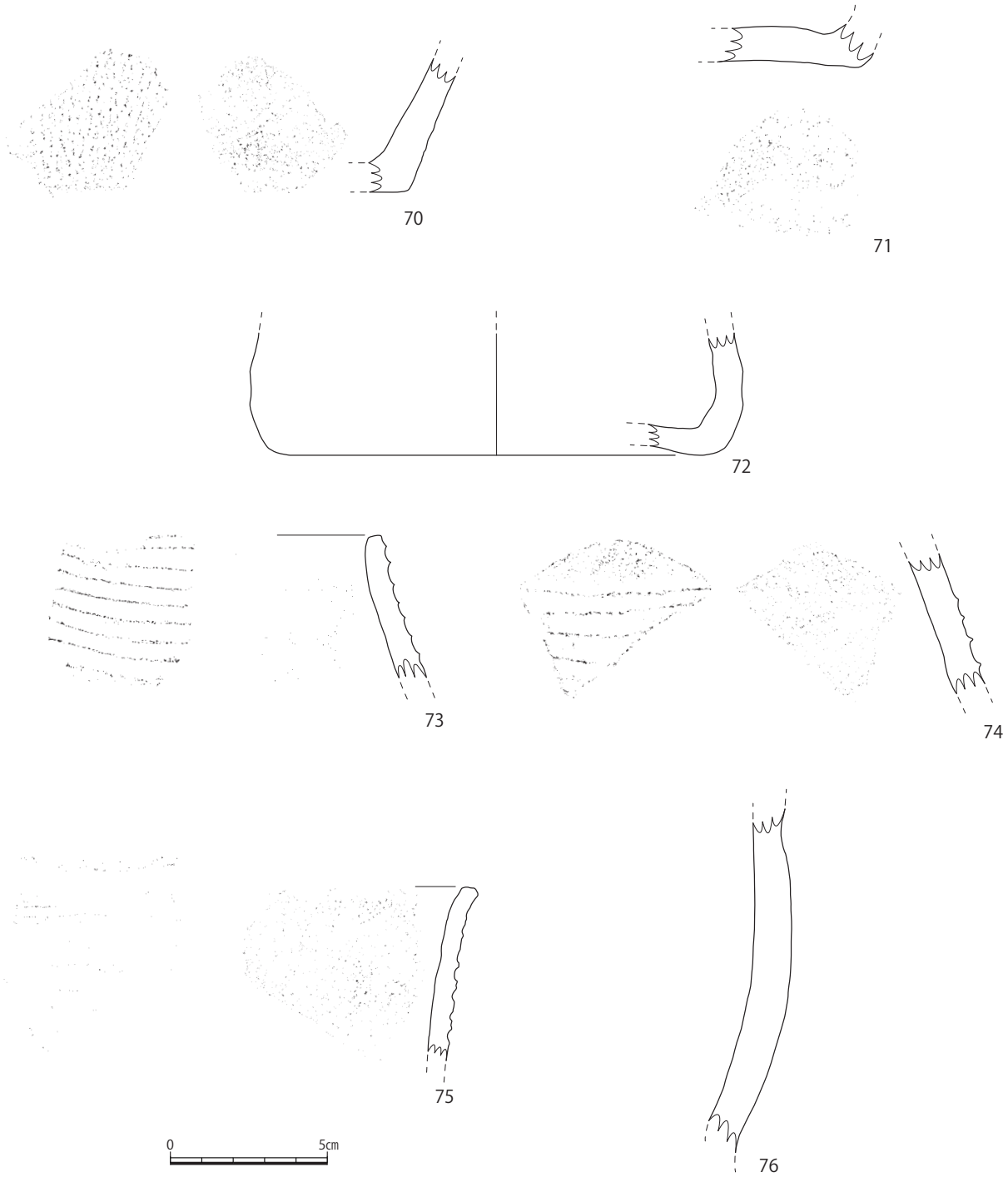
第39図　1区～7区3層出土土器実測図⑦(Ｓ＝1/3)



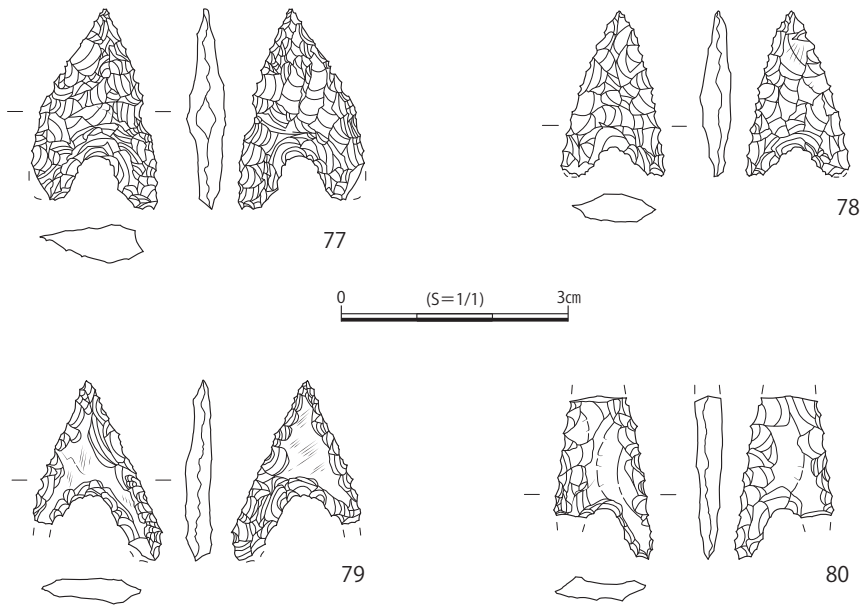
第40図　1区～7区3層出土土器実測図⑧(Ｓ＝1/2)

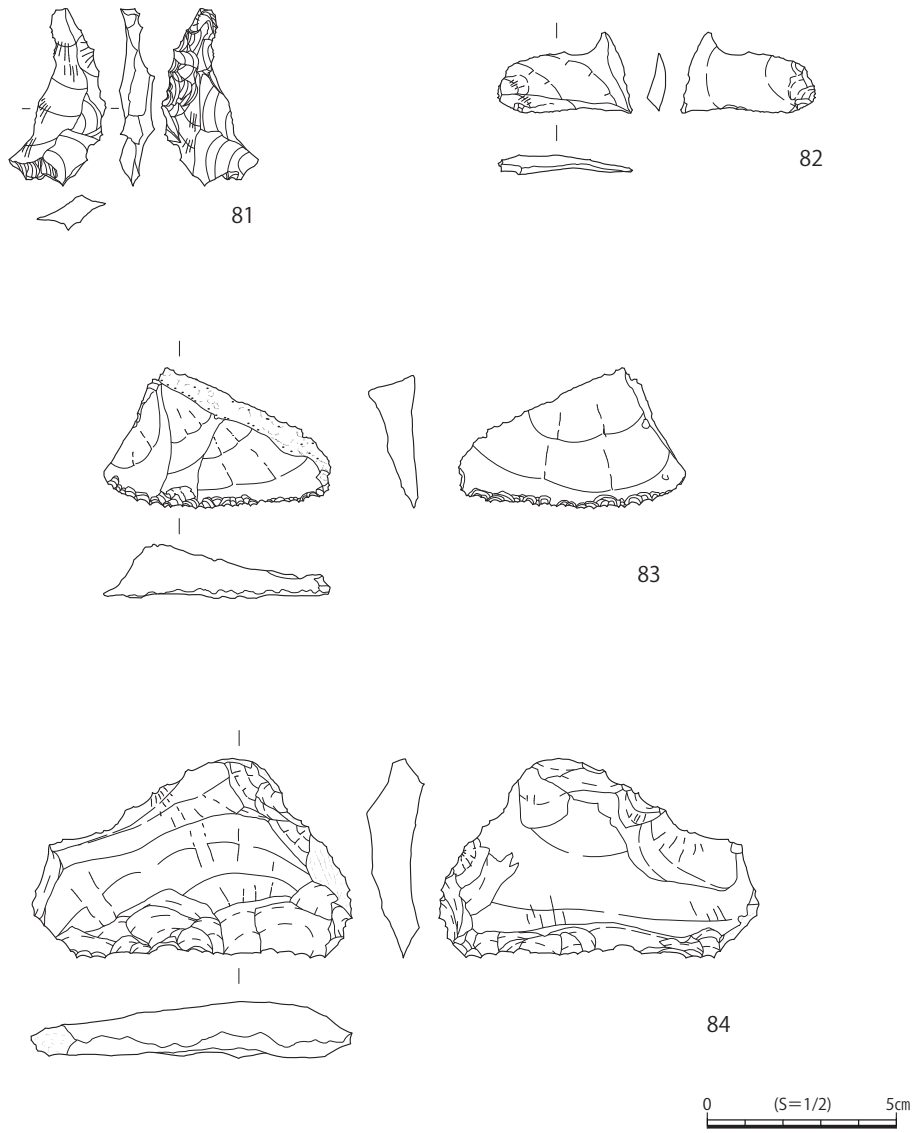


第41図　1区～7区3層出土土器実測図⑨(Ｓ＝1/2)

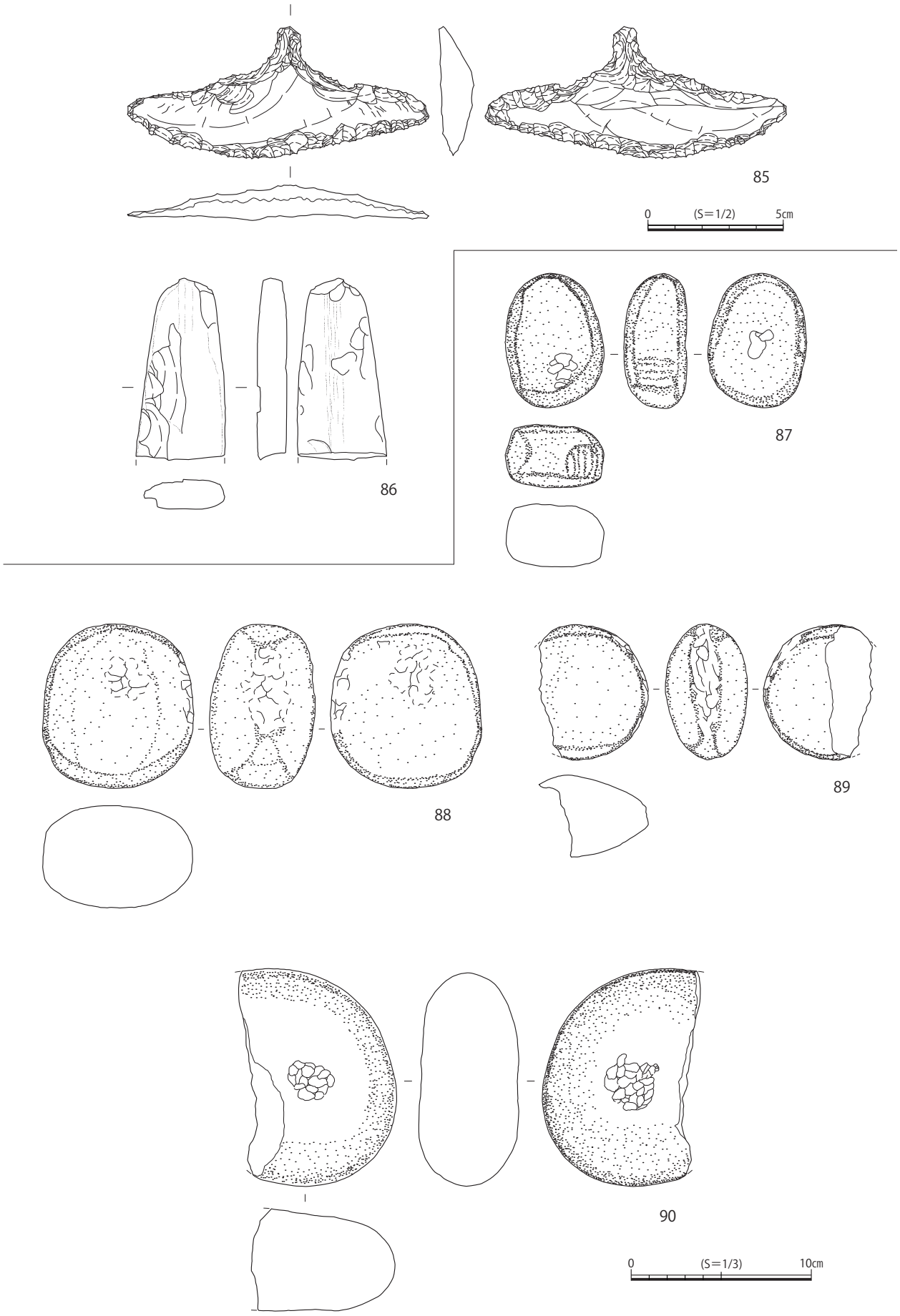


第42図　1区～7区3層出土土器実測図⑩(Ｓ＝1/2)





第43図　1区～7区3層出土石器実測図①(Ｓ＝1/1・1/2)



第44図　1区～7区3層出土石器実測図②(Ｓ＝1/2・1/3)

8区3層出土遺物(第45図～第47図)

8区は、縄文時代後・晩期の遺物が主体となる。器種としては深鉢、浅鉢が大半を占め、口縁部文様帯を持つものや貝殻条痕、研磨調整を施すが土器が主体となる。これらの中で特徴的なもの、実測に耐えうるものを掲載する。

塞ノ神式系土器(第45図)

91は直線的に立ち上がり口縁部で内傾する資料。口唇部に段を持ち、外面は4条の沈線を1単位に横位及び斜位の沈線を施す。内面はナデ調整を施す。塞ノ神式系土器と考えられる。

深鉢(第45図・第46図)

92は砲弾形を呈する口縁部の資料でやや内傾する。外面は貝殻条痕を内面はナデ調整を施す。

93は薄手で口唇部を平坦に作る口縁部。内外面ともにナデ調整を施す。

94・95は横位沈線を持つ口縁部。**94**は口縁部文様帯が外傾し、口唇部を平坦につくる。5条の横位沈線が認められ、内外面赤味を帯びる。**95**は薄手の口縁部文様帯を持ち直線的に立ち上がる。曲線状沈線が2条認められる。

96は薄手の作りで、逆くの字に屈曲した後外反して立ち上がる胴部片。屈曲部外面には明瞭な陵を持ち、内外面ともに丁寧なナデ調整を施す。胎土に2㎜程度の結晶片岩を多く含み、赤味を帯びる。

97は薄手の作りで緩やかに外反する口縁部。口唇部直下に1条の横位沈線を施す。

98は口唇部を外面につまみ出し折り曲げて平坦に作る口縁部。内面に段を持ち、外面に2条の横位凹線文を施し玉縁状に仕上げる。内外面研磨調整を施す。

99は刻目突帯文系土器の肩部から内傾する胴部片。張り出し直上に1条の横位沈線を施す。胎土には多くの金雲母を含む。

100～103は底部の資料。**100**は小さな張り出しを持って立ち上がる底部で、わずかに上底を呈する。底径は9㎝を測る。**101**は小さな張り出しを持って立ち上がる底部片で、復元底径は11.4㎝を測る。底面は未調整。**102**は平底の底部片で、小さな張り出しを持ち底面もナデ調整を施す。**103**は厚手で、断面がいったん直立して立ち上がる平底の底部片。復元底径は10.6㎝を測る。底面もナデ調整を施す。

浅鉢(第46図)

104・105は長くのびる頸部を持つ口縁部。**104**は頸部が緩やかに外反し、口縁部外面に沈線を、内面に段を有する。外面は横方向の研磨調整を施す。**105**は口縁部から頸部にかけての資料で、頸部で屈曲し開きながら緩やかに外反する。口縁部外面に沈線を、内面に段を有し、玉縁状を呈する。内外面ともに横方向の研磨調整を施し、黒色に仕上げる。

106は黒色磨研土器の胴部片で薄手の資料である。外面は横と斜め方向に、内面は縦方向に研磨する。

107は直線的な短い頸部を持つ薄手の資料である。内面に段を有し、内外面ともに横方向の研磨調整を施す。

108は直線的に立ち上がる薄手の口縁部で、口唇部を平坦に作る。内外面ともに横方向の研磨調整を施す。

109は底径6.8㎝を測る底部片でわずかに上底を呈し、小さな張り出しを持って立ち上がる。

出土石器(第47図)

8区3層からは、縄文時代後・晩期の土器に伴って石器や剥片等が出土した。同地点から出土した土器は縄文時代後・晩期の土器が主体を占め、それに伴う石器として5点を掲載する。出土した石材は黒曜石が大半を占めるが、安山岩や凝灰岩なども利用される。

石鏃（第47図）

110は黒曜石製で、浅く抉り込んだ無茎式石鏃。両面ともに丁寧に加工され鋸歯状を呈する。

石匙(第47図)

111は安山岩製の横型石匙で小さい摘みを持つ。摘み部及び両面主軸より片縁辺のみ細かい調整を施す。

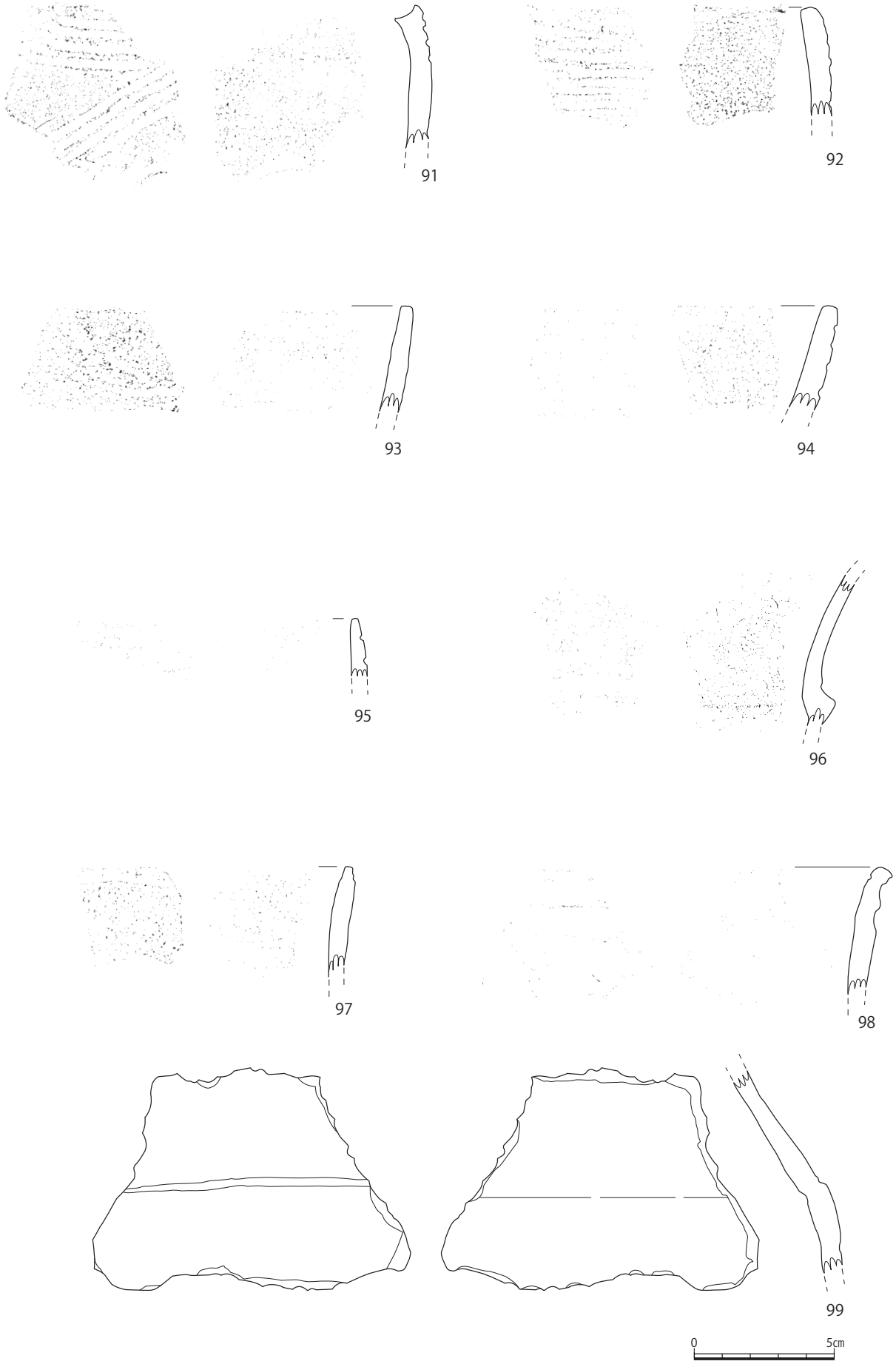
石斧(第47図)

112は安山岩製の打製石斧で板状石材を用いる。基部を欠損し、縁辺部に細かい調整を施す。

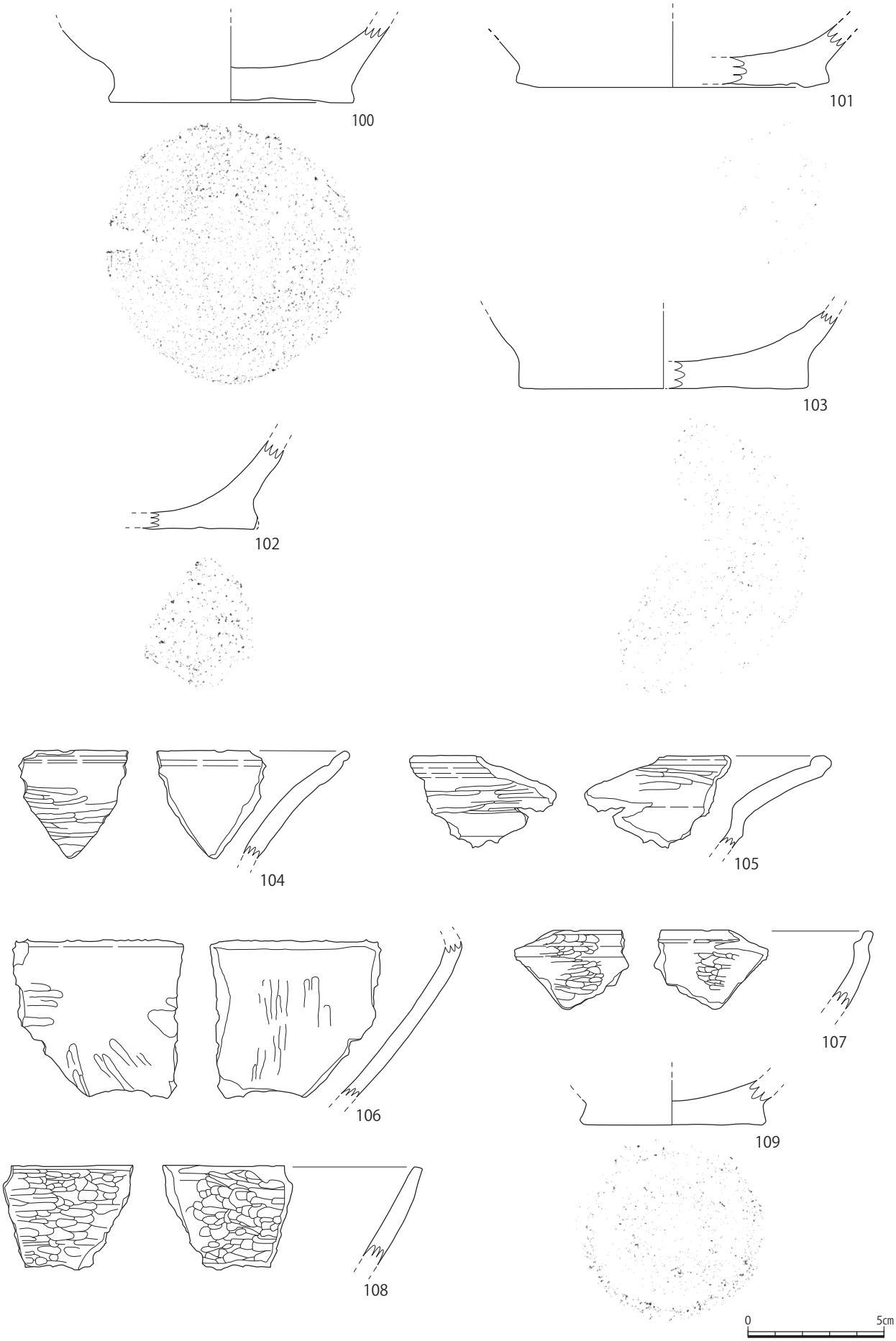
113は凝灰岩製の局部磨製石斧で板状石材を用いる。基部は欠損し、縁辺部に細かい調整を施され、下縁には研磨調整を施す。

磨石／敲石(第47図)

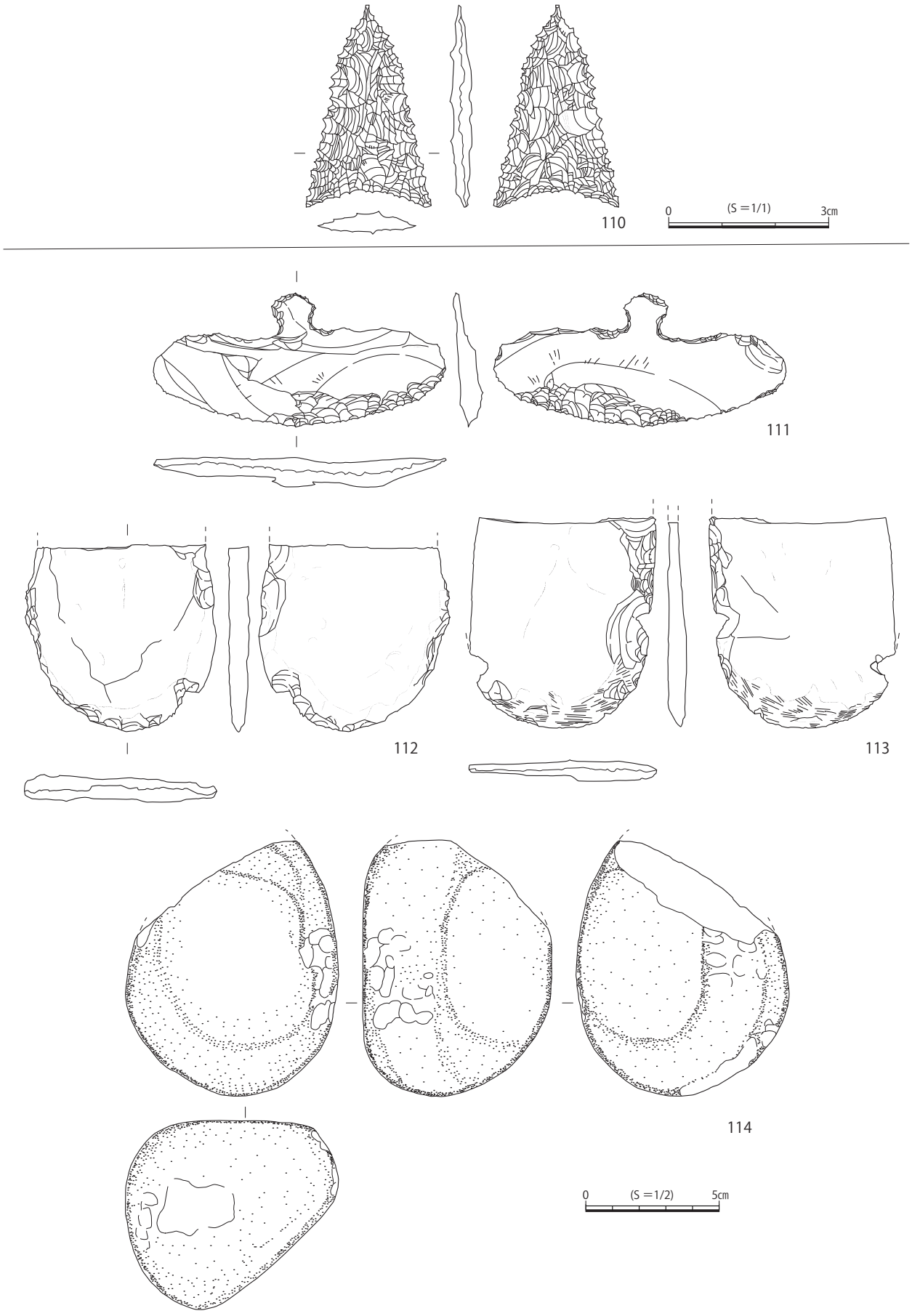
114は安山岩製の石材で、両平坦面及び側面の一部に滑面を持ち側面の一部に使用痕を有する。



第45図　8区3層出土土器実測図①(Ｓ＝1/2)



第46図　8区3層出土土器実測図②(Ｓ＝1/2)



第47図　8区3層出土石器実測図(Ｓ＝1/1・1/2)

(3)　表土及び2層、その他出土遺物(第48図～第56図)

表土及び2層からも多くの遺物が出土している。表土は耕作土。2層は耕作機械の影響を大きく受けた黒色土である。その他は撹乱等から出土した遺物である。このなかから特徴的なもの、実測に耐えるものを掲載する。

表土出土土器(第50図)

115は原体条痕を施文する縄文時代早期の土器資料である。厚手の胴部片で、底部に近い部分と思われる。原体条痕による横位及び縦位、斜位を組み合わせた幾何学文を呈する。

116～125は平栫・塞ノ神式土器群の資料。116は厚手の口縁部で、口唇部を平坦に作り刻目を施す。口縁部下部を肥厚させ箆状工具による刻目を入れ、直下に沈線を施す。口縁部上部には幅1㎜程度の曲線状の沈線を3条施し、それを挟むようにして刺突連点文を配する。117・118は屈曲し直線的に立ち上がる口縁部の資料である。117は口唇部を平坦に作り細かい刻目を施す。外面は幅1㎜程度の連弧文が9条認められる。118は口唇部を平坦に作り刻目を施す。外面は2条の刺突連点文及び曲線状の沈線を配する。119はわずかに外反しながら立ち上がる胴部片で、曲線状に沈線を施しそれに沿って刺突連点文を配する。横位の刺突連点文と縦位の撚糸文も認められる。120は胴部片で沈線を挟むようにして刺突連点文を配する。121～124はいずれも胴部片で、121は横位及び斜位の沈線を施す。122・123は縦位の撚糸文及び横位沈線を施す。124は横位及び山形状に撚糸文を施し、沈線によって区画する。125は上底を呈する底部片で、復元底径14.4㎝を測る。外面は撚糸文を配し、底面はナデ調整を施す。

126～134は縄文時代晩期、深鉢の資料である。126は波状口縁を呈し、直線的に立ち上がる口縁部でやや厚手の作りである。口唇部は外面につまみ出し平坦に作る。外面は貝殻条痕後、ナデ調整を施す。127は薄手の口縁部で内湾気味に立ち上がり、突起を張り付ける。外面は貝殻条痕後、ナデ調整を施す。128は厚手の口縁部片で、口唇部を平坦に作る。口唇部から1㎝程度あけて貝殻条痕を施す。129は薄手の口縁部片で、口唇部を平坦に作る。内外面ともに貝殻条痕を施す。緩やかな波状口縁の可能性がある。130は直線的に立ち上がる口縁部片で内外面ナデ調整を施す。131は上部で屈曲する胴部片で、外面は貝殻条痕後、ナデ調整を施す。132～134は底部の資料である。132はしっかりとした張り出しを持って立ち上がる。中央部は上底を呈し、台座痕を残す。復元底径は9㎝を測る。133は厚手の作りで、小さな張り出しを持つ。底径は9.3㎝を測る。底面もナデ調整を施す。134は小さな張り出しを持つ底部片で、底面もナデ調整を施す。

135～140は縄文時代晩期の浅鉢の資料である。135は短い頸部を持つ口縁部で、開きながら立ち上がる。外面に1条の沈線、内面に段を有する。内外面ともに横方向の研磨調整の痕跡を残すが風化による影響をうける。136は短い頸部を持つ口縁部で、直線的に立ち上がる。外面に1条の沈線、内面に段を有し、内外面ともに横方向の研磨調整を施す。内面は黒色に仕上げる。137は薄手の作りで、外反しながら立ち上がる。外面に1条の沈線、内面に段を有する。内外面ともに横方向の研磨調整を施し、黒色に仕上げる。138はやや厚手の口縁部で短い頸部を持つ。139は内面が欠損する口縁部もしくは胴部と思われる。内外面ともに横方向の研磨調整を施し、黒色に仕上げる。140は薄手の作りで、逆くの字に屈曲する胴部片。外面は貝殻条痕を施す。

141は内外面丹塗りを施す口縁部片。

142～146は弥生時代中期、鋤先形口縁部の資料である。142は厚手の作りで、外面は丸みを持ち内面は先細りする。内外面ともに丁寧なナデ調整を施す。143は厚手の作りで、口縁部がわずか

に上がる。144はやや内傾しながら立ち上がる。内外面ともに丁寧なナデ調整を施す。145は直線的に立ち上がり、口唇部を平坦にする。146は口縁部がわずかに上がる。

147は口唇部を平坦にし、わずかに外反しながら立ち上がる。

148はくの字に屈曲する口縁部で、直線的に立ち上がる。

149は管状土錘で内径４㎜程度である。

表土出土石器

石鏃（第51図）

150は黒曜石製で基部に浅い抉りを持つ。側縁はやや内湾気味に整形する。151は黒曜石製で張り出し気味に脚部を整形する。先端部から中央部にかけて欠損する。152は黒曜石製で基部に深い抉りを持ち長脚に作出する。両脚部を欠損する。

石匙（第51図）

153は摘み部以降を欠損した安山岩製の石匙か。縁辺部に両面加工を施す。

石斧（第51図）

154は凝灰岩製の石斧で基部が先細りするように作出する。刃部に摩耗痕が見られる。155は蛇紋岩製の局部磨製石斧で刃部のみ両面とも丁寧に研磨調整を施す。

磨石／敲石（第51図・第52図）

156は砂岩製の石材で、側面及び中央部に使用痕が見られる。157は安山岩製の石材で、側面及び裏面上部に使用痕が見られる。表裏面には滑面を有する。

その他（第52図）

158は長さ21.3㎝、幅11.4㎝、厚さ2㎝の結晶片岩。出土土器の胎土にも結晶片岩が含まれており、土器作成時に使用するために持ち込まれたものと思われる。

7区・8区2層出土遺物(第53図～第56図)

ここで取り上げる出土遺物は7区・8区2層より出土した遺物である。7区出土遺物に関しては、石鏃1点(第55図171)を掲載する。

深鉢(第53図)

159は先細りする口縁部片で、直線的に立ち上がる。外面は貝殻条痕、内面はナデ調整を施す。

160は緩やかに外反する薄手の口縁部片で、外面は貝殻条痕、内面はナデ調整を施す。

161は開きながら直線的に立ち上がる口縁部。薄手の作りで、口唇部を平坦に作る。外面は4条の横位沈線が認められる。

162は厚手の作りで、胴部が外反して立ち上がり、直線的に立ち上がる頸部を持つ。内外面ともにナデ調整を施す。

163は胴部片で、外面に粘土塊を張り付ける。外面は貝殻条痕、内面はナデ調整を施す。

164はわずかに張り出しを持って立ち上がる底部。復元底径9.6㎝を測る。底面もナデ調整を施す。

165は厚手の作りで強い張り出しを持つ底部。復元底径は9.8㎝を測る。底面は未調整。

浅鉢(第53図・第54図)

166～170はいずれも精製土器の資料である。166は開きながら緩やかに外反する口縁部。外面に沈線、内面に段を有し玉縁状に仕上げる。内外面ともに横方向の研磨調整を施し、黒色に仕上げる。167は口縁部から胴部にかけての資料で、胴部から頸部、頸部から口縁部と二回に分けて屈曲し、波状口縁を呈する。口唇部は平坦に作る。外面は横方向に、内面は横、縦方向に研磨調整を施す。168は薄手の胴部片で、横方向の研磨調整を施し、外面を黒色に仕上げる。169は直線的な短い頸部を持ち薄手な作りである。内面に段を有し、内外面ともに横方向の研磨調整を施す。170は頸部で屈曲し明瞭な陵を持つ資料。薄手の作りで、内外面ともに横及び斜め方向の研磨調整を施す。

出土石器(第55図・第56図)

石鏃（第55図）

171は、7区2層から出土した。安山岩製の石材で先端部を欠損しU字状の基部を持つ。両側縁は直線状になり、脚部は膨らみを持つが片脚が欠損する。出土した石鏃の中で最大級である。

打製石斧（第55図～第56図）

172は凝灰岩製の打製石で縁辺部は両面加工を施す。刃部に摩耗痕が見られる。173・174は凝灰岩製の打製石斧で板状の石材を用いる。173は先細りする基部を持ち、両側縁に両面加工を施す。174は基部を欠損する。縁辺部に両面加工を施し、刃部に摩耗痕が見られる。175は変成岩製の打製石斧で縦長の形状を呈する。縁辺部は両面加工され、刃部に摩耗痕が見られる。

磨製石斧（第56図）

176はシルト岩製の磨製石斧で刃部を欠損する。全面に研磨調整を施し、基部及び縁辺部に摩耗痕が見られる。

磨石／敲石（第56図）

177は砂岩を素材にした資料で両側面に欠損がある。表裏面及び側面の一部に滑面があり、裏面中央上位に使用痕がある。

砥石（第56図）

178は砂岩を素材とした資料で全面を研磨面として使うが、表面は筋状に自然面を残す。

【参考文献】

長崎県深江町教育委員会2006『権現脇遺跡』長崎県深江町教育委員会

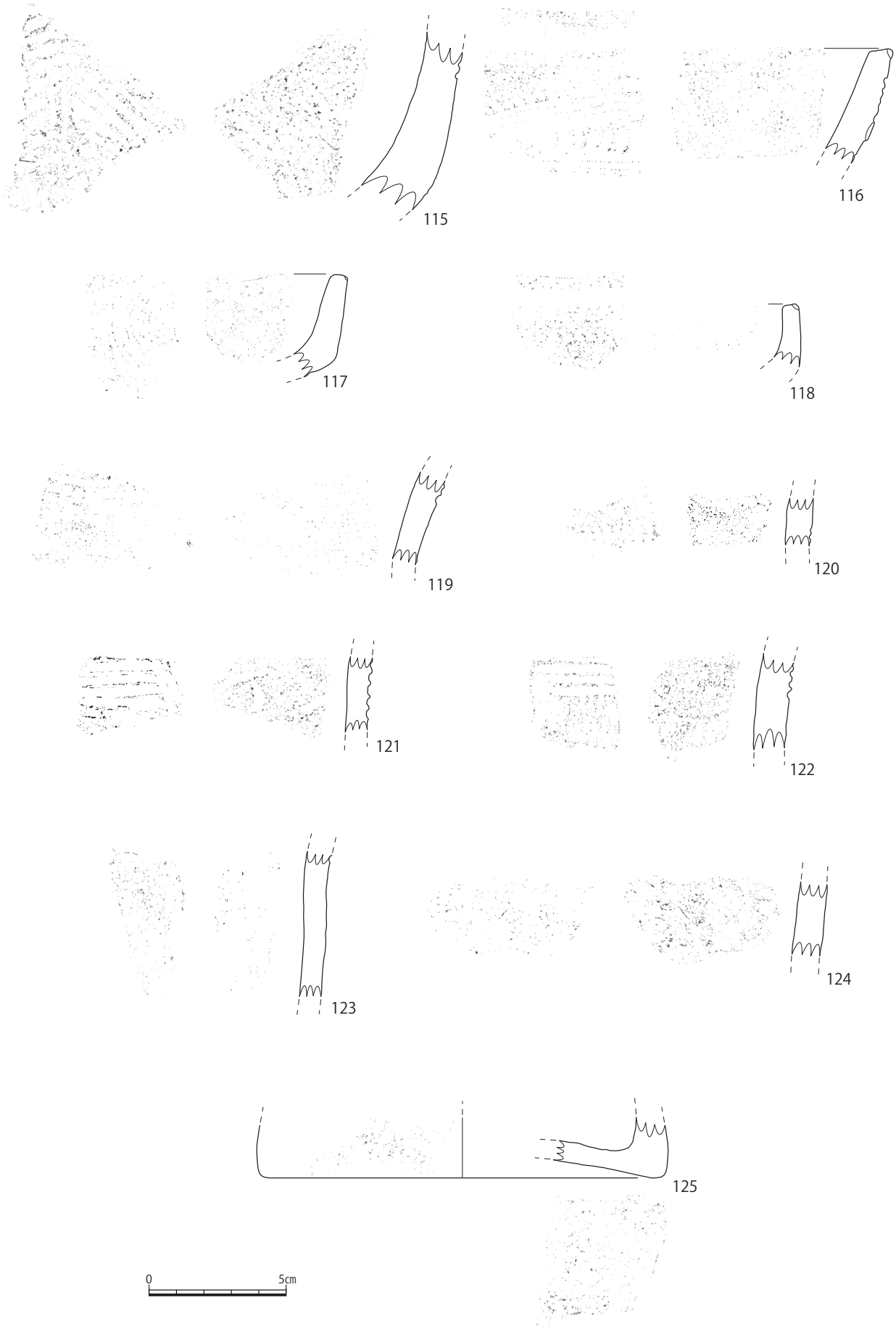
小林達夫2008『総覧縄文土器』アム・プロモーション

長崎県教育委員会2008『門前遺跡Ⅱ』長崎県教育委員会

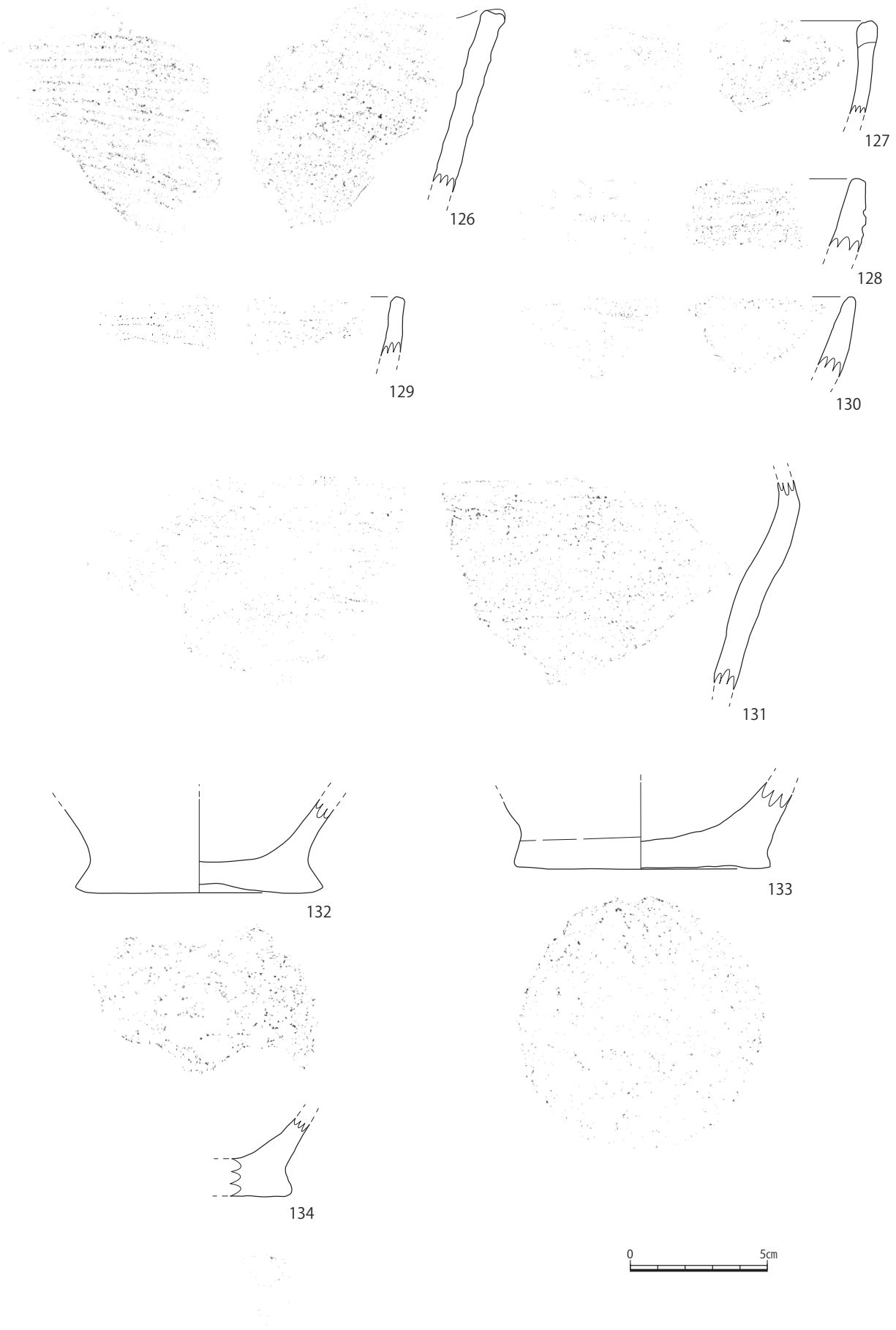
南九州縄文研究会1998『九州縄文土器編年の諸問題』九州縄文研究会

南九州縄文研究会1998『九州の押型文土器論　攷編』九州縄文研究会

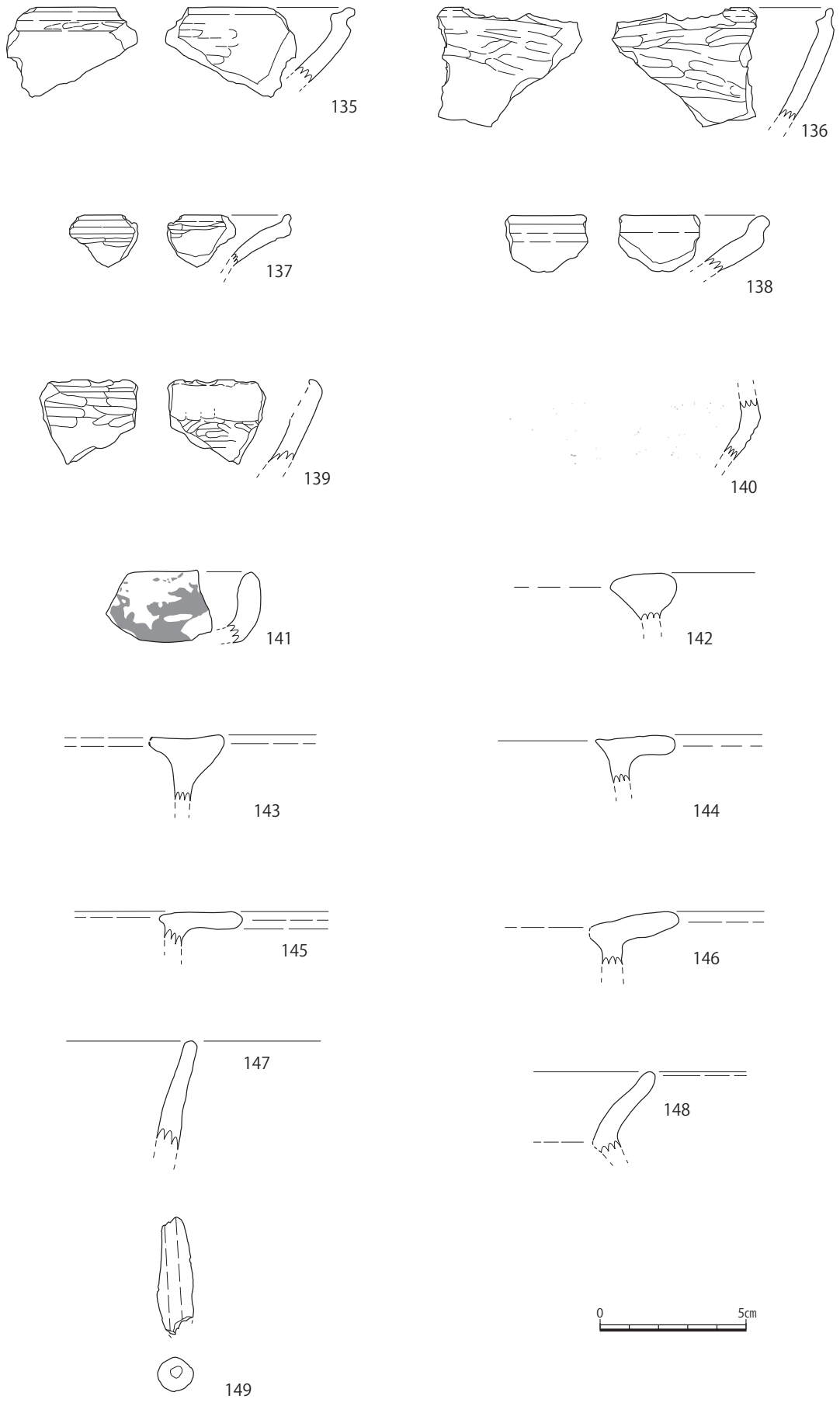
長崎県国見町教育委員会2002『松尾遺跡』長崎県国見教育委員会



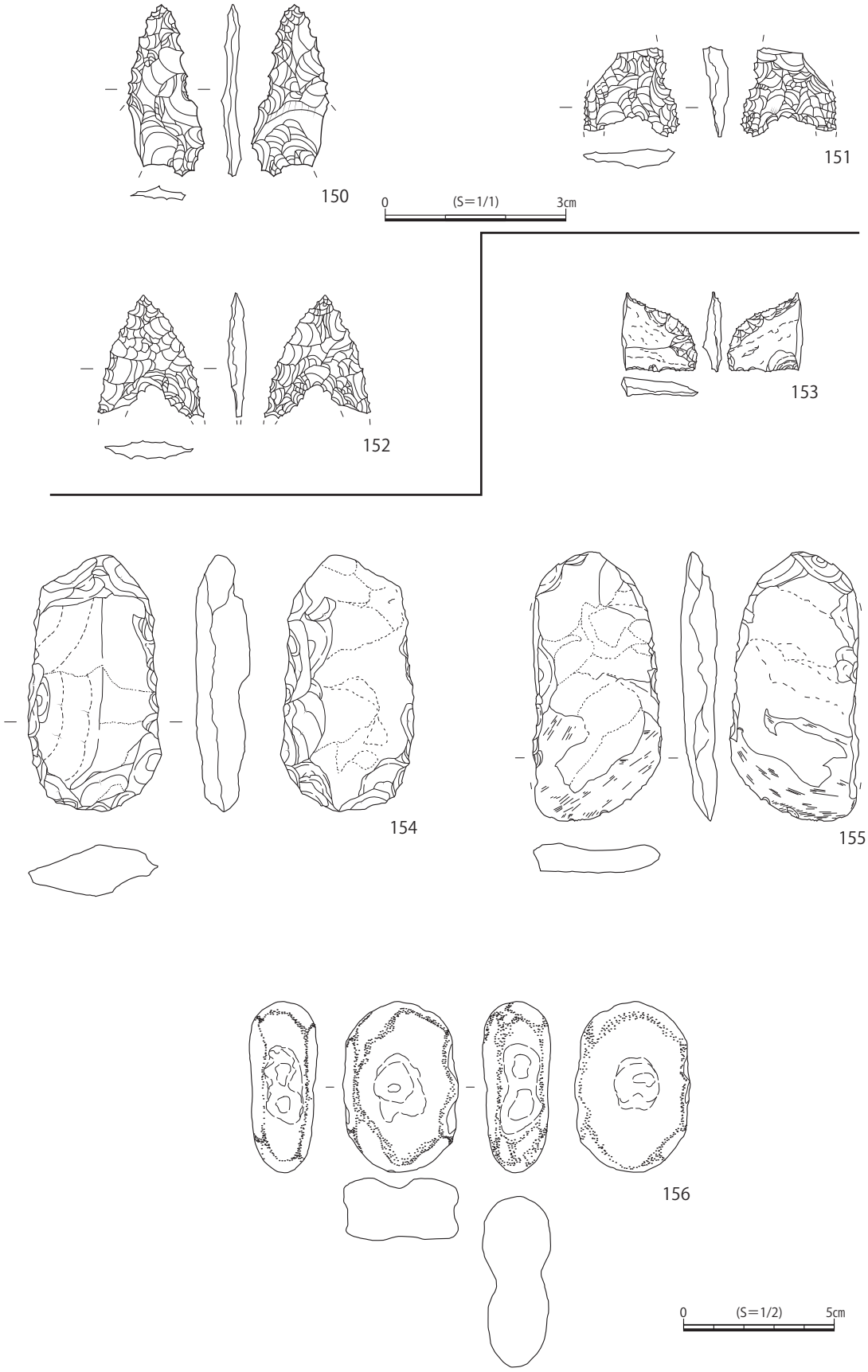
第48図　表土出土土器実測図①(Ｓ＝1/2)



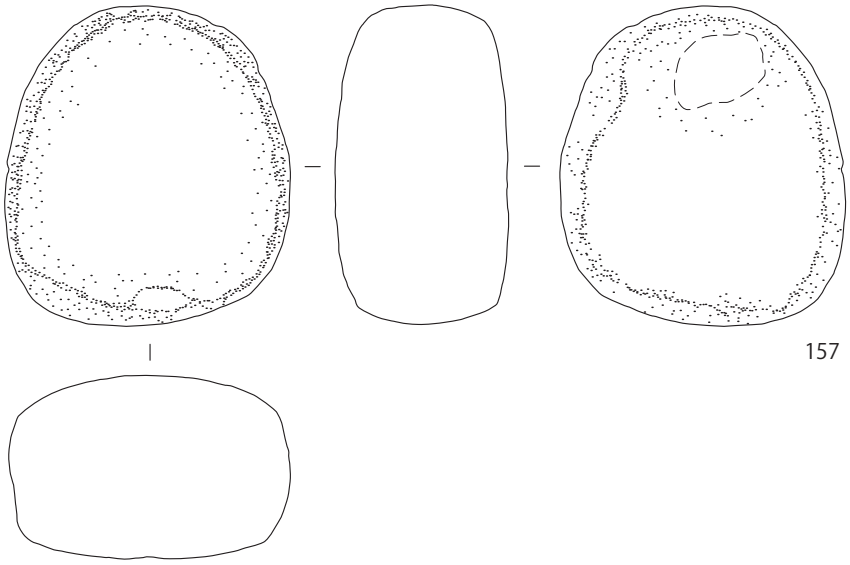
第49図　表土出土土器実測図②(Ｓ＝1/2)

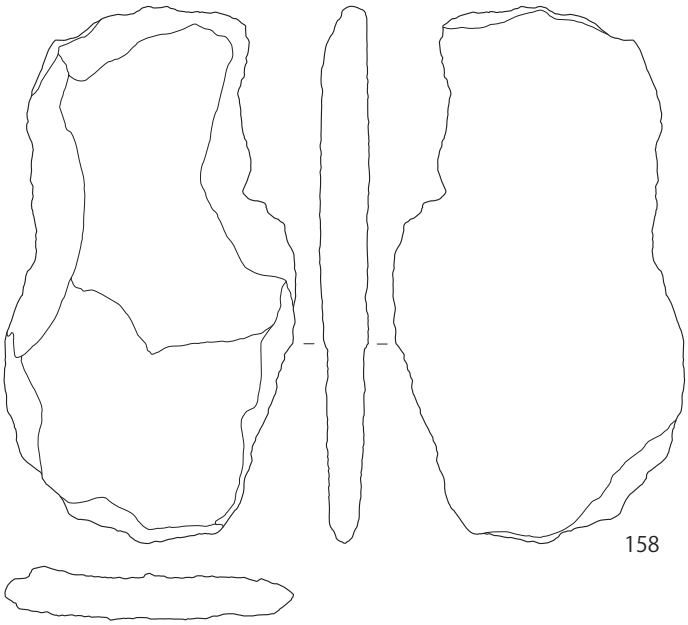


第50図　表土出土土器実測図③(Ｓ＝1/2)



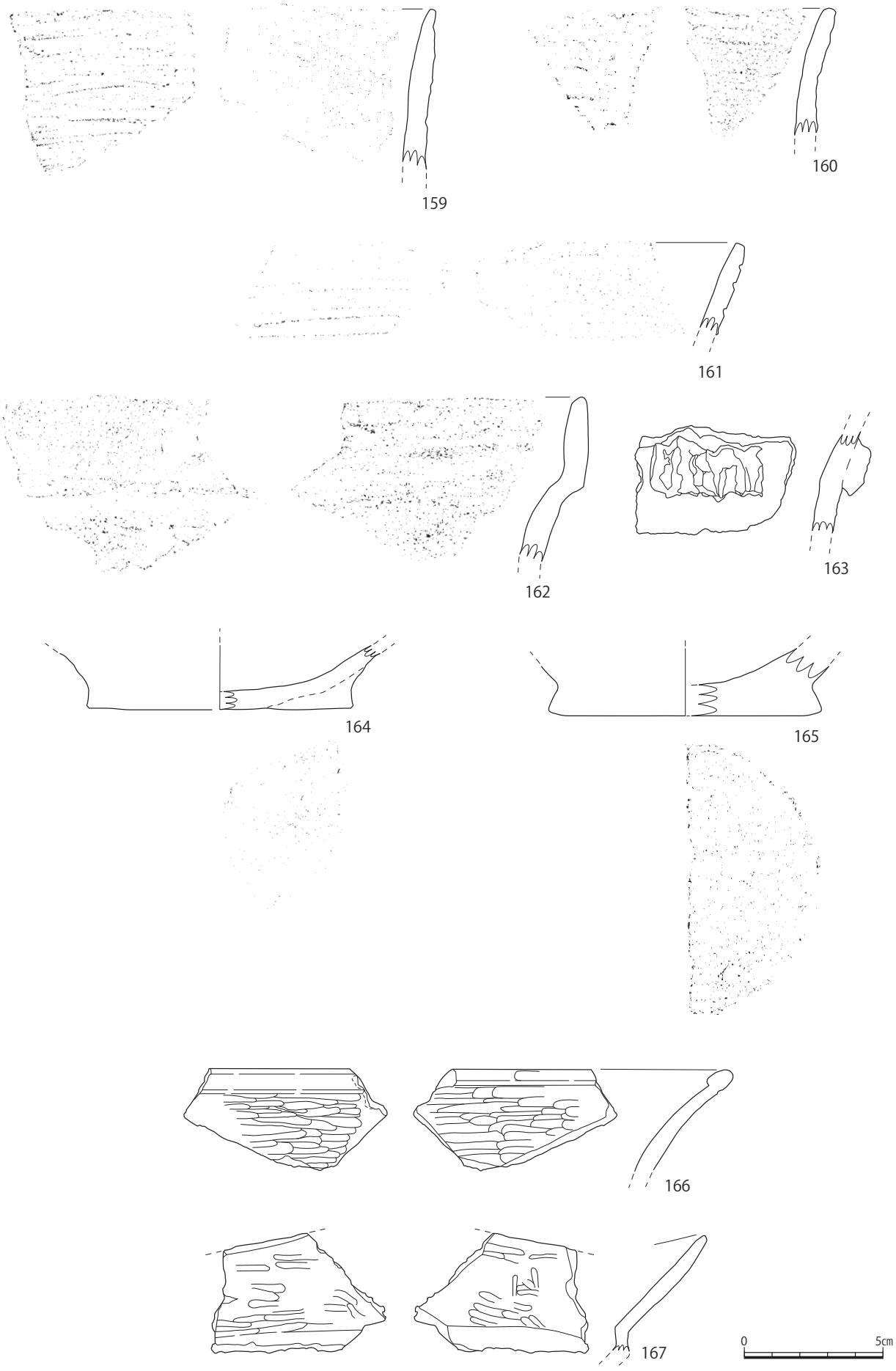
第51図　表土出土石器実測図①(Ｓ＝1/1・1/2)



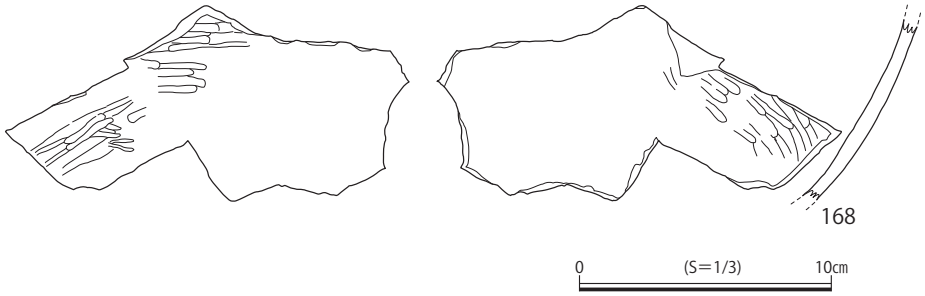


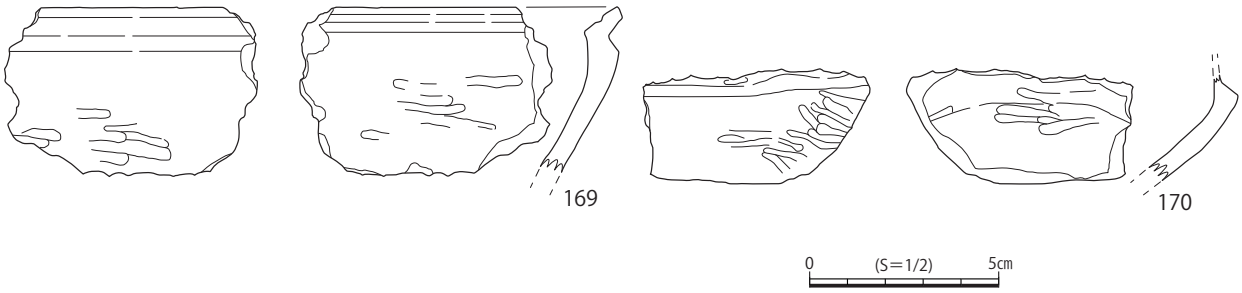
0　10cm

第52図　表土出土石器実測図②(Ｓ＝1/3)

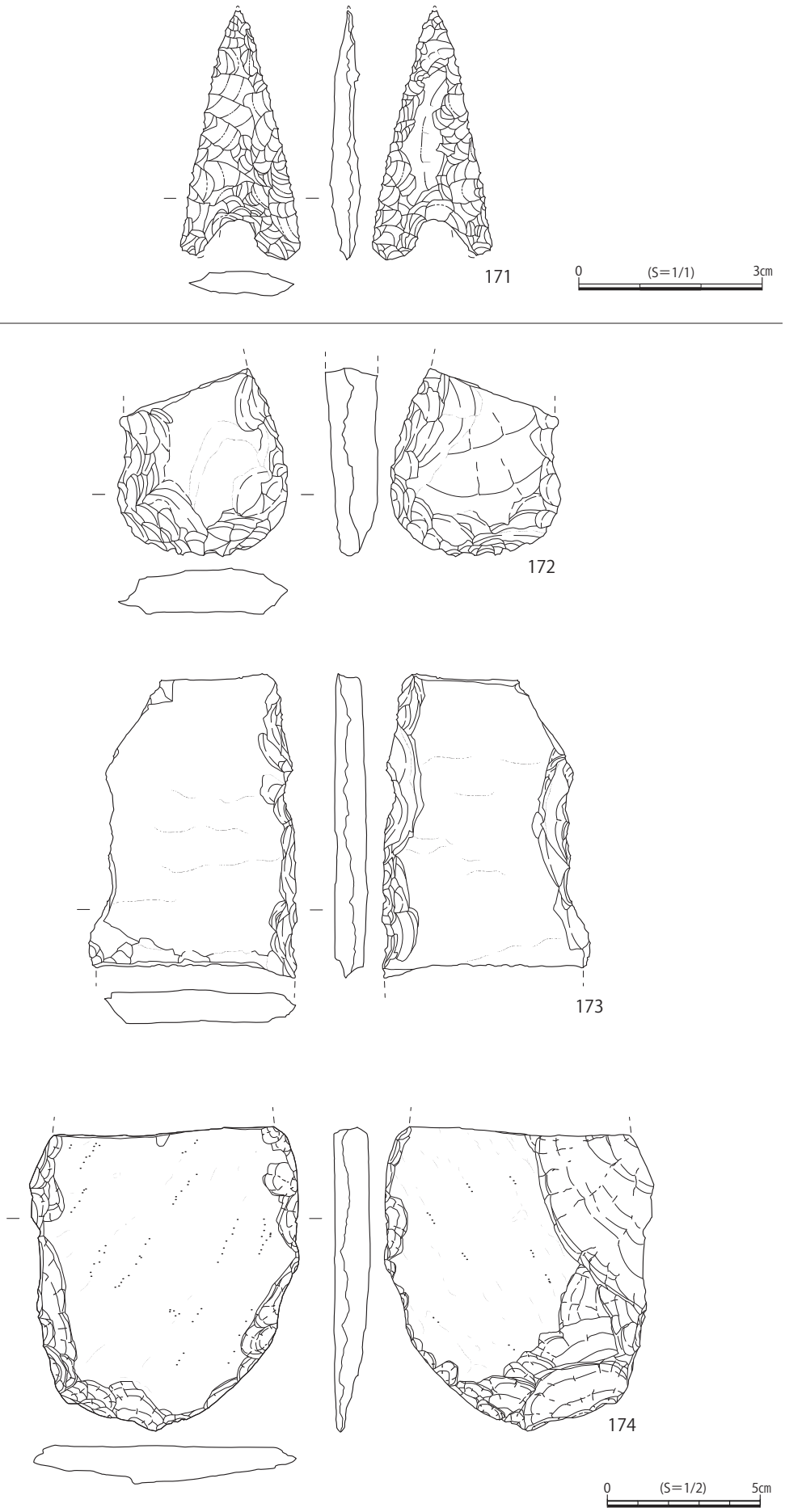


第53図　８区２層出土土器実測図①(Ｓ＝1/2)

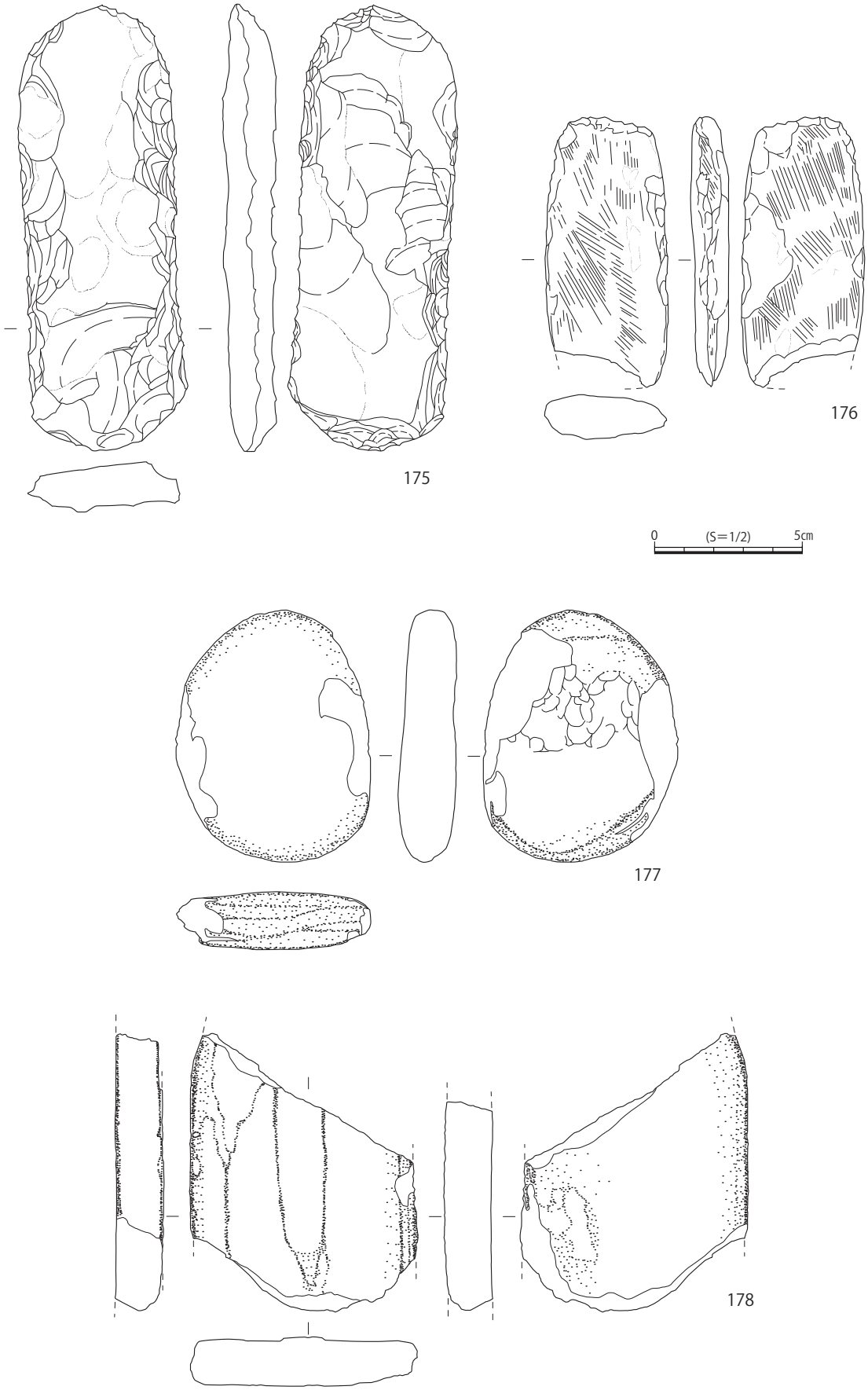




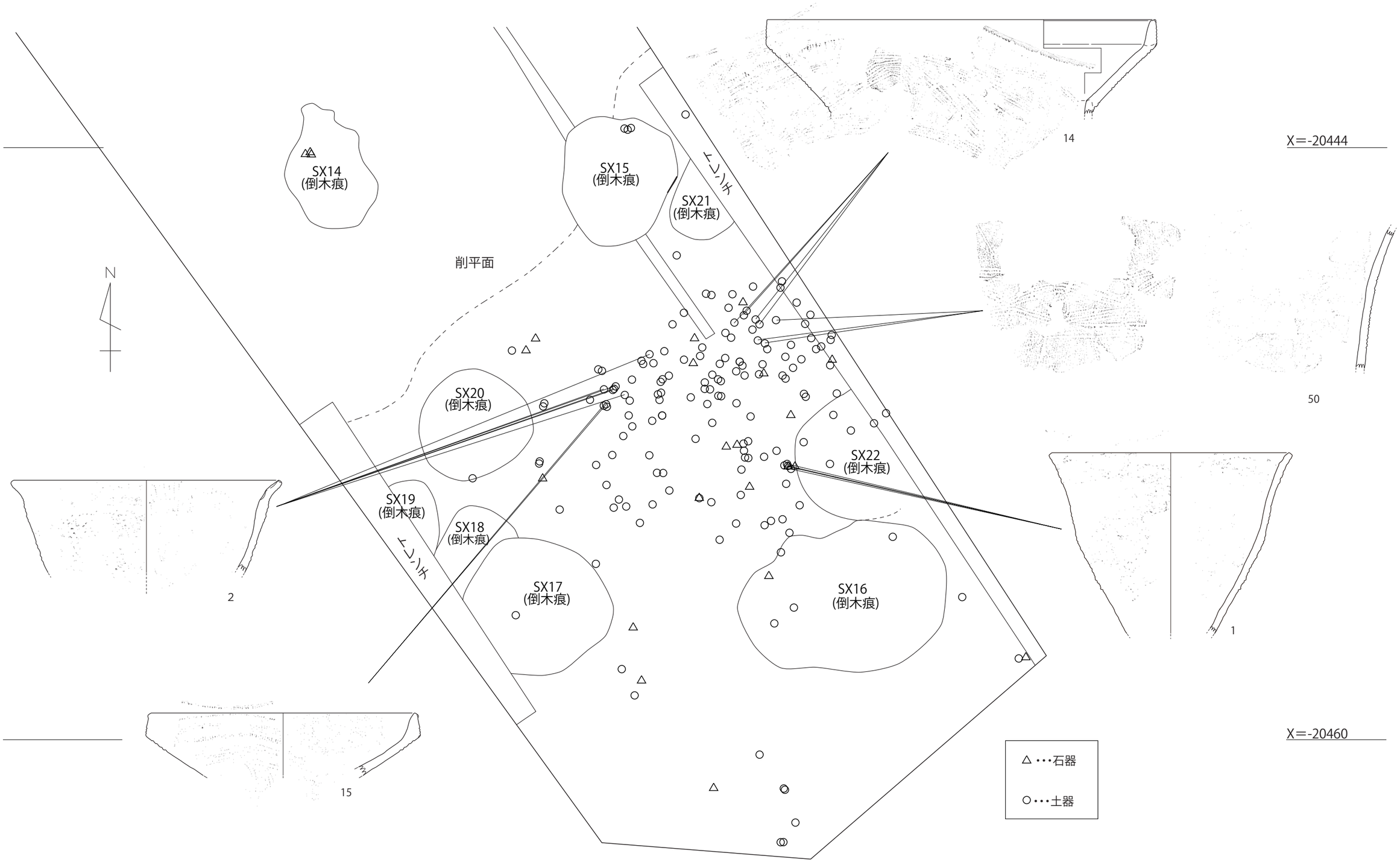
第54図　8区2層出土土器実測図②(Ｓ＝1/2・1/3)



第55図　7区・8区2層出土石器実測図①(Ｓ＝1/1・1/2)



第56図　7区・8区2層出土石器実測図②(Ｓ＝1/2)



第 57 図　7 区接合遺物出土状況図 (ドットマップ：S＝1/100　遺物：S＝1/5)

第Ⅴ章　自然科学分析

第１節　蛍光Ｘ線分析による黒曜石の産地推定

1. 分析方法

長崎県埋蔵文化財センターが所有するエネルギー分散型蛍光X線分析装置SIIナノテクノロジー株式会社(現　株式会社日立ハイテクサイエンス)製「SEA1200VX」を使用し、出土した黒曜石様石器類の蛍光X線分析を行った。計測は、下面照射式で照射径は8mmΦ、大気雰囲気下での計測の為、真空ポンプを用いず、X線の検出にSDD(シリコンドリフト検出器)を用いているため液体窒素を必要としない。Rh(ロジウム)管球を用い、管電圧40kVで管電流は抵抗値によって自動設定とした。測定時間は100秒(デットタイムを除く)とした。

蛍光X線分析によってK(カリウム)、Mn(マンガン)、Fe(鉄)、Rb(ルビジウム)、Sr(ストロンチウム)、Y(イットリウム)、Zr(ジルコニウム)の7元素のkα線特性X線強度(CPS: Counts　Per Second/1秒当たりのX線検出数)を計測し、それをもとに下記の式によって求められる4つのパラメータを用いて2種類の散布図を作成。同一条件で計測された、九州各地の産地から採取された黒曜石の計測値から、長崎県埋蔵文化財センター東アジア考古学研究室長の川道寛氏が作成した判別図を用いて産地推定を行った。

・パラメータの計算式

a. Rb分率 = {Rb強度×100/(Rb強度+Sr強度+Y強度+Zr強度)}

b. Sr分率 = {Sr強度×100/(Rb強度+Sr強度+Y強度+Zr強度)}

c. Mn強度×100/Fe強度

d.log10(Fe強度/K強度)

今回分析では、下油堀遺跡より出土した黒曜石と思われる石器類から、大きさ・形状・表面状態などを検討し、分析が可能と考えられる状態のものを抜き出し、65点の分析を行った。上油堀遺跡から出土した黒曜石と思われる石器類は、出土点数も少なく、上記の条件から分析が困難であると考えられたため、今回の分析は見送った。

分析の測定面は、なるべく平坦で汚れの少ない新鮮な面を選び、注記などの測定を阻害する個所を避けて測定を行ったが、汚れの目立つ資料については、超音波洗浄機を用いて洗浄を行い、測定面の清浄性を確保した。

2. 分析結果

分析を行った65点のうち61点は、上記判別図により産地の推定を行うことができた。そのうちの大部分にあたる56点は、同判別図で腰岳系(腰岳、有田川、松浦牟田②、松浦大崎⑤、古里海岸⑦)とされる領域にプロットされた。また2点が淀姫系(牛ノ岳(土器田)、針尾米軍基地、砲台山、淀姫神社・東浜、前畑弾薬庫、久木島米軍基地)、1点が椎葉川系(椎葉川、古里海岸②)にプロットされた。残り2点については、判別図の産地推定エリアが重複する領域にプロットされ、1点は、針尾中町①・古里海岸⑤の重複領域、もう1点は、針尾中町③・針尾無線塔の重複領域であった。以

上の結果から、分析を行った資料のうち産地推定が可能であった61点は、いずれも長崎県北部および佐賀県の黒曜石産地から供給されたものと推定された。(第2表～第4表・第58図)

今回、分析を行ったが産地推定に至らなかった4点の資料の概要は、以下の通りとなる。

・実測図番号:77(点上げ資料番号:S38)
器種:石鏃　出土:下油堀遺跡7区3層(包含層)
透明度が低く、風化は進んでいないが、石材内部に自生(晶出)と考えられる1mm弱の石英粒子が所々取り込まれていたため測定は石英粒子を避けて行った。パラメータから判別図の阿蘇3系(御船町・南阿蘇村長谷峠)とされる領域の近傍にプロットされたが、産地推定エリアの領域外であった。

・実測図番号:110(点上げ資料番号:S42)
器種:石鏃　出土:下油堀遺跡8区3層(包含層)
やや透明度のある黒色と透明度の高い白色のまだら模様の石材。斑晶は認められず、石基がガラス質なため、分類上は黒曜石の可能性はあるが、特殊なものと考えられる。
計測値の特性X線強度が全体的に弱く、判別図の産地推定エリアからかなり外れたパラメータを示した。

・資料番号:A22
器種:石核　出土:下油堀遺跡7区1層(表層)
全体が乳白色で、所々存在する黒色部分が透けて認められる。
姫島産に近いものと考えたが、計測値の特性X線強度が全体的に弱く、判別図の産地推定エリアからはやや外れたパラメータを示した。

・資料番号:A24
器種:剥片　出土:下油堀遺跡7区3層(包含層)
透明度は低いが、一般的な黒曜石と考えられる。
判別図の「Rb分率-Mn強度×100/Fe強度」図では腰岳系の領域にプロットされたが、Kの特性X線強度が相対的に強く、「Sr分率-log Fe/K」図では腰岳系下方の領域外にプロットされため、産地推定に至らなかった。

謝辞
黒曜石の自然科学分析について、分析機器の使用方法や分析値や判別図の取り扱いについて、長崎県埋蔵文化財センター調査課係長の片多雅樹氏にご指導をいただいた。記して御礼申し上げます。

※第58図は、長崎県埋蔵文化財センター研究紀要第7号p.22「九州黒曜石原産地位置図」から採取地をトレースし一部改変した。
※第58図・第59図において、各系統を以下の色で表記した。
腰岳系:赤色
阿蘇3系および阿蘇3系近傍にプロットされた資料:橙色
淀姫系:黄色
椎葉川系:黄緑色

針尾中野および針尾中野①・古里海岸⑤の重複領域にプロットされた資料:薄青色
針尾無線塔および針尾中野③・針尾無線塔の重複領域にプロットされた資料:青

【参考文献】

片多雅樹2015　「判別式を用いた黒曜石の産地推定～原産地データの蓄積」『長崎県埋蔵文化財センター研究紀要５号』35-40

辻田直人・村子晴奈2017　「第4章自然科学分析　第５節蛍光Ｘ線分析による石器石材産地同定」雲仙市文化財調査報告書　第15集　『栗山遺跡・下栗山遺跡　―八斗木地区県営基盤整備事業に伴う発掘調査報告―』124－169

川道寛・片多雅樹・辻田直人2017　「長崎県における黒曜石原産地研究の進展―原の辻遺跡原ノ久保地区石器群の分析を通して―」　『長崎県埋蔵文化財センター研究紀要第７号』21－41

図番号	採取区	採取層等								Rb分率		Sr分率		判別群	点上げ資料番号
	下油堀7区	3層	46.83	40.40	1907.07	127.57	541.14	96.84	533.65	9.82	2.12	41.65	1.61	阿蘇3系近傍	
	下油堀7区	3層	64.89	26.85	770.74	211.43	190.59	98.84	360.60	24.54	3.48	22.12	1.07	淀姫系	
	下油堀7区	3層	61.72	26.43	808.42	226.39	199.76	101.93	406.28	24.23	3.27	21.38	1.12	淀姫系	
	下油堀7区	3層	57.86	28.09	541.89	224.53	312.49	89.46	225.13	26.37	5.18	36.69	0.97	椎葉川系	
	下油堀8区	3層	8.75	7.29	20.96	17.10	94.37	36.19	79.17	7.54	34.79	41.61	0.38	未比定	
	下油堀3区	1層	63.61	24.12	581.93	237.79	106.06	98.55	268.55	33.45	4.14	14.92	0.96	針尾中野① 古里海岸⑤	
	下油堀4区	撹乱	66.51	24.08	564.51	331.68	93.46	128.13	211.61	43.36	4.27	12.22	0.93	腰岳系	
	下油堀5区	撹乱	62.94	22.83	546.77	307.39	91.78	126.74	212.47	41.63	4.18	12.43	0.94	腰岳系	
	下油堀7区		67.67	24.24	585.04	318.43	98.55	132.80	222.04	41.26	4.14	12.77	0.94	腰岳系	
	下油堀10区		64.28	21.89	544.49	301.80	91.78	124.47	207.92	41.57	4.02	12.64	0.93	腰岳系	
	下油堀10区		65.43	23.83	567.30	310.32	96.82	130.52	216.80	41.13	4.20	12.83	0.94	腰岳系	

※実測図番号は、遺構毎に振り直しした為、遺構から採取したものには、図番号の前に遺構番号を記した。

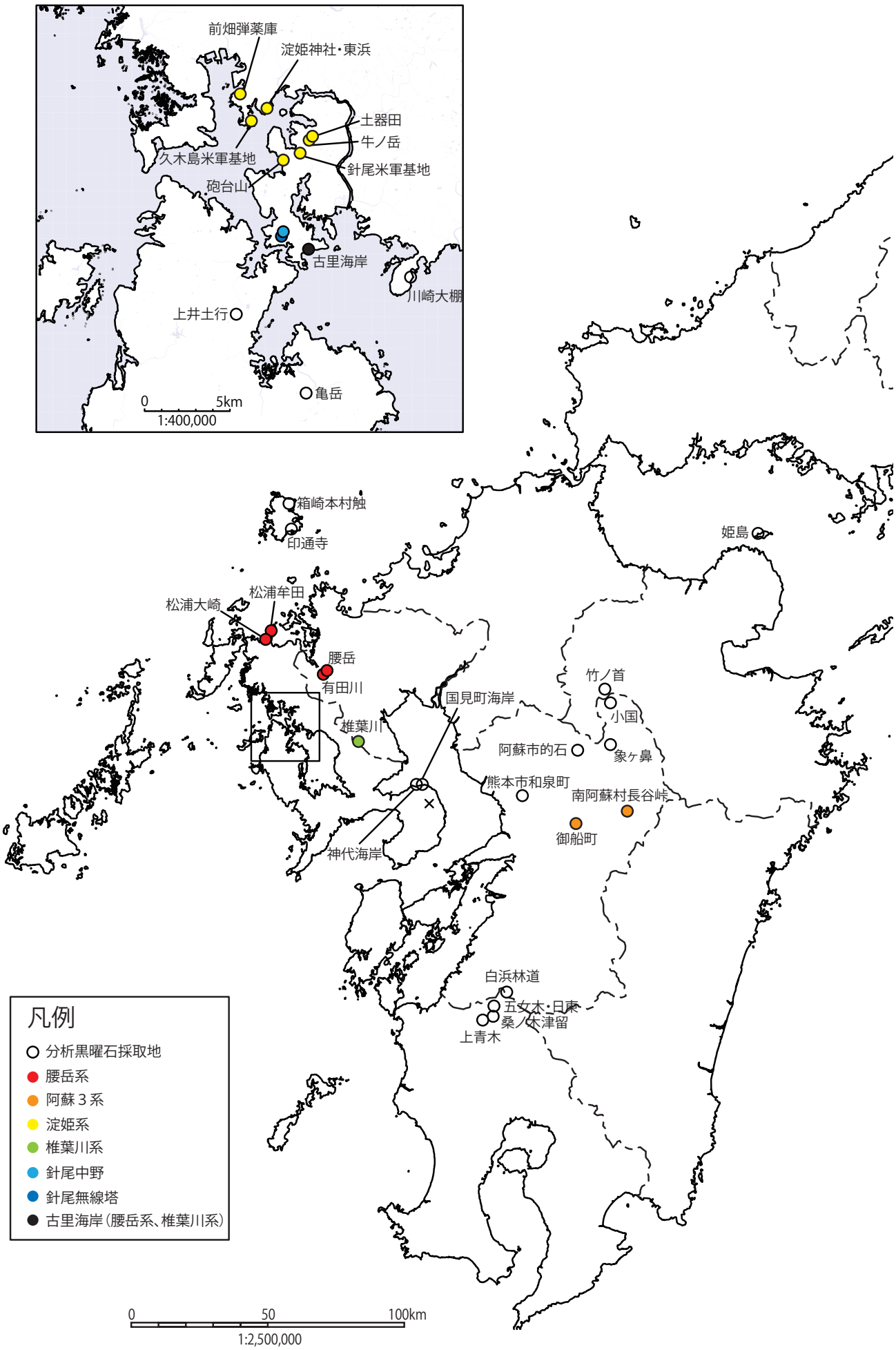
第2表　実測石器類の分析値表

資料番号	採取区	採取層等								Rb分率		Sr分率		判別群
	下油堀3区	3層	69.87	25.77	588.97	329.23	101.41	136.28	226.45	41.50	4.37	12.78	0.93	腰岳系
	下油堀3区	3層	54.44	21.22	484.59	274.64	84.51	118.55	198.46	40.62	4.38	12.50	0.95	腰岳系
	下油堀3区	3層	71.31	26.13	625.59	344.65	103.49	142.84	231.51	41.90	4.18	12.58	0.94	腰岳系
	下油堀3区	3層	60.20	20.76	511.45	284.78	87.79	117.91	197.82	41.37	4.06	12.75	0.93	腰岳系
	下油堀3区	3層	67.54	23.94	560.08	309.45	95.58	127.79	216.83	41.28	4.27	12.75	0.92	腰岳系
	下油堀3区	3層	75.36	27.91	654.56	338.18	101.31	135.59	225.46	42.24	4.26	12.66	0.94	腰岳系
	下油堀3区	3層	64.59	22.91	545.46	307.42	94.14	128.87	215.48	41.21	4.20	12.62	0.93	腰岳系
	下油堀3区	3層	67.75	24.41	578.75	319.62	98.80	135.69	224.15	41.07	4.22	12.70	0.93	腰岳系
	下油堀3区	3層	74.05	27.49	665.43	330.70	99.95	133.82	228.07	41.73	4.13	12.61	0.95	腰岳系

第3表　点上げ石器類の分析値表

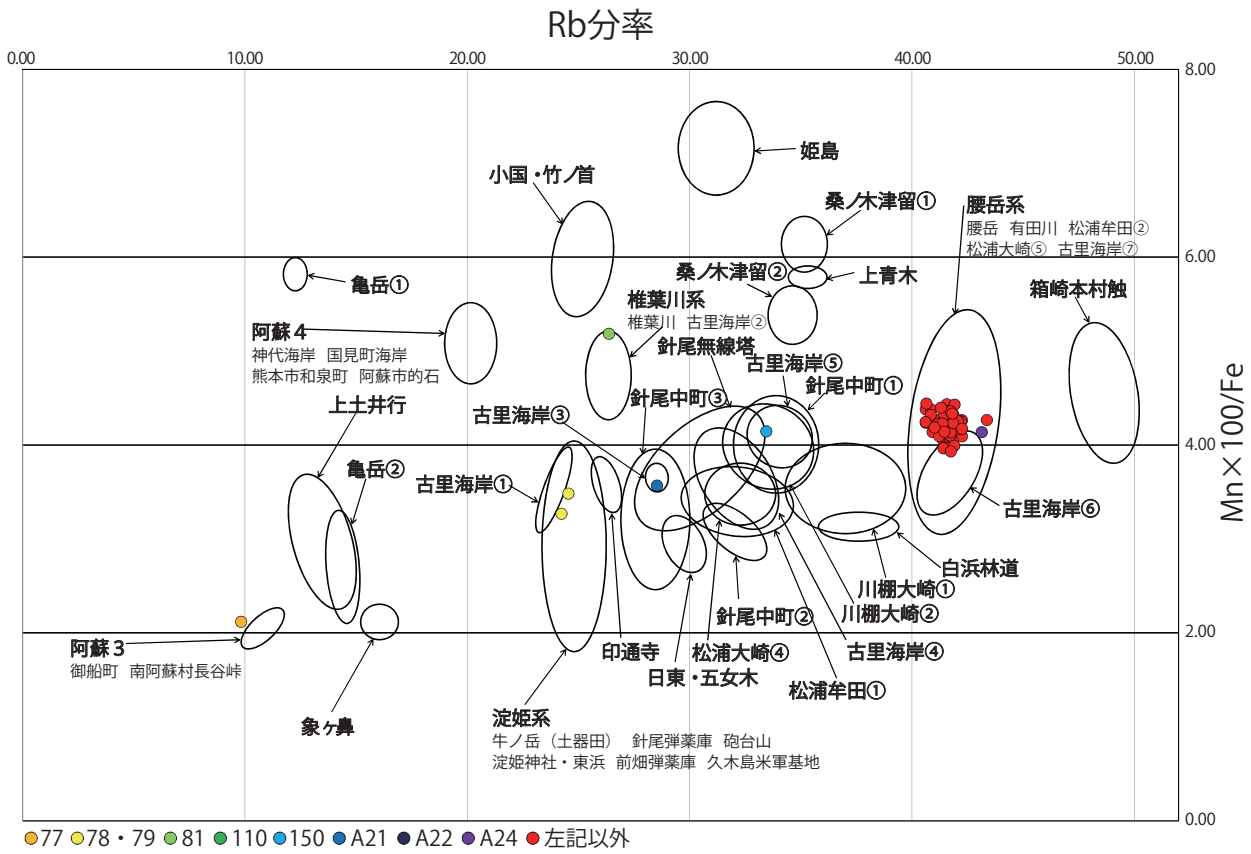
資料番号	採取区	採取層等								Rb分率		Sr分率		判別群
	下油堀2区	セクション	55.21	20.69	472.54	260.77	80.51	113.00	183.81	40.87	4.38	12.62	0.93	腰岳系
	下油堀2区	3層	60.05	22.59	522.92	294.52	89.00	126.67	210.99	40.84	4.32	12.34	0.94	腰岳系
	下油堀2区	3層	69.05	24.84	596.30	320.77	95.47	130.44	219.42	41.87	4.17	12.46	0.94	腰岳系
	下油堀2区	3層	74.20	25.86	610.73	328.19	101.85	137.11	227.47	41.30	4.23	12.82	0.92	腰岳系
	下油堀3区	1層	63.43	23.08	547.42	315.62	92.49	130.15	217.07	41.79	4.22	12.25	0.94	腰岳系
	下油堀3区	3層	66.77	25.16	567.42	317.00	98.05	130.22	217.43	41.56	4.43	12.86	0.93	腰岳系
	下油堀3区	3層	71.32	25.46	622.13	328.77	100.00	130.48	219.02	42.24	4.09	12.85	0.94	腰岳系
	下油堀3区	3層	58.36	22.76	512.41	284.68	88.55	122.96	204.21	40.65	4.44	12.64	0.94	腰岳系
	下油堀3区	3層	70.49	23.83	582.43	318.60	97.22	129.56	223.11	41.46	4.09	12.65	0.92	腰岳系
	下油堀4区	撹乱	69.61	24.69	587.48	316.30	94.64	128.42	214.71	41.95	4.20	12.55	0.93	腰岳系
	下油堀4区	3層	59.87	21.29	503.56	289.39	88.02	121.68	203.76	41.17	4.23	12.52	0.92	腰岳系
	下油堀4区	3層	67.75	25.22	577.78	309.76	95.50	127.10	212.34	41.60	4.36	12.82	0.93	腰岳系
	下油堀4区	3層	68.96	25.61	590.78	322.09	95.97	130.26	223.90	41.71	4.33	12.43	0.93	腰岳系
	下油堀5区	1層	67.56	24.47	596.89	315.47	97.06	128.47	216.18	41.66	4.10	12.82	0.95	腰岳系
	下油堀5区	1層	68.13	23.62	566.92	316.64	96.57	126.85	213.36	42.03	4.17	12.82	0.92	腰岳系
	下油堀5区	3層	67.15	24.54	577.10	311.89	91.75	125.50	210.17	42.19	4.25	12.41	0.93	腰岳系
	下油堀5区	3層	68.59	24.25	560.77	316.64	96.01	132.53	217.95	41.49	4.32	12.58	0.91	腰岳系
	下油堀5区	3層	68.66	24.25	600.51	320.61	98.18	129.99	219.81	41.71	4.04	12.77	0.94	腰岳系
	下油堀5区	3層	65.82	22.75	562.85	306.96	92.18	125.77	209.01	41.82	4.04	12.56	0.93	腰岳系
	下油堀6区	撹乱	66.98	23.58	575.11	321.14	96.95	131.45	220.22	41.72	4.10	12.59	0.93	腰岳系
	下油堀7区	1層	64.35	26.22	734.55	245.78	165.62	108.72	341.49	28.53	3.57	19.22	1.06	針尾中野③ 針尾無線塔
	下油堀7区	1層	8.31	6.79	38.82	14.97	30.77	33.36	66.80	10.26	17.48	21.09	0.67	未比定
	下油堀7区	3層	64.73	21.43	539.84	305.01	91.38	124.93	211.33	41.63	3.97	12.47	0.92	腰岳系
	下油堀7区	3層	98.60	22.85	552.42	338.13	93.49	134.21	218.09	43.13	4.14	11.93	0.75	未比定
	下油堀8区	撹乱	68.74	25.29	611.73	305.77	93.01	126.18	207.72	41.73	4.13	12.69	0.95	腰岳系
	下油堀8区	1層	73.01	27.60	622.92	334.17	98.23	136.29	228.57	41.92	4.43	12.32	0.93	腰岳系
	下油堀8区	1層	53.85	18.77	453.43	272.70	83.27	114.84	195.56	40.92	4.14	12.50	0.93	腰岳系
	下油堀8区	1層	65.51	23.23	586.06	306.30	93.05	126.63	213.67	41.41	3.96	12.58	0.95	腰岳系
	下油堀8区	1層	70.29	24.41	611.44	329.44	100.35	133.25	223.20	41.90	3.99	12.76	0.94	腰岳系
	下油堀8区	1層	70.82	25.41	595.50	317.34	97.92	131.70	217.37	41.52	4.27	12.81	0.92	腰岳系
	下油堀8区	1層	61.05	23.00	542.65	293.75	90.72	126.16	212.58	40.62	4.24	12.54	0.95	腰岳系
	下油堀8区	1層	64.71	23.78	560.29	309.78	98.25	131.07	223.69	40.61	4.24	12.88	0.94	腰岳系
	下油堀8区	1層	66.30	24.81	573.90	315.23	94.96	128.16	214.78	41.86	4.32	12.61	0.94	腰岳系
	下油堀8区	2層	63.70	23.56	545.12	309.10	92.63	130.48	213.40	41.46	4.32	12.42	0.93	腰岳系
	下油堀8区	2層	67.64	26.34	604.27	322.68	96.39	131.87	222.15	41.74	4.36	12.47	0.95	腰岳系
	下油堀8区	2層	67.31	24.41	555.05	311.87	95.90	127.86	219.49	41.30	4.40	12.70	0.92	腰岳系
	下油堀8区	2層	72.84	26.52	623.48	334.57	102.13	136.24	222.52	42.06	4.25	12.84	0.93	腰岳系
	下油堀8区	3層	70.42	25.70	607.20	324.52	97.31	131.29	222.31	41.85	4.23	12.55	0.94	腰岳系
	下油堀8区	3層	60.91	21.61	527.63	294.90	90.17	124.97	205.33	41.22	4.09	12.60	0.94	腰岳系
	下油堀8区	3層	70.16	24.59	567.29	316.96	94.28	130.14	216.64	41.81	4.33	12.44	0.91	腰岳系
	下油堀8区	3層	62.02	23.40	553.55	295.09	89.96	123.52	204.66	41.37	4.23	12.61	0.95	腰岳系
	下油堀8区	3層	68.32	24.57	588.77	317.21	94.85	127.62	211.13	42.25	4.17	12.63	0.94	腰岳系
	下油堀8区	3層	67.26	22.45	570.81	314.28	93.95	128.60	216.10	41.74	3.93	12.48	0.93	腰岳系
	下油堀8区	3層	68.91	24.46	590.56	314.16	96.17	129.55	218.00	41.45	4.14	12.69	0.93	腰岳系
	下油堀8区	3層	65.12	23.28	555.90	308.67	96.68	126.65	220.68	41.01	4.19	12.85	0.93	腰岳系

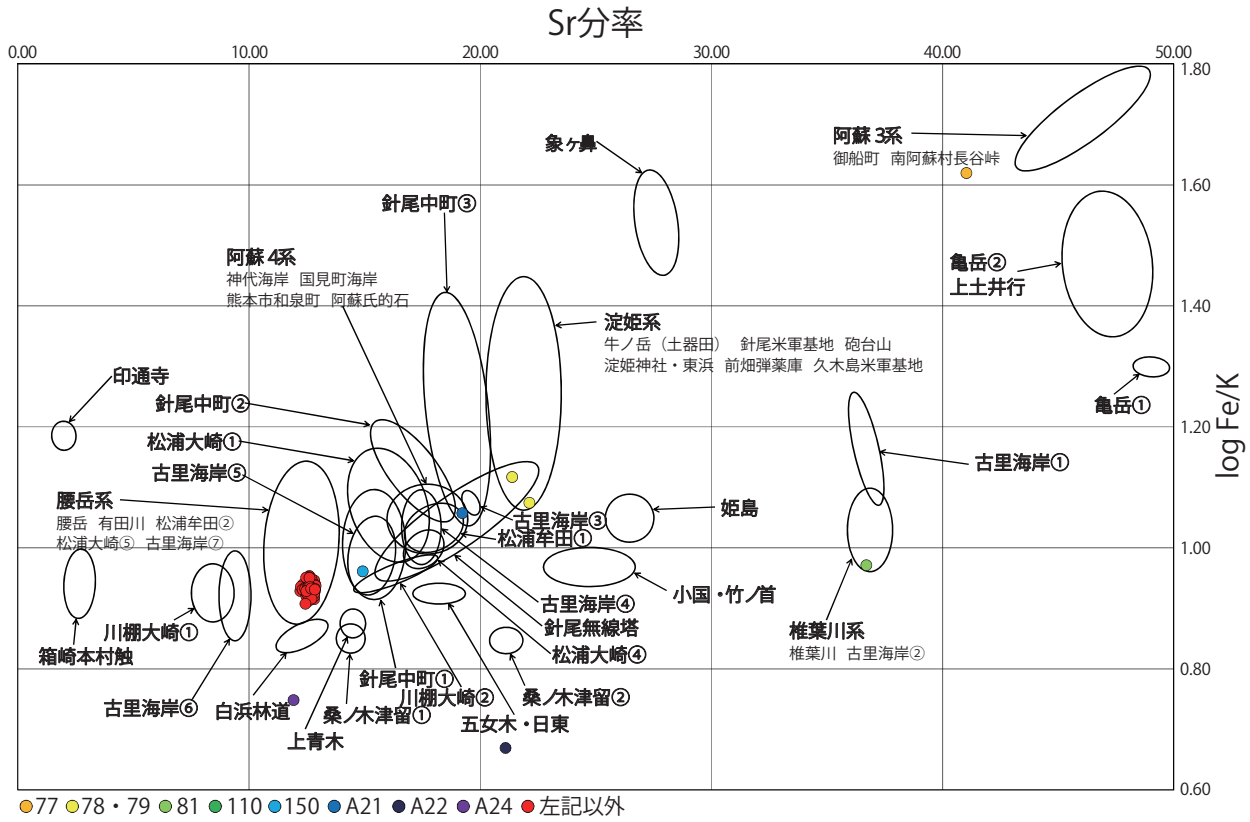
第4表　一括取り上げ石器類の分析値表



第58図　九州黒耀石採取地及び推定産地位置図

出土黒曜石の産地推定判別図





第59図　出土石器類の産地推定班別図

第Ⅵ章　まとめ

第1節　検出遺構

調査区の多くの部分が耕作等によって削平をうけ、表土直下において無遺物層である4層やいわゆるかしの実層である5層、さらには6層が露出している部分もあった。そのような状況であっても、下油堀遺跡の調査区において、道路状遺構や落し穴状遺構などを検出している。

縄文早期以降の遺構

SK02(第16図)は、1区より検出したかしの実層を掘削し設けられた遺構である。上面は耕作により削平を受けており本来の掘り込み面は不明である。底部に逆茂木痕と捉えられる様な痕跡は認められず、人為的に掘削された土坑として掲載した。埋土からは平栫式土器と考えられる土器小片1点が出土している。

SX04(第23図)は、4区より検出した落し穴状遺構である。上面が削平されており構築面は不明であるが、出土遺物から縄文時代早期、平栫・塞ノ神式土器の時期以前の可能性がある。雲仙市の栗山遺跡において類似する遺構が報告されている。同報告書によるとSX04と同様に底部中央付近にピットを設け、断面形状は漏斗状である。中央ピットには石が詰められており逆茂木などを固定するための目詰めの石であろうとのことであった。時期的には縄文時代晩期以降であろうとのことである。

縄文時代後期・晩期以降の遺構

SK03(第18図)は、8区において3層掘削中に検出した遺構である。3層検出面より掘り込まれた遺構である可能性がある。上面からは縄文時代後・晩期の土器が出土していることからそれ以前に掘り込まれた遺構と考えられる。

SX24(第25図)は、10区の3層上面において検出した焼土遺構で、炉跡の可能性がある。上面は耕作等によって削平を受けていると思われるため、本来の構築面は不明である。埋土からは縄文時代後期の坂ノ下式土器と思われる土器の底部が出土していることから、縄文時代後期以降に構築された遺構の可能性がある。

時期不明遺構

SF01及びSF02(第28図)は、道路状遺構として掲載した。3層直上であり耕作機械による影響を受けていることから縄文時代晩期以降、現在の畑以前の遺構と思われる。

SX09(第20図)は、4区において検出した。焼土と炭化物を含む方形の遺構である。3層直上の検出であるが、上面は耕作機械の削平を受けている可能性が高い。埋土は非常に締まりが弱い。比較的新しい時期の遺構であろう。

SP02及びSP03(第27図)は8区4層上面より検出した遺構である。上面は耕作により削平されているものと思われる。いずれも埋土からは遺物は出土せず、時期は不明である。

以下、遺構の可能性があるものとして、SP01(第27図)、SX23(第21図)、SX27(第22図)を検出した。

第2節　出土遺物

今回の調査では、コンテナ約20箱の遺物が出土した。ほとんどが下油堀遺跡の調査区からの出土である。押型文土器や塞ノ神・平栫式土器、縄文後晩期の土器、表土からではあるが弥生土器も出土している。

押型文土器は、文様や口縁部等の特徴から田村式段階と考えられる。大坪氏の長崎編年では百花台Ⅲ式土器あたりに分類されるであろう。

掲載した塞ノ神式土器及び平栫式土器に関しては、平栫式土器と塞ノ神式土器とに分類し掲載している。器形の特徴として、口縁部が逆くの字に屈曲し肥厚するもの、胴部で屈曲後大きく開くもの。文様の特徴として、口唇部外面及び屈曲部に刻目を持ち、屈曲部上部(文章では外面上部などと表記している)に横位及び斜位、曲線状の沈線や刺突連点文を組み合わせ、幾何学文を呈するもの、胴部については撚糸文を施文後刺突連点文や沈線で区画し、撚糸文を施文しない（文章では無施文部などと表記している）部分には斜位及び曲線状の沈線や刺突連点文で施文する（円形状の刺突連点文もある）ものを平栫式土器とした。

塞ノ神式土器は、器形の特徴として口縁部がラッパ状に開くもの、直線的に立ち上がるもの。文様の特徴として、口縁部は口唇部外面に刻目を施すのは平栫式土器と変わらないが、横位沈線や山形状の沈線有するもの、撚糸文と沈線で区画した区画文を用いるもの。胴部に関しては撚糸文後、横位及び斜位、曲線状の沈線による幾何学文を呈するものと数条の撚糸文を施文後、数条の横位沈線を施すもの、口縁部と同様に撚糸文と沈線で区画した区画文を用いるものを塞ノ神式土器とした。塞ノ神式は撚糸文系のみ出土し、貝殻文系は出土していない。

石器に関しては、出土層位ごとに掲載した。また黒耀石に関して、長崎県埋蔵文化財センターにおいて自然科学分析を行った。分析を行った黒曜石のうち産地推定が可能であった61点は長崎県北部及び佐賀県の黒曜石産地から供給されたものと推定された。

第3節　油堀3層の年代について

今回行った発掘調査では、上油堀遺跡及び下油堀遺跡において確認した遺物を多く包含する褐色の地層を共通の3層と認識している。この節では油堀3層と記述する。

熊本大学教育学部の谷口隼斗氏による本報告書付編の報告によると、広域テフラである姶良Tn火山灰（AT）が第10層（下油堀7区14層相当層）中に検出された。また、同報告内容から広域テフラの指標となるバルブウォール型火山ガラスが同10層に最も多く含まれており、3層（下油堀4区3層相当層）、9層、4層、・・・と順に少なくなくなっていくことも明らかとなった。このことから、油堀３層にはATより新しい広域テフラを含むと考えられる。

今回調査を行った上油堀遺跡、下油堀遺跡が所在する同じ河岸段丘上に位置する一野遺跡の発掘報告書（一野遺跡Ⅱ）では、4層（包含層）と13層に広域テフラが検出され、それぞれ鬼界アカホヤ火山灰（K－Ah）と阿蘇4火山灰（Ａｓｏ－4）と同定された。一野遺跡Ⅱの報告書ではＡｓｏ－４の上の１０層～１３層は火山灰を含むと考えられる層が堆積しており、検出はされなかったが１０層付近にATが含まれている可能性がある。一野遺跡の土層堆積状況と今回の上油堀遺跡及び下油堀遺跡の土層堆積状況を対比させると一野4層（包含層）が油堀3層に相当し、油堀3層にK－Ahを含有している可能性が非常に高い。したがって初生的な油堀3層の形成時期は鬼界アカホヤ火

山灰層の形成年代である約7300年前と想定する。

第4節　3層の区域による年代差について

７区３層の包含層からは、塞ノ神・平栫系の土器が集中して出土している。第3節の考察では油堀3層はK－Ah相当層の可能性があり、出土遺物と時期的には合致すると思われるが、8区の3層からは縄文後晩期の土器が集中して出土している。7区と8区の出土遺物に時期差が生じているが、堆積層の2次堆積による結果である可能性がある。

一野遺跡Ⅱの報告書では、油堀3層相当層である4層（K－Ah）は2次堆積であるとされている。また、上油堀遺跡1区からは油堀3層と4層の境界に流体移動の痕跡ともされる火炎構造が検出されており、油堀3層が再移動を行った可能性を補完している。

今回の調査区域直近には、南落ちで比較的活発でない活断層（活動度C級）である一本松断層が西南西から東北東方向に走っており、周辺にはそれに伴う比高2～4m程度の断層崖跡が存在することが知られている。その為、古地形としても南落ちの断層崖がこの地域周辺にあったことが示唆される。

これらのことから、油堀3層が一野遺跡4層と同様に再移動した2次堆積層であった場合、同一層内で南から北に向けて包含遺物に時期差が生じてくる可能性が考えられる。

第5節　最後に

調査対象区は、耕作等により大きく削平を受けていたが、縄文時代早期から晩期にかけての遺物や落し穴状遺構等が出土した。下油堀遺跡調査区に関しては地形的には傾斜地にあたり、多くの倒木痕や落し穴状遺構が確認されたことから推測するに居住に適した地では無く、主体部はより標高の高い地域にあったと想定される。

7区においては、押型文土器と平栫・塞ノ神式土器が共伴する。また範囲確認調査において確認された耳栓や本調査において確認された壺型土器は、雲仙市の松尾遺跡から出土事例が報告されている。今次調査において確認された遺物はこれら近隣の遺跡からの遺物と併せて、縄文時代早期における状況を示す資料になると考えられる。今後の調査・研究に期待したい。

【参考文献】

町田洋・新井房夫1978　『南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ―アカホヤ火山灰』第 四紀研究　　第17巻　143-163

南九州縄文研究会1998『九州縄文土器編年の諸問題』九州縄文研究会

南九州縄文研究会1998『九州の押型文土器論　攷編』九州縄文研究会

長崎県有明町教育委員会2001『一野遺跡Ⅱ』　長崎県有明町教育委員会

長崎県教育委員会2002『松尾遺跡』長崎県国見教育委員会

北沢俊幸・村越直美・川野幸朗2004　『カードケースを使った堆積構造の観察―携帯堆積空間』堆積学 研究　60　41―46

松岡暁ほか2005　『雲仙断層群の変位速度と活断層史』　活断層研究　25　135－146

長崎県深江町教育委員会2006『権現脇遺跡』深江教育委員会

須藤茂ほか2007　『わが国の降下火山灰データベース作成』　地質調査研究報告　第58巻第9/10号　261-321

長崎県教育委員会2008『門前遺跡Ⅱ』長崎県教育委員会

小林達夫2008『総覧縄文土器』アム・プロモーション

大坪芳典2009　「環境に影響を受けた九州の押型文土器-円筒形押型文土器・壺形土器について-」『南の縄文・地域文化論考』上巻

大坪芳典2012　「島原半島における押型文土器研究の再考」『九州縄文時代早期研究ノート』第5号

都市生活圏活断層図176雲仙2015　http://www.gsi.go.jp/　国土交通省国土地理院

20万分の１日本シームレス地質図V2 2017　https://gbank.gsj.jp/seamless/　国立研究開発法人産業技術　　総合研究所地質調査総合センター

William J. F. and Johnnie N. M. 1988 Basics of Physical Stratigraphy and Sedimentology John Wiley& Sons, Inc.

大坪芳典2016　「西北九州における貝殻文円筒形土器と押型文土器の編年」『西海考古』第9号

遺物観察表

図	番号	器種	出土層位	調整・文様		色調		焼成	胎土	備考
				外面	内面	外面	内面			
3	1	深鉢形土器	Ⅳ	ナデ・刻目・沈線文・刺突連点文	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	良好	石英・角閃石・雲母	３層相当
	2	深鉢形土器	Ⅳ	ナデ・沈線文・刺突連点文・撚糸文	ナデ	にぶい黄橙色	灰黄褐色	良	石英・角閃石・雲母	３層相当
	3	深鉢形土器	Ⅳ	撚糸文・ 刺突連点文	ナデ	にぶい黄橙色	明黄褐色	やや不良	石英・角閃石・雲母・赤色粒子	３層相当
	4	深鉢形土器	Ⅳ	ナデ・撚糸文・沈線	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	やや不良	石英・角閃石・雲母	３層相当
	5	深鉢形土器	Ⅳ	ナデ・撚糸文	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	やや不良	石英・角閃石・雲母	３層相当
	6	耳栓	Ⅳ	ナデ・沈線文	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	良	角閃石	３層相当
	7	耳栓	Ⅴ	ナデ・沈線文・刺突連点文	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	やや不良	石英・角閃石・雲母	3層相当

第5表　範囲確認調査出土遺物観察表

図	番号	器種	出土層位	調整・文様		色調		焼成	胎土	備考
				外面	内面	外面	内面			
8	1	深鉢形土器	1	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	暗灰黄色～黒褐色	やや不良	石英・雲母・パミス粒	
	2	注口土器	1	―	―	浅黄橙色	浅黄橙色	良好	雲母	
	3	甕形土器	1	ナデ	ナデ	にぶい橙色	にぶい橙色	やや不良	赤色粒子・雲母	

第6表　上油堀1区出土遺物観察表

図	番号	器種	区	グリッド	出土遺構	調整・文様		色調		焼成	胎土
						外面	内面	外面	内面		
17	1	深鉢形土器	1	D9-U24	SK02	刺突文・沈線	ナデ	にぶい黄橙色	明黄褐色	良	角閃石・雲母・赤色粒子
19	1	深鉢形土器	8	E8-Q18	SK03	ナデ	ナデ	灰黄褐色	にぶい黄橙色	良好	石英・角閃石・雲母・　金雲母
	2	深鉢形土器	8	E8-Q18	SK03	ナデ・沈線文	ナデ	にぶい黄褐色	灰黄褐色	良好	石英・角閃石・雲母・　赤色粒子
	3	深鉢形土器	8	E8-Q18	SK03	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	不良	石英・角閃石・雲母
24	1	深鉢形土器	4	D10-T2	SX04	ナデ・刺突連点文・撚糸文	ナデ	にぶい褐色	褐灰色	不良	石英・雲母
	2	深鉢形土器	4	D10-T2	SX04	ナデ・撚糸文	ナデ	灰褐色	にぶい黄褐色	やや不良	石英・雲母
	3	深鉢形土器	4	D10-T2	SX04	撚糸文	ナデ	褐色	褐色	やや不良	角閃石・雲母
26	1	深鉢形土器	10	E8-T11	SX24	ナデ	ナデ	橙色	にぶい黄橙色	良好	石英・角閃石・雲母

図	番号	器種	区	グリッド	出土遺構	石材	長さ（㎝）	幅（㎝）	暑さ（㎝）	重量（g）	備考
26	2	剥片	10	E8-T11	SX24	黒曜石	2.6	1.7	0.6	1.5	
	3	剥片	10	E8-T11	SX24	黒曜石	2.4	1.5	0.7	2.0	

第7表　遺構出土遺物観察表

図	番号	器種	区	出土倒木痕	調整・文様		色調		焼成	胎土	備考
					外面	内面	外面	内面			
29	1	深鉢形土器	1	SX11	ナデ・刻目・沈線・撚糸文	ナデ	黒褐色	にぶい黄褐色	良	石英・角閃石・雲母	P 13
	2	深鉢形土器	1	SX11	ナデ・撚糸文	ナデ	黒褐色	黒褐色	やや不良	石英・角閃石・雲母	P 14
	3	深鉢形土器	1	SX11	ナデ・撚糸文	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	不良	角閃石・雲母	
図	番号	器種	区	出土倒木痕	石材	長さ（cm）	幅（cm）	暑さ（cm）	重量（g）	備考	
29	4	石鏃	1	SX11	安山岩	3.0	1.2	0.3	1.0		
図	番号	器種	区	出土倒木痕	調整・文様		色調		焼成	胎土	備考
					外面	内面	外面	内面			
30	1	深鉢形土器	1	SX12	ナデ・刻目・刺突連点文・波線	ナデ	灰黄褐色	にぶい黄橙色	良好	石英・角閃石・雲母	P 11
	2	深鉢形土器	1	SX12	ナデ・刺突連点文・撚糸文	ナデ	褐灰色	灰黄褐色	良	石英・角閃石・雲母	
	3	深鉢形土器	1	SX12	ナデ・撚糸文・沈線	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄褐色	良	石英・角閃石・雲母	P 9
	4	深鉢形土器	1	SX12	ナデ・刻目	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	やや不良	石英・雲母	P 8
	5	深鉢形土器	1	SX12	ナデ・沈線・刻目	ナデ	明褐色	にぶい黄橙色	やや不良	石英・角閃石・雲母	P 6
	6	深鉢形土器	1	SX12	ナデ・刻目	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	やや不良	石英・雲母	
	7	深鉢形土器	1	SX12	ナデ・撚糸文	ナデ	赤褐色	にぶい赤褐色	やや不良	石英・角閃石・雲母	
	8	壺？	1	SX12	ナデ・撚糸文	ナデ	にぶい黄褐色	黒褐色	やや不良	石英・角閃石・雲母	P 12
	9	深鉢形土器	1	SX12	刺突文・撚糸文	ナデ	黒褐色	褐色	良	雲母・赤色粒子	P 7
図	番号	器種	区	出土倒木痕	石材	長さ（cm）	幅（cm）	暑さ（cm）	重量（g）	備考	
30	10	磨石	1	SX12	安山岩	7.8	—	4.2	259.0	S12	
図	番号	器種	区	出土倒木痕	調整・文様		色調		焼成	胎土	備考
					外面	内面	外面	内面			
30	1	深鉢形土器	6	SX13	刺突連点文・沈線文・刻目・ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	やや不良	石英・角閃石・雲母	
図	番号	器種	区	出土倒木痕	石材	長さ（cm）	幅（cm）	暑さ（cm）	重量（g）	備考	
31	1	打製石斧	7	SX14	安山岩	14.1	7.5	2.4	334.0	S28	
	2	磨製石斧	7	SX14	蛇紋岩	18.8	7.0	2.4	396.5	S27	
32	3	掻器／削器	7	SX14	安山岩	9.7	10.35	2.2	170.3	S29	
図	番号	器種	区	出土倒木痕	調整・文様		色調		焼成	胎土	備考
					外面	内面	外面	内面			
32	1	深鉢形土器	7	SX15	ナデ・沈線文・刺突文・刻目	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	やや不良	石英・角閃石・雲母	
図	番号	器種	区	出土倒木痕	石材	長さ	幅	厚さ	重量（g）	備考	
32	2	石鏃	7	SX15	黒曜石	3.1	1.4	0.5	2.0		

第8表　倒木痕出土遺物観察表

図	番号	器種	区	出土層位	調整・文様		色調		焼成	胎土	備考
					外面	内面	外面	内面			
33	1	深鉢形土器	7	3	押型文	ナデ・押型文	黒褐色～明褐色	浅黄褐色	良	石英・角閃石・雲母	P113・P114・P118・P119・1層と接合
	2	深鉢形土器	7	3	押型文	ナデ・原体条痕	灰黄褐色	褐灰色	良	石英・角閃石・雲母・赤色粒子	P57・P62・P105・P108・P109・P161と接合
	3	深鉢形土器	7	3	押型文	ナデ・原体条痕	灰黄褐色	灰黄褐色	良	石英・角閃石・雲母・赤色粒子	
34	4	深鉢形土器	7	3	押型文	ナデ	橙色	褐灰色	やや不良	石英・角閃石・雲母	P173
	5	深鉢形土器	7	3	押型文	ナデ	明黄褐色	灰黄褐色	やや不良	石英・角閃石・雲母・赤色粒子	P174
	6	壺形土器	7	3	撚糸文？	ナデ・原体条痕	浅黄橙色	浅黄橙色	良好	石英・角閃石	P81・P163と接合
	7	壺形土器？	7	3	撚糸文？	ナデ	浅黄褐色	灰黄褐色	良	石英・角閃石・赤色粒子	P123
	8	深鉢形土器	7	3	沈線文	ナデ	にぶい橙色	にぶい黄橙色	良	石英・角閃石・雲母	P156
	9	深鉢形土器	7	3	撚糸文・沈線文	ナデ	にぶい黄橙色	明黄橙色	やや不良	石英・角閃石・雲母	P122
	10	深鉢形土器	7	3	沈線文	ナデ	橙色	にぶい黄橙色	やや不良	石英・角閃石	P95
	11	深鉢形土器	7	3	ナデ・.沈線文.・刺突連点文	ナデ	灰黄褐色	にぶい黄橙色	良好	石英・角閃石・雲母	P129
	12	深鉢形土器	7	3	ナデ・刻目・沈線文・刺突連点文	ナデ	明黄褐色	明黄褐色	良	石英・角閃石・雲母	P97
	13	深鉢形土器	7	3	ナデ・刻目・沈線文・刺突連点文	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	良好	石英・角閃石・雲母	P44
35	14	深鉢形土器	7	3	ナデ・刻目・沈線文・刺突連点文	ナデ	黒褐色	浅黄橙色	良好	石英・角閃石・雲母	P137・P165・P169・P170と接合
	15	深鉢形土器	7	3	ナデ・刻目・刺突連点文・沈線文	ナデ	灰黄褐色	灰黄褐色	やや不良	石英・角閃石・雲母	P63・P64と接合
36	16	深鉢形土器	7	3	ナデ・刻目・沈線文・刺突連点文	ナデ	浅黄橙色	にぶい黄橙色	やや不良	石英・角閃石・雲母	P125
	17	深鉢形土器	7	3	ナデ・刻目・沈線文・刺突連点文	ナデ	灰黄褐色	にぶい黄橙色	良好	石英・角閃石・雲母	P112
	18	深鉢形土器	7	3	ナデ・刻目・沈線文・刺突連点文	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄橙色	良	石英・角閃石・雲母	P86
	19	深鉢形土器	7	3	ナデ・刻目・沈線文・刺突連点文	ナデ	灰黄褐色	にぶい黄褐色	良好	石英・角閃石・雲母	P106
	20	深鉢形土器	7	3	ナデ・刻目・沈線文・刺突連点文	ナデ	灰黄褐色	灰白色	良	石英・角閃石・雲母	P83
	21	深鉢形土器	7	3	ナデ・刻目・沈線文・刺突連点文	ナデ	灰黄褐色	にぶい黄褐色	良	石英・角閃石・雲母	P87
	22	深鉢形土器	7	3	ナデ・刻目・沈線文・刺突連点文	ナデ	浅黄橙色	浅黄橙色	やや不良	石英・角閃石・雲母	P49
	23	深鉢形土器	7	3	ナデ・刻目・沈線文・刺突連点文	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	良	石英・角閃石・雲母	P50
	24	深鉢形土器	7	3	ナデ・刻目・沈線文・刺突連点文	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	良	石英・角閃石・雲母	P99
	25	深鉢形土器	6.7	1.3	ナデ・刻目・沈線文・刺突連点文	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	良	石英・角閃石・雲母	P157・P158と接合
	26	深鉢形土器	7	3	ナデ・刻目・沈線文	ナデ	明黄褐色	明黄褐色	良	石英・角閃石・雲母	P116
	27	深鉢形土器	7	3	ナデ・刻目・沈線文	ナデ	灰黄褐色	にぶい黄褐色	やや不良	石英・角閃石・雲母	P82
	28	深鉢形土器	7	3	ナデ・刻目・沈線文	ナデ	灰黄褐色	灰黄褐色	良	石英・角閃石・雲母	P76
37	29	深鉢形土器	7	3	ナデ・刻目・沈線文	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	良	石英・角閃石・雲母	P144
	30	深鉢形土器	7	3	ナデ・刻目・沈線文	ナデ	浅黄橙色	浅黄橙色	やや不良	石英・雲母	P160

第9表　1区～7区3層出土遺物観察表①

図	番号	器種	区	出土層位	調整・文様		色調		焼成	胎土	備考
					外面	内面	外面	内面			
37	31	深鉢形土器	7	3	沈線文・撚糸文・刺突連点文	ナデ	黒褐色	灰黄褐色	良好	石英・雲母	P 120
	32	深鉢形土器	7	3	沈線文・撚糸文・刺突連点文	ナデ	褐灰色	にぶい黄橙色	良好	石英・角閃石・雲母	P 140
	33	深鉢形土器	7	3	ナデ・沈線文・刺突連点文	ナデ	浅黄橙色	にぶい黄橙色	良	石英・角閃石・雲母	P 101
	34	深鉢形土器	7	3	撚糸文・沈線文・刺突連点文	ナデ	にぶい橙色	にぶい橙色	やや不良	石英・角閃石・雲母	P 84
	35	深鉢形土器	7	3	ナデ・撚糸文・沈線文・刺突連点文	ナデ	浅黄橙色	にぶい黄橙色	やや不良	石英・角閃石・雲母	P 170
	36	深鉢形土器	7	3	ナデ・沈線文・刺突連点文	ナデ	浅黄橙色	にぶい黄橙色	良	石英・角閃石・雲母	P 98
	37	深鉢形土器	7	3	ナデ・撚糸文・沈線文・刺突連点文	ナデ	にぶい褐色	にぶい黄褐色	良	石英・角閃石・雲母	P 80
	38	深鉢形土器	7	3	撚糸文・沈線文・刺突連点文	ナデ	橙色	にぶい黄橙色	良	石英・角閃石・雲母	P 146
	39	深鉢形土器	7	3	撚糸文・沈線文・刺突連点文	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	不良	石英・角閃石・雲母	P 167
	40	深鉢形土器	7	3	ナデ・撚糸文・刺突連点文	ナデ	灰白色	にぶい黄橙色	良	石英・角閃石・雲母	P 135
38	41	深鉢形土器	7	3	ナデ・撚糸文・刺突連点文	ナデ	灰黄褐色	灰白色	やや不良	石英・角閃石・雲母	P 139
	42	深鉢形土器	7	3	ナデ・撚糸文・沈線文・刺突連点文	ナデ	にぶい黄橙色	灰黄褐色	良	石英・角閃石・雲母	P 147
	43	深鉢形土器	7	3	ナデ・刻目・沈線文・撚糸文	ナデ	にぶい黄橙色	浅黄橙色	良	石英・角閃石・雲母	P148
	44	深鉢形土器	1	3	ナデ・刻目	ナデ	橙	浅黄橙色	やや不良	石英・角閃石・雲母	
	45	深鉢形土器	7	3	刻目・ナデ・沈線文	ナデ	黒褐色	灰黄褐色	良好	石英・角閃石・雲母	P152
	46	深鉢形土器	7	3	ナデ・刻目・沈線文	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	良	石英・角閃石・雲母	P59
	47	深鉢形土器	3	3	沈線	ナデ	灰黄褐色	にぶい黄橙色	良好	石英・角閃石・雲母	
	48	深鉢形土器	7	3	ナデ・沈線文	ナデ	にぶい黄橙色	灰黄褐色	良好	石英・雲母	P134
	49	深鉢形土器	7	3	ナデ・沈線文・撚系文	ナデ	灰黄褐色	浅黄橙色	良	石英・角閃石・雲母	P104
39	50	深鉢形土器	7	3	ナデ・沈線文・撚系文	ナデ	にぶい黄橙色	灰黄褐色	良	石英・角閃石・雲母	P136・P166・P172と接合
	51	深鉢形土器	7	3	撚系文・沈線文	ナデ	明黄褐色	にぶい黄橙色	不良	石英・角閃石・雲母	
40	52	深鉢形土器	7	3	撚系文・沈線文	ナデ	灰黄褐色	にぶい黄橙色	良	石英・角閃石・雲母	P96
	53	深鉢形土器	4	3	ナデ・撚系文・沈線	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	やや不良	石英・角閃石・雲母	
	54	深鉢形土器	7	3	撚系文・沈線文	ナデ	黒褐色	にぶい黄褐色	良好	石英・雲母	P91
	55	深鉢形土器	7	3	撚系文・沈線文	ナデ	灰白色	浅黄橙色	やや不良	石英・角閃石・雲母	P107
	56	深鉢形土器	7	3	ナデ・撚系文・沈線文	ナデ	浅黄橙色	浅黄橙色	やや不良	石英・角閃石・雲母	P100
	57	深鉢形土器	7	3	ナデ・撚系文・沈線文	ナデ	明黄褐色	褐灰色	やや不良	石英・角閃石・雲母	P103
	58	深鉢形土器	7	3	ナデ・沈線文	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	良	長石・角閃石・雲母	P55
	59	深鉢形土器	7	3	ナデ・撚系文	ナデ	黒褐色	灰黄褐色	やや不良	石英・角閃石・雲母	P61
	60	深鉢形土器	7	3	ナデ・撚系文	ナデ	黒褐色	褐灰色	良	石英・角閃石・雲母	P155

第10表　1区～7区3層出土遺物観察表②

図	番号	器種	区	出土層位	調整・文様		色調		焼成	胎土	備考
					外面	内面	外面	内面			
41	61	深鉢形土器	7	3	ナデ・撚系文・沈線文	ナデ	黒褐色	黒褐色	良好	石英・角閃石・雲母	
	62	深鉢形土器	7	3	ナデ・刻目・撚系文・沈線文	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	良好	石英・角閃石・雲母	P143
	63	深鉢形土器	7	3	ナデ・撚系文・沈線文	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	良	角閃石・雲母	P142
	64	深鉢形土器	7	3	ナデ・撚系文・沈線文	ナデ	黒褐色	黒褐色	良好	石英・角閃石・雲母	P149
	65	深鉢形土器	7	3	ナデ・撚系文・沈線文	ナデ	にぶい黄橙色	明黄橙色	良	石英・角閃石・雲母	P121
	66	深鉢形土器	7	3	ナデ・撚系文・沈線文	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	良	長石・角閃石・雲母・赤色粒子	P66
	67	深鉢形土器	7	3	撚系文・沈線文	ナデ	にぶい黄橙色	灰黄褐色	良	石英・角閃石・雲母	P168
	68	深鉢形土器	7	3	ナデ・撚系文・沈線文	ナデ	灰黄褐色	にぶい黄褐色	良好	石英・角閃石・雲母	P56
	69	深鉢形土器	7	3	撚系文・沈線文	ナデ	灰黄褐色	にぶい黄褐色	良	石英・雲母・赤色粒子	P43
42	70	深鉢形土器	7	3	ナデ・撚系文	ナデ	明褐色	橙色	やや不良	石英・角閃石・雲母・赤色粒子	P110
	71	深鉢形土器	7	3	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	灰黄褐色	やや不良	石英・角閃石・雲母	P131
	72	深鉢形土器	7	3	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	灰黄褐色	良	石英・角閃石・雲母	P111・P154と接合
	73	壷形土器	7	3	微隆起線	ナデ	灰黄褐色	灰黄褐色	良	石英・角閃石・雲母	P128
	74	壷形土器	7	3	ナデ・微隆起線	ナデ	浅黄橙色	灰黄褐色	良	石英・角閃石・雲母	P127
	75	深鉢形土器	4	3	ナデ・連弧文	ナデ	褐色	褐色	やや不良	石英・角閃石・雲母・結晶片岩	P52
	76	深鉢形土器	7	3	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	良好	石英・雲母	P171

図	番号	器種	区	出土層位	石材	長さ（cm）	幅（cm）	暑さ（cm）	重量（g）	備考
43	77	石鏃	7	3	黒曜石	2.65	1.1	0.5	2.0	S38
	78	石鏃	7	3	黒曜石	2.2	1.2	0.4	1.0	S24
	79	石鏃	7	3	黒曜石	(2.4)	(1.5)	(3.2)	(1.0)	
	80	石鏃	7	3	凝灰岩	(2.2)	(1.2)	(0.4)	(0.8)	S32
	81	剥片	7	3	黒曜石	4.7	2.2	0.9	5.5	S40
	82	剥片	7	3	安山岩	2.1	3.5	5.0	2.8	S23
	83	掻器／削器	7	3	凝灰岩	3.7	6.0	1.3	18.0	
	84	掻器／削器	7	3	凝灰岩	5.2	8.5	1.5	60.0	S20
44	85	石匙	7	3	安山岩	4.9	11.0	1.3	42.3	S37
	86	石製品	7	3	砂岩	6.2	3.3	1.1	42.0	S124
	87	磨石/敲石	5	3	安山岩	7.5	5.5	3.5	222.3	S35
	88	敲石	7	3	安山岩	9.1	8.4	5.7	704.5	S39
	89	敲石	7	3	安山岩	7.5	(6.0)	(4.6)	223.0	S16
	90	磨石/敲石	3	3	安山岩	12.0	(7.6)	5.5	898.0	S11

第11表　1区～7区3層出土遺物観察表③

図	番号	器種	区	出土グリッド	出土層位	調整・文様		色調		焼成	胎土	備考
						外面	内面	外面	内面			
45	91	深鉢形土器	8	E8－P20	3	ナデ・沈線文	ナデ	灰黄褐色	黒褐色	不良	石英・雲母	
	92	深鉢形土器	8	E8－O22	3	貝殻条痕	ナデ	黒褐色	灰黄褐色	やや不良	石英・角閃石・雲母	
	93	深鉢形土器	8	E8－O23	3	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	にぶい黄橙色	やや不良	石英・角閃石・雲母	
	94	深鉢形土器	8	—	3	ナデ・沈線文	ナデ	黒褐色	暗褐色	良好	石英・角閃石・雲母	
	95	深鉢形土器	8	E8－P20	3	研磨・沈線文	研磨	灰黄褐色	灰黄褐色	良好	石英・角閃石・雲母・赤色粒子	
	96	深鉢形土器	8	—	3	ナデ	ナデ	褐色	にぶい黄橙色	良	石英・雲母・結晶片岩	
	97	浅鉢形土器	8	E8－R19	3	ナデ・沈線文	ナデ	黒褐色	黒褐色	やや不良	石英・角閃石・雲母	
	98	深鉢形土器	8	—	3	研磨・凹線文	研磨	浅黄橙色	浅黄橙色	良	石英・角閃石・雲母	
	99	壷形土器	8	—	3	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	やや不良	石英・角閃石・雲母・金雲母	
46	100	深鉢形土器	8	E8－R19	3	ナデ	ナデ	暗褐色	黒褐色	不良	石英・角閃石	
	101	浅鉢形土器	8	E8－R19	3	ナデ	ナデ	黄褐色	にぶい黄褐色	不良	石英・角閃石・雲母	
	102	深鉢形土器	8	E8－O22	3	ナデ	ナデ	褐色	灰黄褐色	良	石英・角閃石・雲母	
	103	深鉢形土器	8	E8－O23	3	ナデ	ナデ	褐色	暗褐色	やや不良	石英・角閃石	
	104	浅鉢形土器	8	E8－R19	3	研磨	ナデ	浅黄橙色	浅黄橙色	良	石英・雲母	
	105	浅鉢形土器	8	E8－R19	3	研磨	研磨	黒色	黒褐色	良好	石英・角閃石・赤色粒子	
	106	浅鉢形土器	8	E8－R19	3	研磨	研磨	黒褐色	黒褐色	良好	石英・角閃石	P179と接合
	107	浅鉢形土器	8	—	3	研磨	研磨	にぶい黄橙色	にぶい黄褐色	良好	石英・雲母	
	108	浅鉢形土器	8	E8－O23	3	研磨	研磨	黒褐色	黒褐色	良好	石英・雲母	
	109	浅鉢形土器	8	E8－R19	3	ナデ	ナデ	褐色	にぶい黄褐色	やや不良	石英・角閃石・雲母	

図	番号	器種	区	出土グリッド	出土層位	石材	長さ（㎝）	幅（㎝）	暑さ（㎝）	重量（g）	備考
47	110	石鏃	8	E8－S19	3	黒曜石	3.8	2.2	0.4	2.8	S42
	111	石匙	8	E8－O21	3	安山岩	5.05	11.0	1.0	36.8	S41
	112	打製石斧	8	E8－S19	3	安山岩	(6.9)	(7.05)	(1.0)	(63.5)	
	113	局部磨製石斧	8	E8－P18	3	凝灰岩	(7.7)	(6.7)	(0.8)	(56.3)	
	114	磨石/敲石	8	E8－R19	3	安山岩	9.5	7.9	7.1	(637.5)	

第12表　8区3層出土遺物観察表

図	番号	器種	区	出土グリッド	出土層位	調整・文様		色調		焼成	胎土	備考
						外面	内面	外面	内面			
48	115	深鉢形土器	7	—	1	原体条痕	ナデ	灰白色	褐灰色	良	石英・雲母	
	116	深鉢形土器	1	—	撹乱	ナデ・刻目・刺突連点文・沈線	ナデ	黒褐色	黒褐色	良好	石英・雲母	
	117	深鉢形土器	4	—	1	ナデ・連弧文・刻目	ナデ	黒褐色	黒褐色	やや不良	石英・角閃石・雲母	
	118	深鉢形土器	1	—	撹乱	ナデ・刺突連点文・刻目・沈線	ナデ	浅黄橙色	にぶい橙色	良	石英・角閃石・雲母	
	119	深鉢形土器	1	—	撹乱	ナデ・刺突連点文・撚糸文	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	やや不良	石英・角閃石・雲母	
	120	深鉢形土器	4	—	1	ナデ・沈線・刺突連点文		灰黄褐色	浅黄橙色	やや不良	角閃石・雲母	
	121	深鉢形土器	1	—	1	沈線文	ナデ	にぶい褐色	にぶい橙色	良	石英・角閃石・雲母	
	122	深鉢形土器	1	—	1	撚糸文・沈線文	ナデ	にぶい橙色	にぶい橙色	良	石英・角閃石・雲母	
	123	深鉢形土器	1	—	1	ナデ・撚糸文・沈線文	ナデ	黒褐色	浅黄橙色	やや不良	石英・角閃石・雲母	
	124	深鉢形土器	1	—	撹乱	沈線・撚糸文	ナデ	にぶい橙色	浅黄橙色	やや不良	石英・角閃石・雲母	
	125	深鉢形土器	1	—	撹乱	撚糸文・ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	黒褐色	やや不良	石英・角閃石・雲母	
49	126	深鉢形土器	4	—	撹乱	貝殻条痕・ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	灰黄褐色	良	石英・角閃石・雲母	
	127	深鉢形土器	3	—	1	貝殻条痕・ナデ	ナデ	黒褐色	にぶい黄褐色	良	石英・角閃石	
	128	深鉢形土器	2	—	1	貝殻条痕・ナデ	ナデ	にぶい褐色	褐色	良	石英・角閃石・雲母	
	129	深鉢形土器	2	—	1	貝殻条痕	貝殻条痕	黒褐色	にぶい黄橙色	良	長石・角閃石・雲母	
	130	深鉢形土器	4	—	1	ナデ	ナデ	浅黄橙色	浅黄橙色	やや不良	石英・角閃石・雲母	
	131	深鉢形土器	7	—	1	条痕ナデ消し	ナデ	黒褐色	褐色	やや不良	石英・角閃石・雲母	P22
	132	深鉢形土器	6	—	1	ナデ	ナデ	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	良	石英・角閃石・雲母	
	133	深鉢形土器	8	E8-P18	撹乱	ナデ	ナデ	褐色	黒褐色	やや不良	石英・角閃石・雲母	
	134	深鉢形土器	4	—	1	ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい黄橙色	やや不良	石英・角閃石・雲母	
50	135	浅鉢形土器	4	—	1	研磨・沈線	研磨	灰黄色	黄灰色	やや不良	石英・角閃石・雲母	
	136	浅鉢形土器	7	—	2	磨き	磨き	浅黄橙色	黒色	良	石英・角閃石	P71
	137	浅鉢形土器	4	—	1	研磨・沈線	研磨	黒褐色	黒褐色	良	石英・角閃石・雲母	
	138	浅鉢形土器	4	—	撹乱	ナデ	ナデ	灰黄褐色	にぶい黄橙色	やや不良	角閃石・雲母	
	139	浅鉢形土器	4	—	1	研磨	研磨	黒褐色	暗灰黄色	良好	角閃石・雲母	
	140	浅鉢形土器	4	—	1	貝殻条痕・ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	浅黄橙色	やや不良	石英・角閃石・雲母	
	141	浅鉢形土器	3	—	1	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	良	角閃石・雲母	
	142	甕	4	—	1	ナデ	ナデ	浅黄橙色	にぶい黄橙色	良	石英・雲母	
	143	甕	4	—	1	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	灰白色	良	石英・角閃石・雲母	
	144	甕	7	—	1	ナデ	ナデ	橙色	橙色	良好	石英・角閃石・雲母	
	145	甕	4	—	1	ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	良	角閃石・雲母・赤色粒子	
	146	甕	4	—	1	ナデ	ナデ	にぶい橙色	にぶい橙色	良	石英・雲母	
	147	甕	4	—	1	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	褐灰色	良	石英・角閃石・雲母	

第13表　表土及び2層、その他出土遺物観察表①

図	番号	器種	区	出土グリッド	出土層位	調整・文様 外面	調整・文様 内面	色調 外面	色調 内面	焼成	胎土	備考
50	148	甕	4	—	1	ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい黄橙色	やや不良	角閃石・雲母・赤色粒子	
	149	土錘	5	—	撹乱	—	—	にぶい褐色	—	良	雲母	

図	番号	器種	区	出土グリッド	層位	石材	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	備考
51	150	石鏃	3	—	1	黒曜石	2.9	(1.1)	2.5	1.0	
	151	石鏃	4	—	撹乱	黒曜石	(1.5)	1.4	0.4	1.0	
	152	石鏃	5	—	撹乱	黒曜石	(2.0)	1.6	0.3	2.0	
	153	石匙か	4	—	1	安山岩	(2.6)	(2.5)	(0.6)	(4.0)	
	154	打製石斧	4	—	1	疑灰岩	8.55	4.3	1.8	81.0	
	155	摩製石斧	4	—	撹乱	蛇紋岩	9.0	4.3	1.2	73.0	
	156	敲石か	2	—	トレンチ	砂岩	8.5	5.8	3.4	197.0	

図	番号	器種	区	出土グリッド	出土層位	石材	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	備考
52	157	磨石	4	—	撹乱	安山岩	8.05	7.55	4.6	446.0	
	158	板状石材	7	—	1	結晶片岩	21.3	11.4	2.0	647.0	

図	番号	器種	区	出土グリッド	出土層位	調整・文様 外面	調整・文様 内面	色調 外面	色調 内面	焼成	胎土	備考
53	159	深鉢形土器	8	E8－R18	2	貝殻条痕	ナデ	黒褐色	にぶい黄橙色	良好	石英・角閃石・雲母	
	160	深鉢形土器	8	E8－R18	2	貝殻条痕	ナデ	黒褐色	にぶい黄橙色	良	石英・雲母	
	161	深鉢形土器	8	E8－R18	2	ナデ・沈線文	ナデ	黒褐色	灰褐色	良好	石英・角閃石・雲母・赤色粒子	
	162	深鉢形土器	8	E8－Q18	2	ナデ	ナデ	灰黄褐色	灰黄褐色	良	石英・角閃石・雲母	
	163	深鉢形土器	8	E8－P19	2	貝殻条痕	ナデ	黒褐色	黒色	やや不良	石英・角閃石・雲母	
	164	浅鉢形土器	8	E8－R18	2	ナデ	ナデ	褐色	にぶい褐色	良	石英・角閃石・雲母	
	165	深鉢形土器	8	E9－L2	2	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	やや不良	石英・角閃石・雲母	
	166	浅鉢形土器	8	E8－P19	2	研磨	研磨	黒褐色	黒色	良好	石英・雲母	
	167	浅鉢形土器	8	E8－P19	2	研磨	研磨	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良好	石英・角閃石	
54	168	浅鉢形土器	8	E8―R17・R18	2	研磨	研磨	黒褐色	にぶい黄橙色	良好	石英・角閃石・雲母・赤色粒子	
	169	浅鉢形土器	8	E8－O22	2	研磨	研磨	にぶい褐色	にぶい褐色	良	石英・角閃石・雲母・赤色粒子	
	170	浅鉢形土器	8	E8－Q19	2	研磨	研磨	灰黄褐色	黒褐色	良好	雲母	

図	番号	器種	区	出土グリッド	層位	石材	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	備考
55	171	石鏃	7	—	2	安山岩	4.05	1.9	0.5	3.0	S14
	172	打製石斧	8b	E8－P19	2	凝灰岩	(5.9)	(5.5)	(1.7)	(65.8)	
	173	打製石斧	8	E8－R18	2	凝灰岩	(9.7)	6.6	1.1	105.8	
	174	打製石斧	8	E8－P21	2	凝灰岩	(10.0)	(8.8)	1.2	129.5	
56	175	打製石斧	8	E8－R18	2	変成岩	15.1	5.3	1.8	222.0	
	176	磨製石斧	8	E8－Q20	2	シルト岩	(9.1)	4.1	1.3	(43.5)	
	177	磨石/敲石	8b	E8－P20	2	砂岩	8.5	6.6	1.96	138.5	
	178	砥石	8	E8－P19	2	砂岩	9.4	7.7	1.65	136.0	

第14表　表土及び2層、その他出土遺物観察表②

写　真　図　版

範囲確認調査TP18近景

範囲確認調査TP18土層堆積状況

図版2

範囲確認調査TP18出土遺物

調査地と有明海を望む(手前上油堀遺跡調査区)

上油堀1区全景

図版4

作業風景

上油堀1区雲仙火山灰検出状況

上油堀1区南壁土層①

上油堀1区南壁土層②

上油堀1区出土遺物

調査地と普賢岳を望む(手前下油堀遺跡調査区)

下油堀2・3区全景

図版6

下油堀１・４区全景

２区西壁

２区南壁

４区西壁

3区西壁

4区南壁

1区遺構検出状況(西から)

2区遺構検出状況(西から)

3区遺構検出状況(西から)

4区遺構検出状況(西から)

SK02検出状況(西から)

SX04検出状況(西から)

SX04断面

図版8

SX04底部ピット(西から)

SX04底部ピット断面状況

2区作業状況

SX09断面状況

土器出土状況

土器出土状況

下油堀5・6・7区全景

5区東壁

5区北壁

6区東壁

7区東壁

図版10

7区北壁

7区南壁

5区3層検出状況(西から)

7区3層検出状況(北から)

作業状況

石器出土状況

調査風景

SX14石器出土状況(西から)

SX14石器出土状況

下油堀8・9・10区全景

図版12

8区東壁

8区西壁

8区北壁

9区南壁

10区西壁

10区北壁

8区3層検出状況(西から)

8区張り出し部削平状況

9区削平状況(東から)

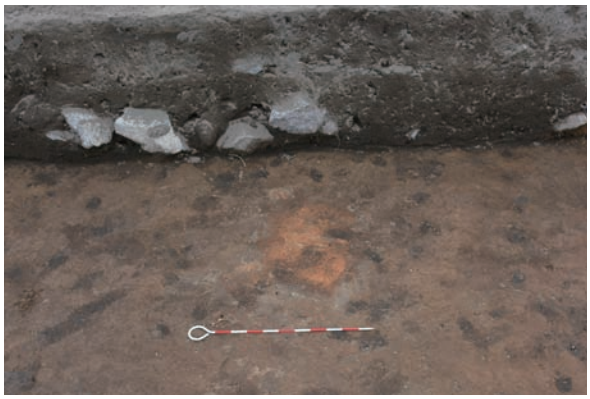
10区3層検出状況(西から)

SF01検出状況(西から)

SF02検出状況(北から)

SK03断面状況(西から)

SX23断面状況(西から)



SX24検出状況(北から)

SX24断面(北から)

図版14

SX27断面状況(南から)

土器出土状況

土器出土状況

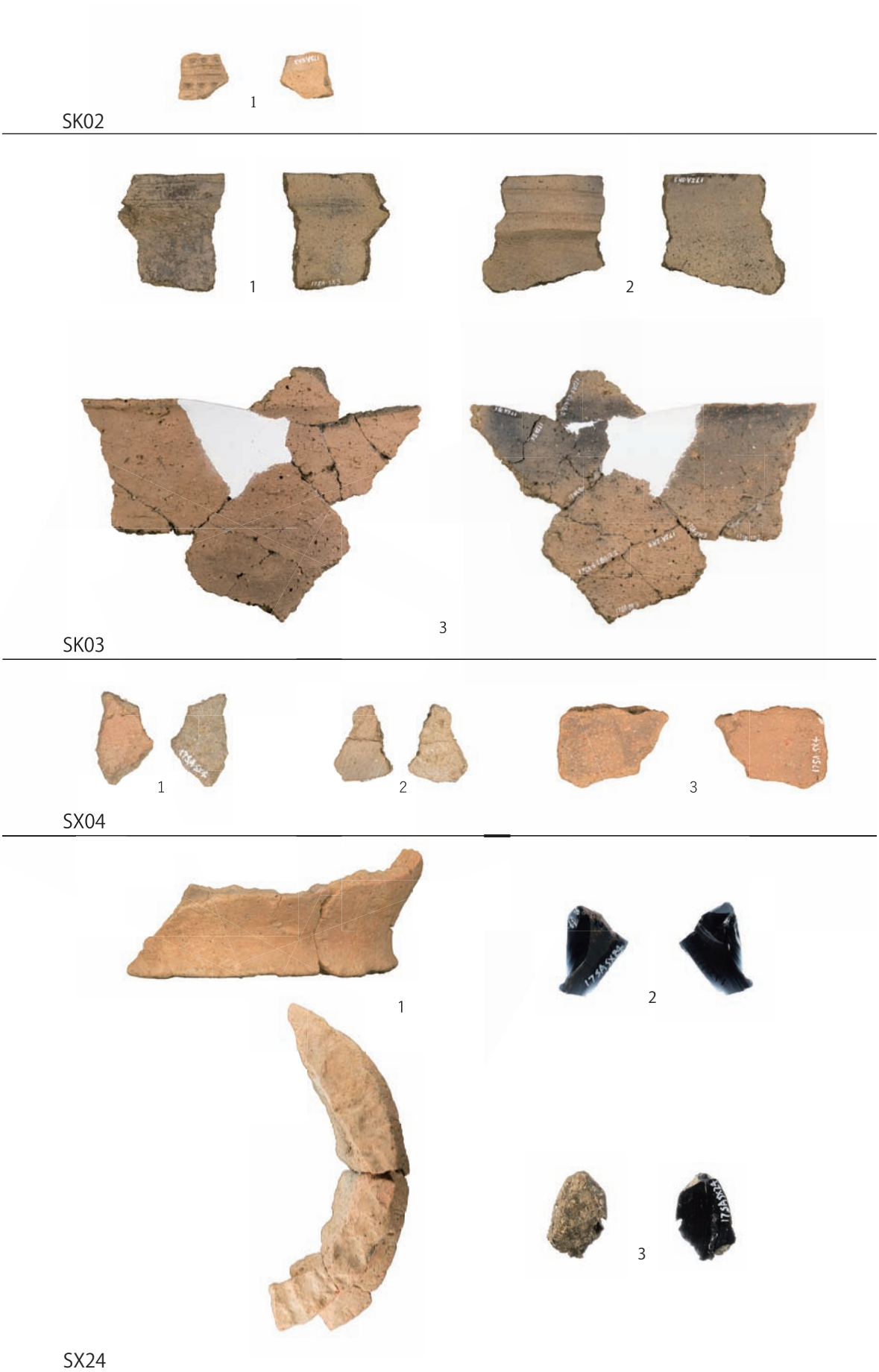
土器出土状況

石器出土状況

石器出土状況

作業風景

作業風景



SK02・SK03・SX04出土遺物

SX11出土遺物

SX12・SX13出土遺物

図版18

1

2

3

SX14

1

SX15

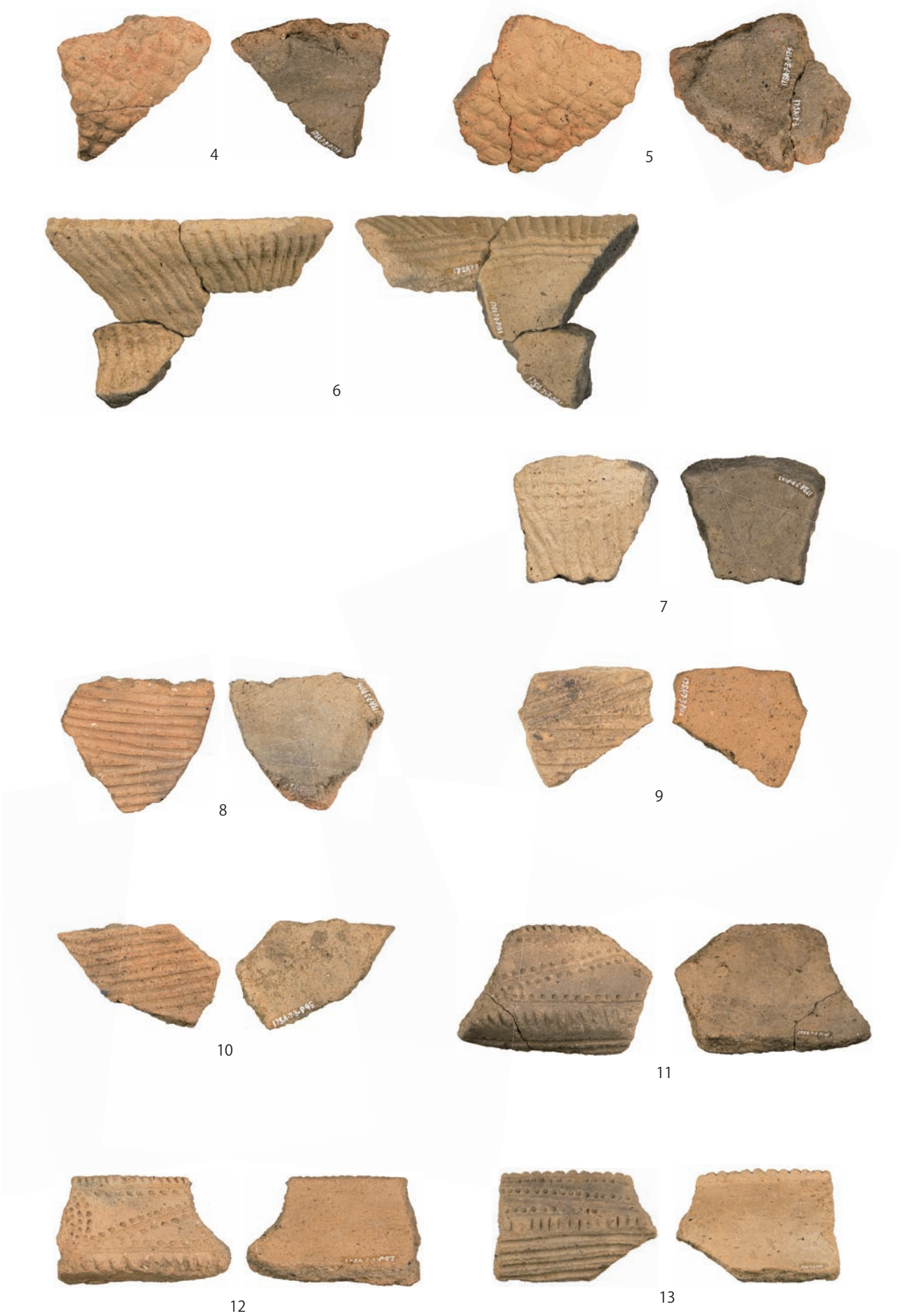
SX14・SX15出土遺物

1

2

3

1区～7区3層出土土器①



1区～7区3層出土土器②

14

15

1区～7区3層出土土器③

16

17

18

19

20

21

22

23

24

25

26

28

27

1区～7区3層出土土器④

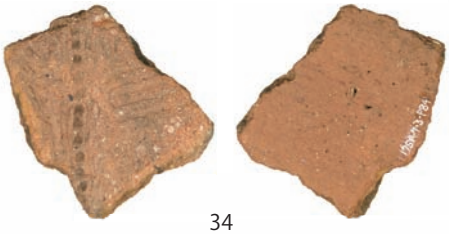
29

30

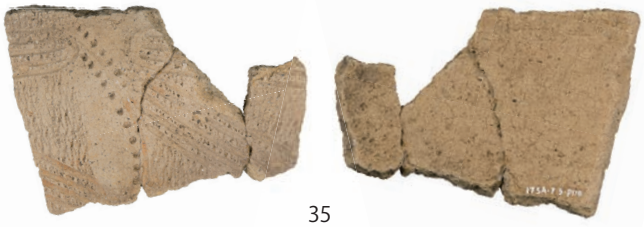
31

32

33



34



35

3 5

36

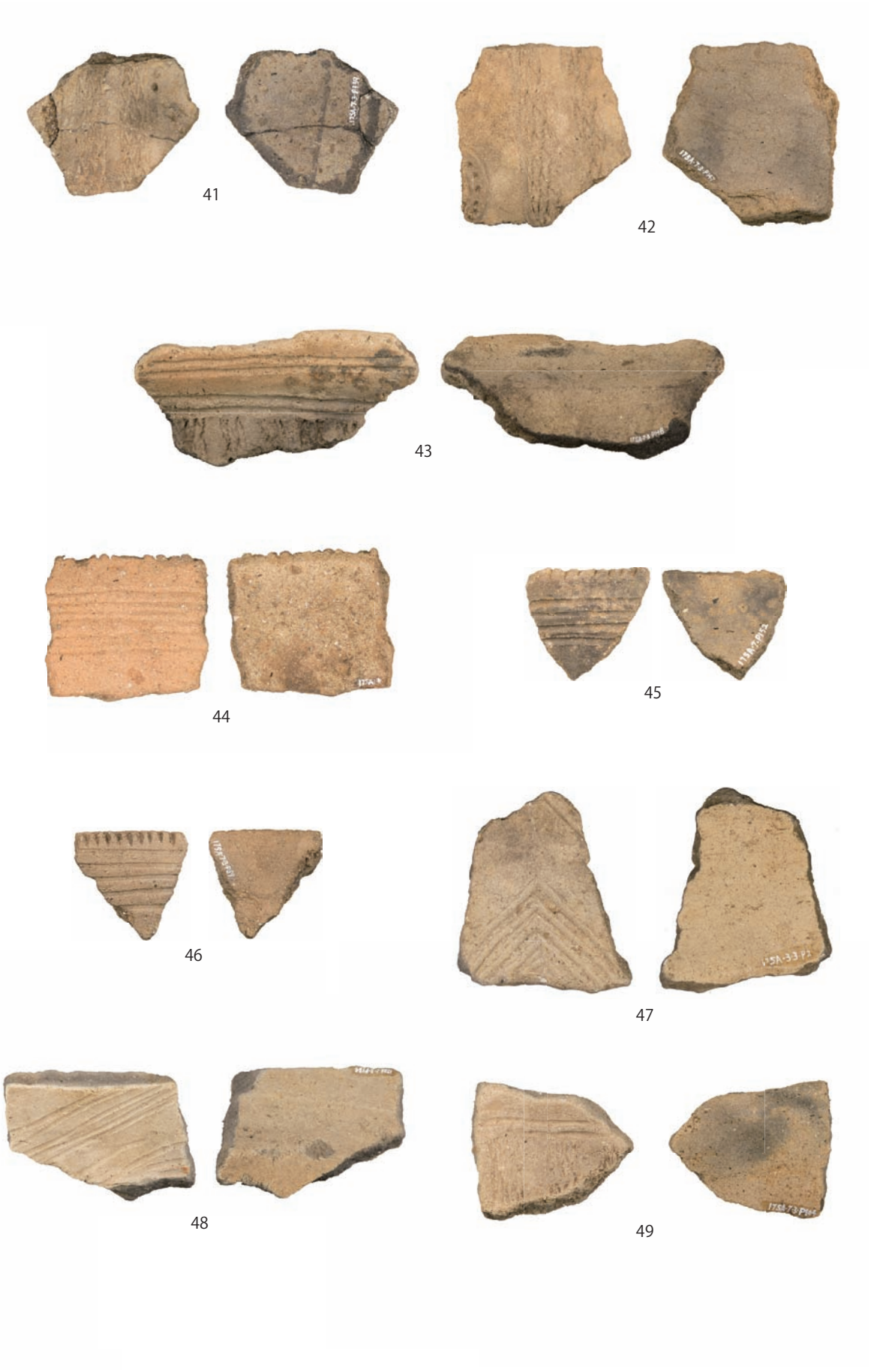
39

38

40

1区～7区3層出土土器⑤

図版24



1区～7区3層出土土器⑥

50

51

52

53

54

55

56

1区～7区3層出土土器⑦

図版26

1区～7区3層出土土器⑧

69

70

71

72

73

74

75

76

図版28

77

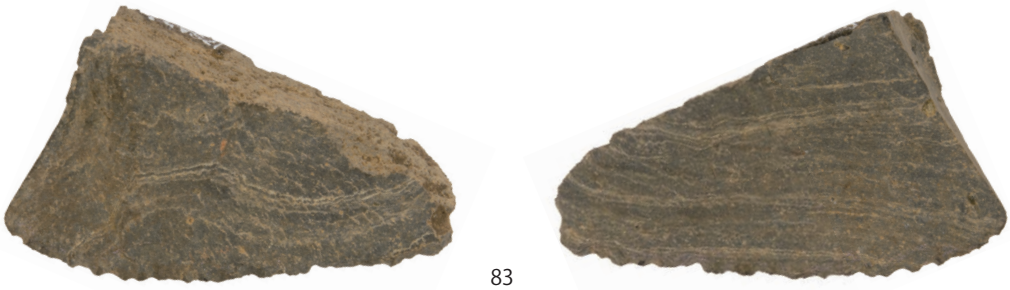
78

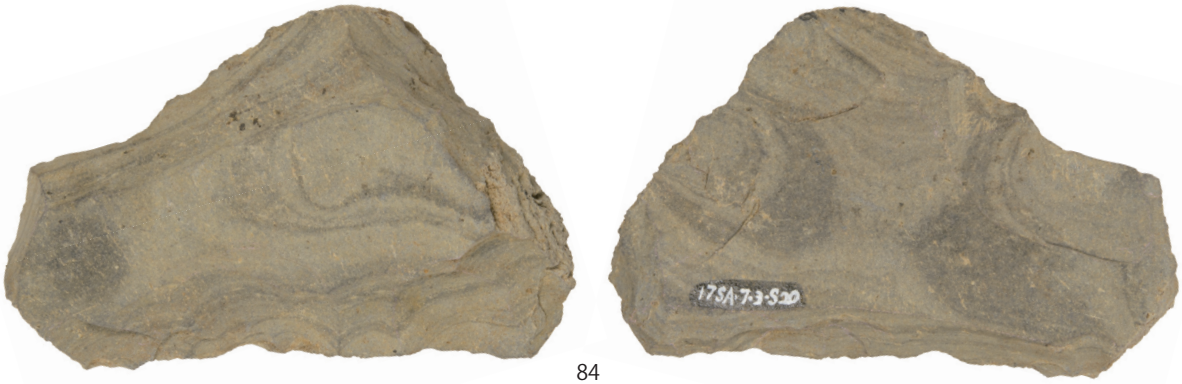
79

80

81

82


83

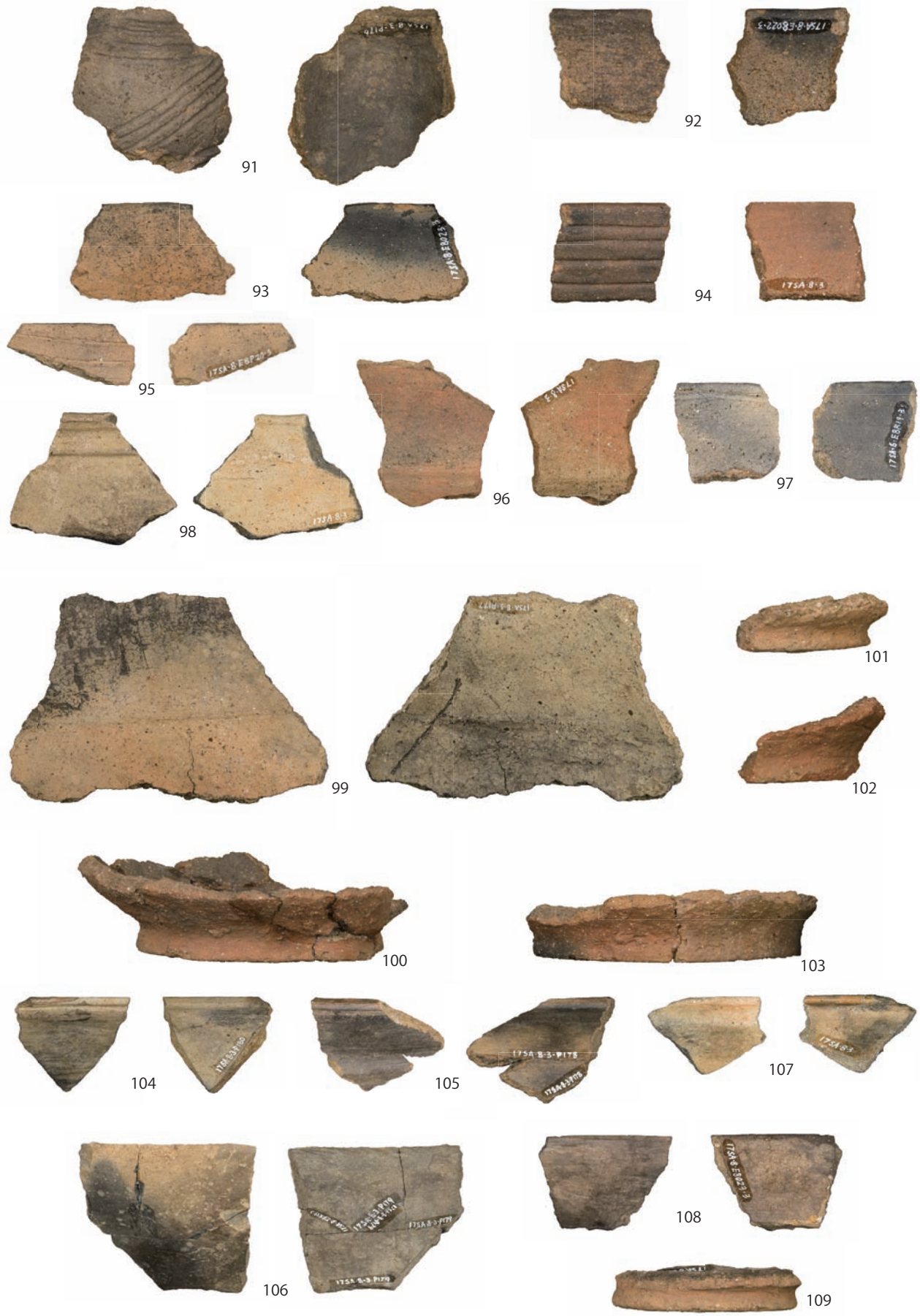


84

1区～7区3層出土石器①

1区～7区3層出土石器②

図版30



8区3層出土土器

110

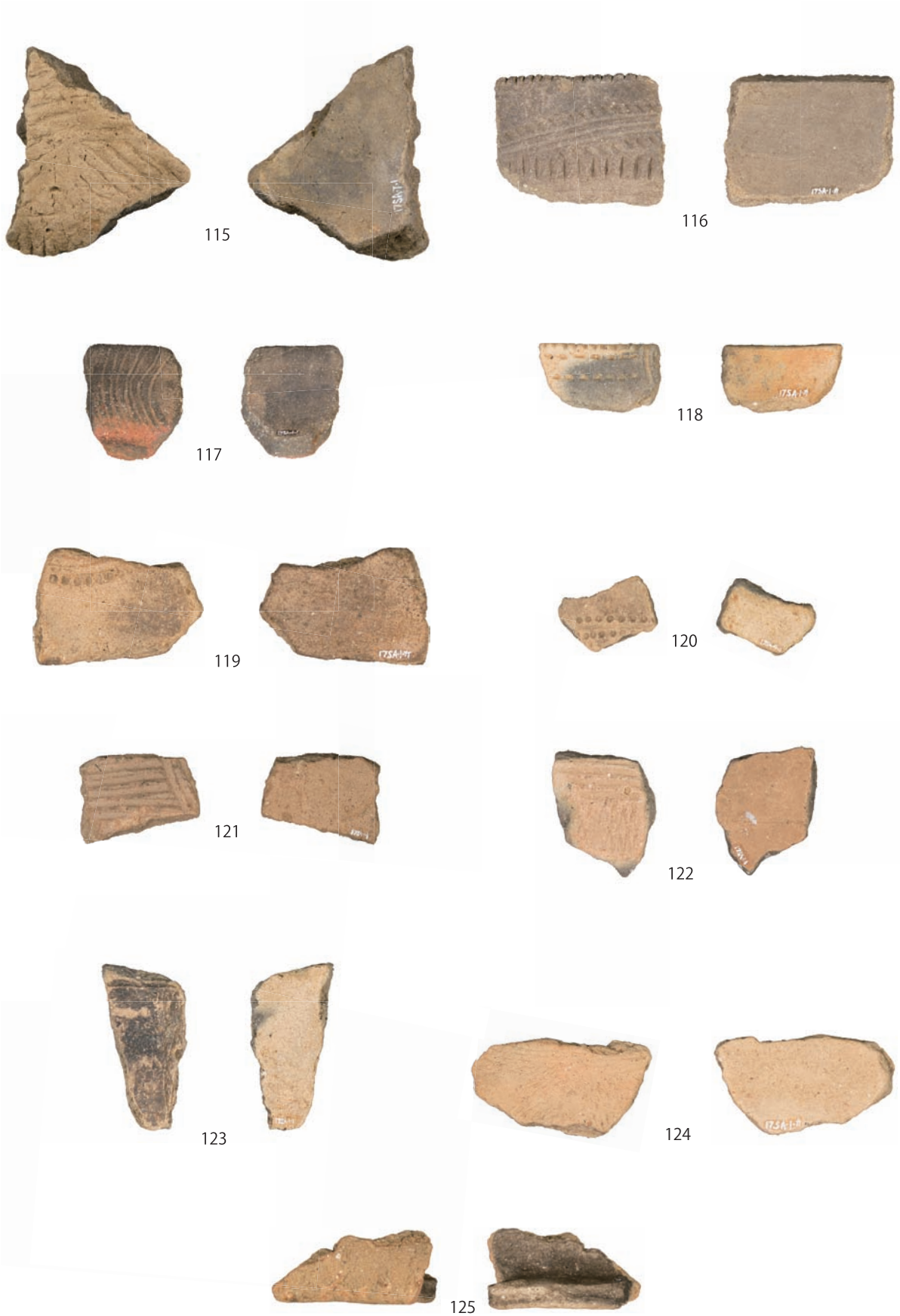
111

112

113

114

8区3層出土石器



表土出土土器①

126

127

128

129

130

131

132

133

134

表土出土土器②

図版34

表土出土土器③

150

151

152

153

154

155

156

表土出土石器①

157

158

表土出土石器②

8区2層出土土器

171

173

172

174

175

176

177

178

8区2層出土石器

付編

2017 年 10 月 10 日

下油堀遺跡で発見された倒木痕（SX13～SX15）に関する地質学的考察

熊本大学教育学部　谷口隼斗

2017 年 6 月 20 日から 22 日にかけて，下油堀の遺跡発掘現場にて風倒木の痕跡と考えられる地層の断面の観察を行った．SX13，SX14，SX15 の 3 カ所で観察を行い，地層の断面図を作成し，基本土層との比較を行ったので報告する．

基本土層と各層の特徴

基本土層（図 1）のうち第 3～第 14 層の試料を観察し，マンセル方式の標準土色帖で色調を判別した．また，各層の試料を超音波洗浄機した後，実体顕微鏡下で観察して構成物について検討した．

各層の色調と特徴

第 1，第 2 層（採取試料なし）

・層厚 50~60 cm の暗い灰色の層．
・耕作土である．

第 3 層

・最大層厚 15 cm の褐色（10YR4/4）の層．
・粒径はシルト粒子を主体とする．
・礫はほとんど含まれていない．
・粘性があるが，他層と比較すると弱い．

第 4 層

・層厚約 40 cm の黒色（10YR1.7/4）の層．
・粒径はシルト粒子を主体とする．
・礫はほとんど含まれていない．
・第 3 層より粘性がやや高い．

第 5 層

・約 60 cm のオリーブ褐色（2.5Y4/3）の層．
・粒径は砂サイズの粒子を主体とするが，径 0.5~5 cm の様々な大きさの礫も大量に含まれ，淘汰の悪い地層である．
・粘性は低い．

・周辺に分布する礫石原火砕流堆積物に相当する地層と考えられる.

第 6 層

・層厚約 25 cm の暗オリーブ色（5Y4/4）の層.
・粒径は砂サイズの粒子を主体とするが，径 0.2~3 cm ほどの礫を含む淘汰の悪い地層である.
・粘性は低い.
・礫石原火砕流堆積物が下位の土壌層に混入した地層と推定される.

第 7 層

・層厚約 4 cm の黒褐色（10YR2/2）の層.
・粒径はシルトサイズの粒子を主体とするが，石質岩片が少量含まれている.
・第 4 層と同程度の粘性がある.

第 8 層

・約 14 cm の黒褐色（10YR2/2）の層.
・粒径はシルトサイズの粒子を主体とするが，石質岩片が少量含まれている.
・第 4 および第 7 層よりも粘性が高い.

第 9 層

・層厚約 18 cm の黒褐色（10YR2/2）の層.
・粒径はシルト粒子を主体とするが，石質岩片が少量含まれていて，その岩片は第 7 および第 8 層の岩片よりも大きい.
・第 8 層と同程度の粘性がある.

第 10 層

・層厚約 25 cm の暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）の層.
・粒径はシルト粒子を主体とするが，石質岩片が少量含まれている.
・第 4 および第 7 層と同程度の粘性がある.
・後述する構成物の観察結果から，広域テフラである姶良 Tn 火山灰（AT）を含む地層である.

第 11 層

・約 26 cm の黒褐色（10YR3/1）の層.
・粒径はシルト粒子を主体とし，礫はほとんど含まれていない.
・第 8 および第 9 層と同程度の粘性がある.

第 12 層

・層厚約 24 cm の褐色（10YR4/4）の層.

・粒径はシルト粒子を主体とし，礫はほとんど含まれない.

・第 8，第 9，第 11 層よりも高い粘性を示す.

第 13 層

・層厚 8 ~ 16 cm の褐色（10YR4/4）の層.

・粒径はシルト～砂サイズの粒子を主体とする.

・石質岩片が多量に含まれ，風化が進んでいる.

・第 3 層と同程度の粘性がある.

・付近に分布する堆積物の対比から，一本松火砕流堆積物に相当する地層と推察される.

第 14 層

・層厚約 40cm のにぶい黄褐色（10YR5/4）の層.

・粒径はシルト粒子を主体とし，礫はほとんど含まれていない.

・第 12 層と同程度の強い粘性を示す.

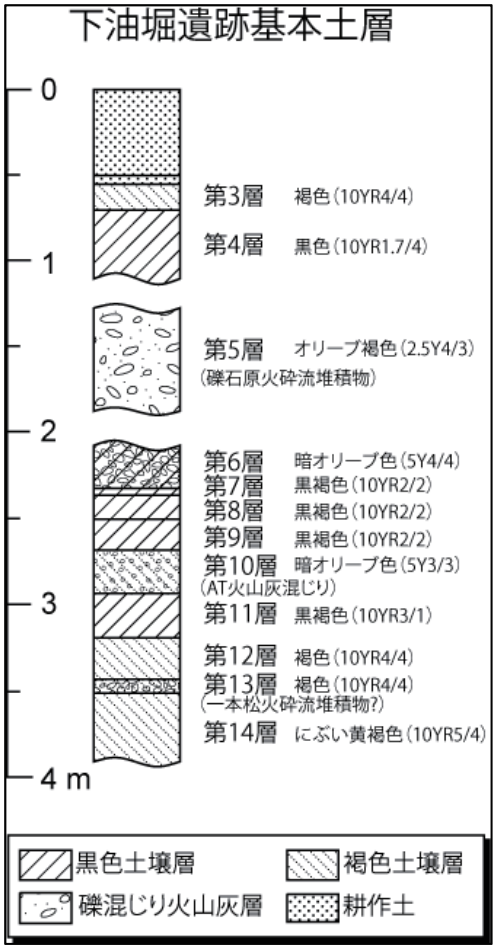


図 1：下油堀遺跡における基本土層柱状図

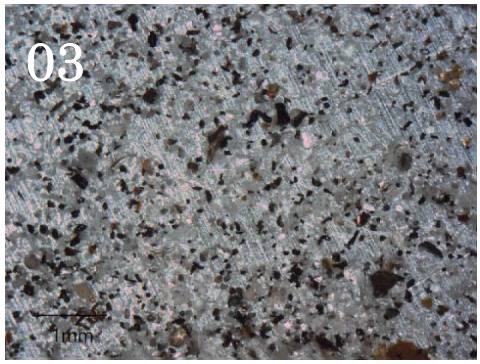
各層の構成物観察結果

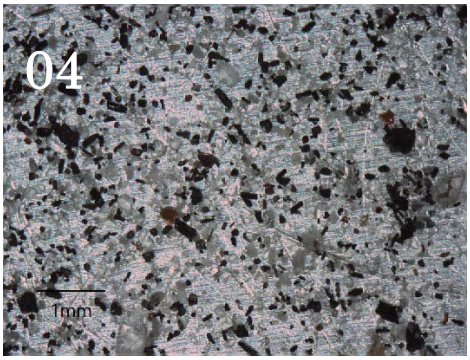
全ての層に斜長石，角閃石，黒雲母が含まれている（図 2）.

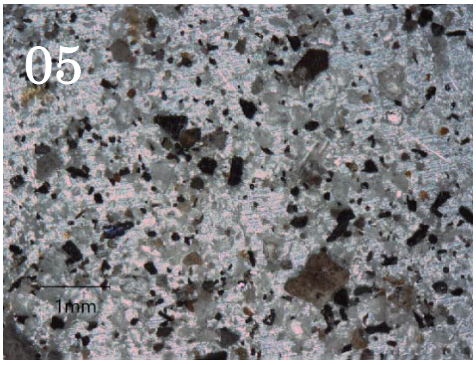
第 3，第 4，第 7 ~ 第 11 層にはバブルウォール型火山ガラスが含まれており，最も多量に含んでいるのは第 10 層である．その量は第 3 層，第 9 層，第 4 層，第 7 層，第 8 層，第 11 層の順に少なくなる.

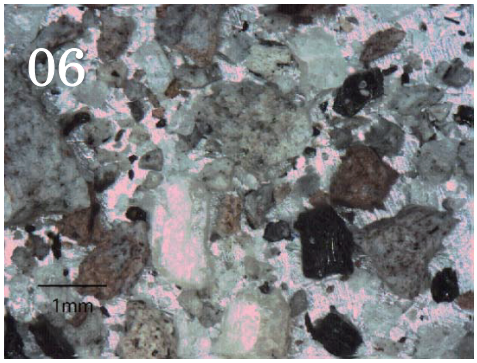
第 3 ~ 第 7，第 9 および第 10 層には石質岩片が含まれていて，最も多量に含んでいるのは第 5 層である．その量は第 6 層，第 7 層，第 11 層，第 3 層，第 9 層，第 10 層の順に少なくなる.

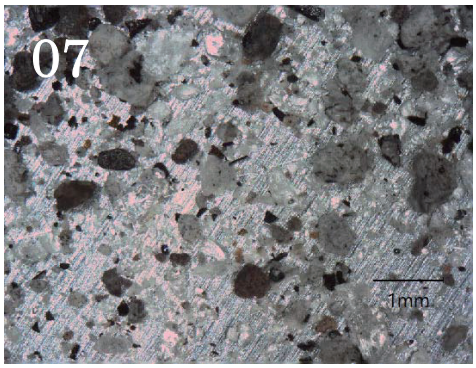
下部の第 12~第 14 層には，風化した岩片が多く含まれている．第 12 層と第 13 層には橙黄色の岩片が多く，第 14 層では橙色の岩片を主体とする.

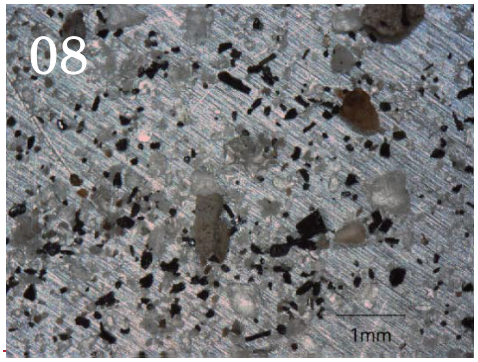












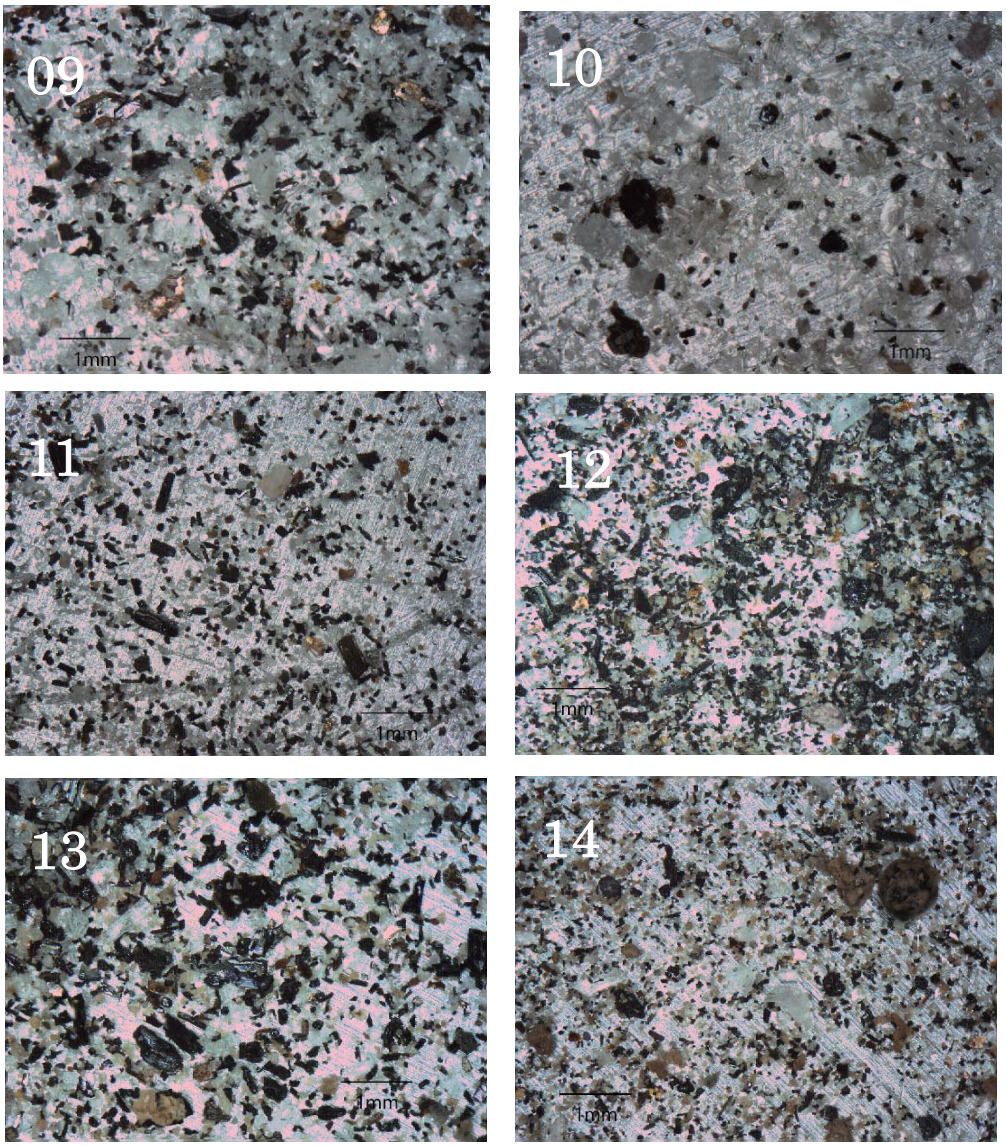


図 2：(02)第 2 層構成物（03)第 3 層構成物（04)第 4 層構成物（05)第 5 層構成物（06)第 6 層構成物（07)第 7 層構成物（08)第 8 層構成物（09)第 9 層構成物（10)第 10 層構成物（11)第 11 層構成物（12)第 12 層構成物（13)第 13 層構成物（14)第 14 層構成物

SX13 に関して

SX13 の断面およびその断面図を図 3 に示す．図中の a 層，b 層，c 層，d 層，e 層の層からは試料を採取し，詳細な観察を行った（図 4）.

c 層層は暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）を呈し，粒径はシルト～砂粒子を主体とし，粘性は低く,多くの石質岩片が含まれる．その特徴から，SX13 の c 層は基本土層の第 5 層，あるいは第 6 層に対応している.

b 層は黒褐色（10YR2/2）を呈し，粒径はシルト粒子を主体とし，粘性があり，少量の

バブルウォール型火山ガラスが含まれる．これらの特徴から，SX13 の b 層は基本土層の第 4 層に対応している．

a 層は暗褐色（10YR3/4）を呈し，粒径はシルト粒子を主体とし，粘性があり，バブルウォール型火山ガラスを含んでいる．これらの特徴から，SX13 の a 層は基本土層の第 3 層に対応している．

d層は黒褐色（10YR2/2）を呈し．特徴，構成物がそれぞれ　b　層と類似しているため，SX13 の d 層は b 層と同じく基本土層の第 4 層に対応していると推察される．

e 層は黒褐色（10YR2/3）を呈し．特徴，構成物がそれぞれ a 層と類似しているため，SX13 の e 層は a 層と同じく基本土層の第 3 層に対応すると推察される．

f 層~ l 層に関しては試料の採取を行っていないので，現地調査時の観察結果から判断している．

f 層，g 層，i 層に関しては，砂質であることと色調が c 層と類似していることから，c 層と同じく基本土層の第 5 層あるいは第 6 層に対応している．

h 層，i 層に関しては，e 層と色調が類似していることから e 層と同じく基本土層の第3層に対応すると考えられる．

k 層，l 層は，色調が類似していることから基本土層の第 7 ~第 9 層のいずれかに対応すると考えられる．

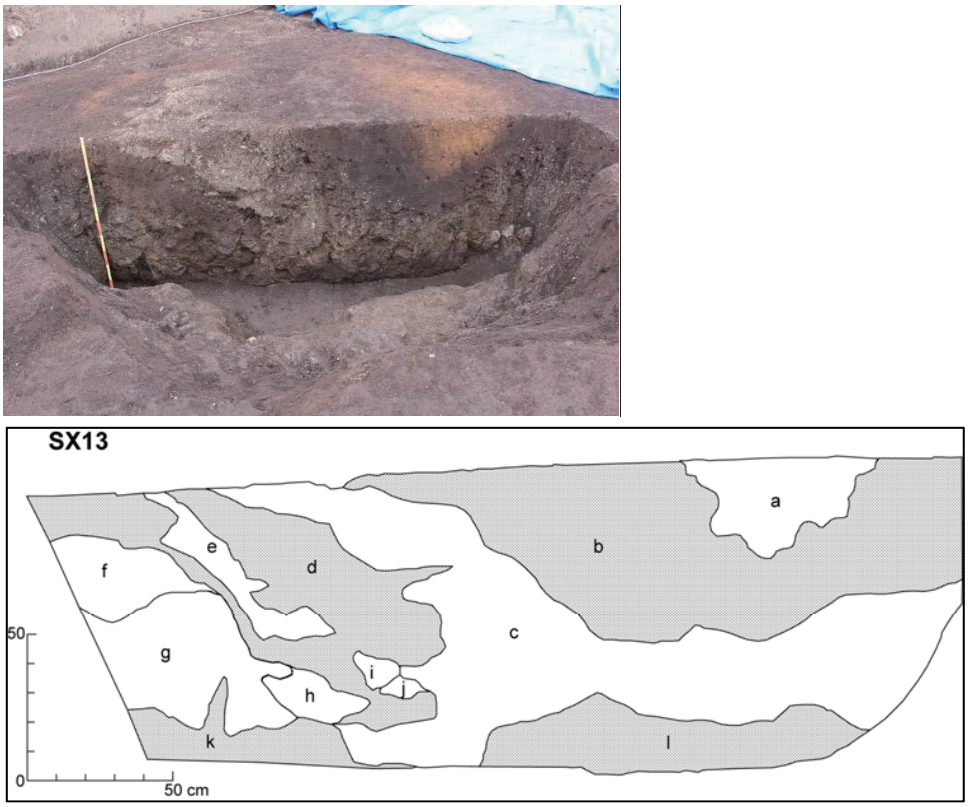


図 3：（上）SX13 の断面（下）断面図

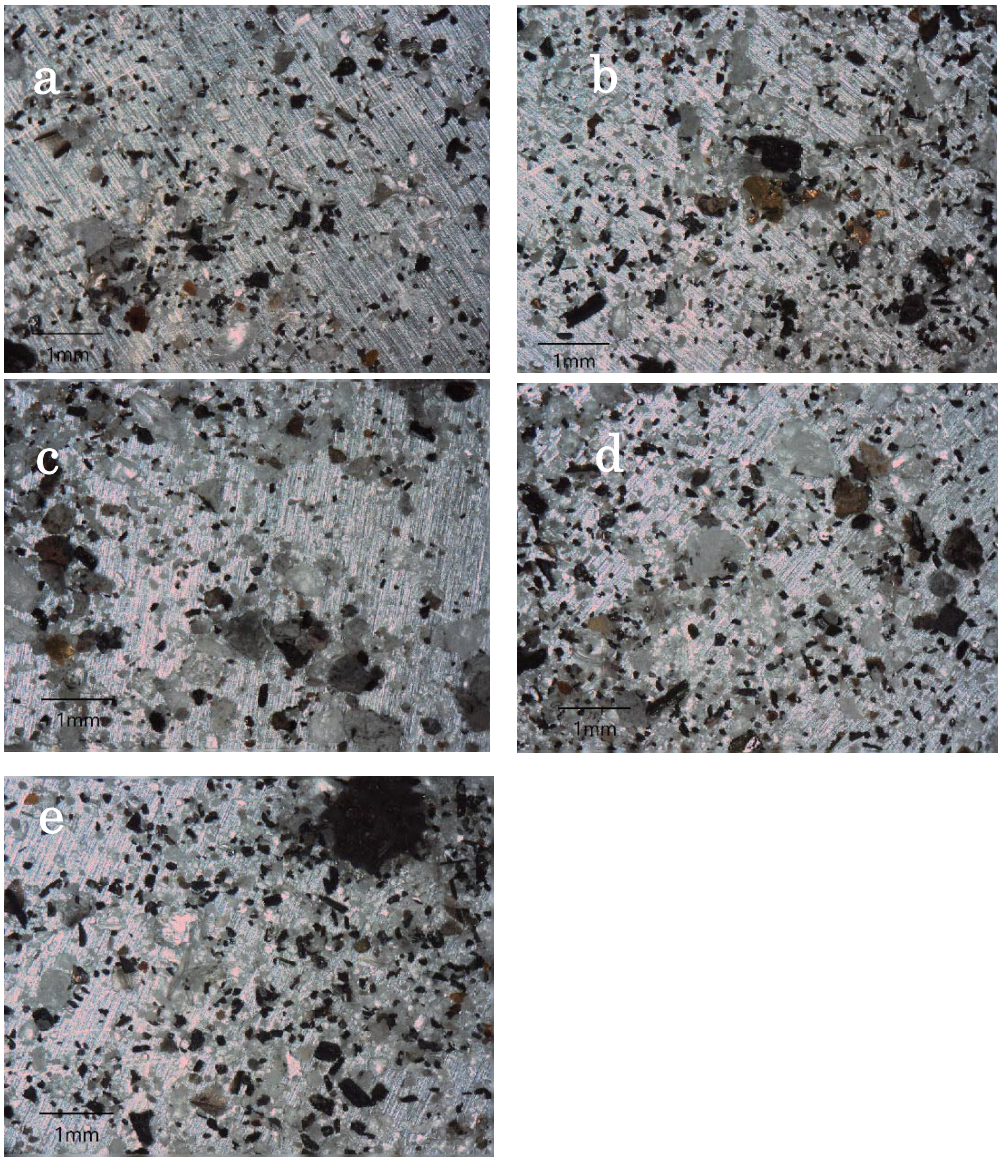


図 4：SX13 各層構成物（a)a 層（b)b 層（c)c 層（d)d 層（e)e 層

SX14 に関して

SX14 の断面およびその断面図を図 5 に示す．図中の a 層，b 層，c 層，d 層，f 層，h 層から試料を採取し，詳細な観察を行った（図 6）．

a 層はオリーブ褐色（2.5YR3/3）を呈し，粒径はシルト～砂を主体とし，粘性は低く，多くの石質岩片が含まれる．その特徴から，SX14 の a 層は基本土層の第 5 層，あるいは第 6 層に対応している．

b 層は黒褐色（10YR2/3）を呈し．粒径はシルト粒子を主体とし，粘性が高く，少量のバブルウォール型火山ガラスが含まれる．その特徴から，SX14 の b 層は基本土層の第 4 層に対応している．

c 層はオリーブ褐色（2.5Y4/3）を呈し，粒径はシルト～砂粒子を主体とし，粘性は低く，多くの石質岩片が含まれる．その特徴から，SX14 の c 層は基本土層の第 5 層，あるいは第 6 層に対応している．

d 層は黒褐色（2.5Y3/2）を呈し，粒径はシルト～砂粒子を主体とし，粘性は低い．その特徴から SX14 の d 層は基本土層の第 5 層，あるいは第 6 層にあたると推察される．

f 層は黒色（10YR1.7/1）を呈し．粒径はシルト粒子を主体とし，粘性が高く，少量のバブルウォール型火山ガラスが含まれる．その特徴から，SX14 の f 層は基本土層の第 4 層に対応している．

h 層は黒褐色（10YR2/3）を呈し，粒径はシルト粒子を主体とし，バブルウォール型火山ガラスが含まれる．その特徴から，SX14 の h 層は基本土層の第 3 層に対応している．

e 層，g 層，i 層，j 層に関しては，試料の採取を行っていないので現地調査時の観察結果から判断している．

e 層に関しては，シルト粒子を主体とし，粘性が高く，f 層と色調が類似していることから，f 層と同じく基本土層の第 4 層に対応している．

g 層に関しては，シルト粒子を主体とし，粘性が高く，h 層と色調が類似していることから，h 層と同じく基本土層の第 3 層に対応している．

i 層に関しては，砂粒子を主体とし，粘性が低く，c 層と色調が類似していることから，i 層は c 層と同じく基本土層の第 5 層，あるいは第 6 層に対応すると考えられる．

j 層に関しては，砂粒子を主体とし，粘性が低く，d 層と色調が類似していることから，j 層は d 層と同じく基本土層の第 5 層，あるいは第 6 層に対応すると考えらえる．

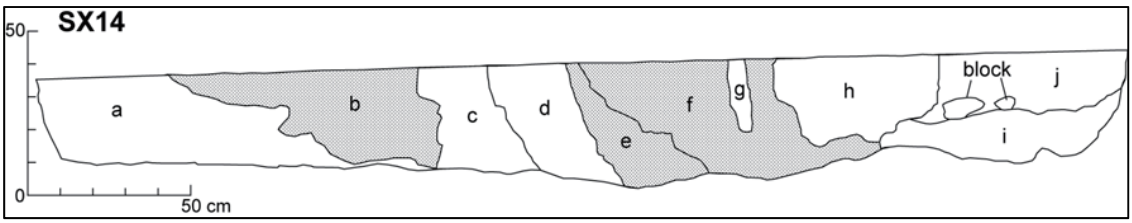


図 5：（上）SX14 の断面（下）断面図

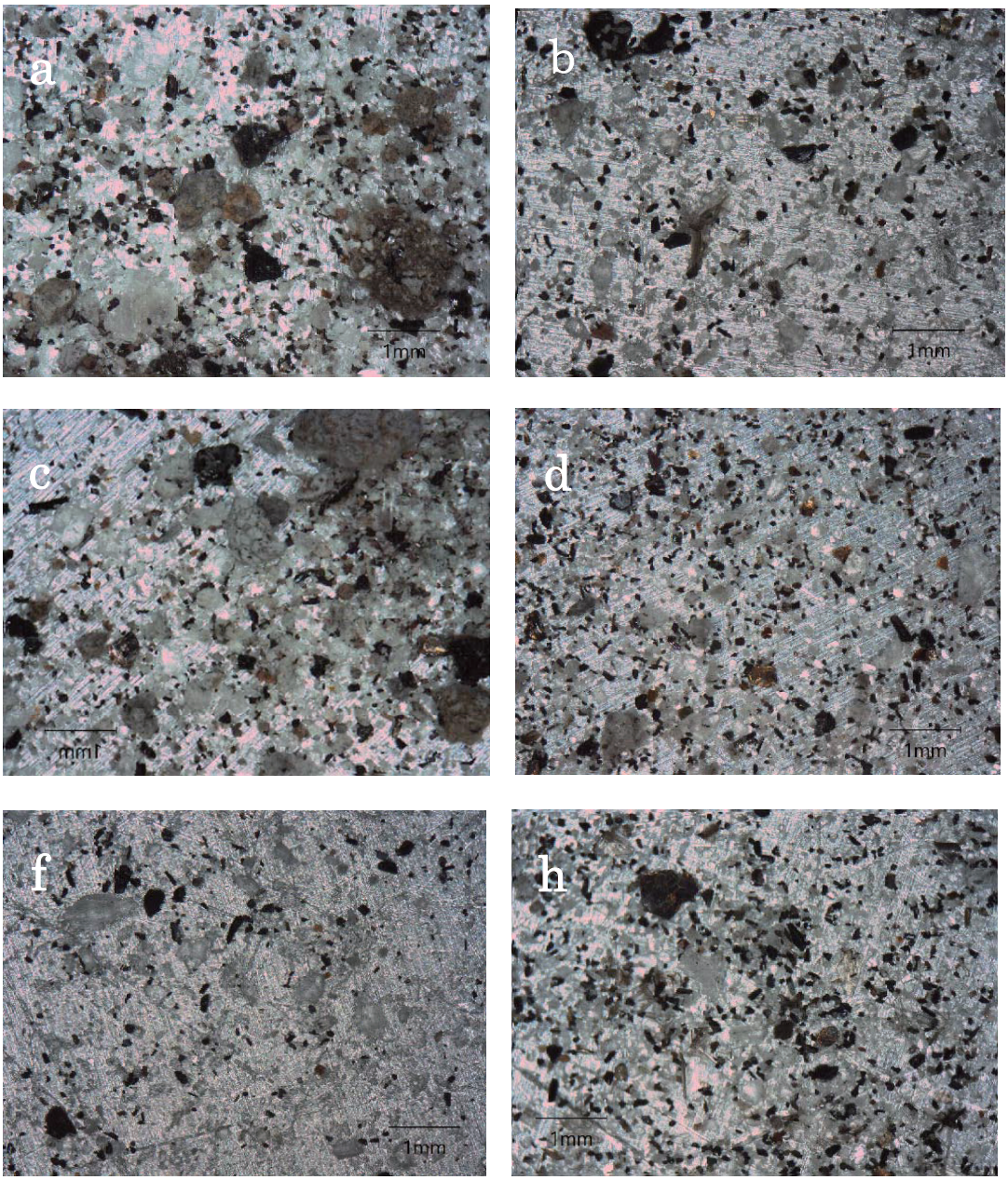


図 6：SX14 各層構成物（a)a 層（b)b 層（c)c 層（d)d 層（f)f 層（h)h 層

SX15 に関して

SX15 の断面およびその断面図を図 7 に示す．図中の a 層，c 層，d 層，g 層，h 層，i 層からは試料を採取し，詳細な観察を行った（図 8）．

c 層はオリーブ褐色（2.5Y4/4）を呈し，粒径はシルト～砂粒子を主体とし，粘性は低く，多量の石質岩片が含まれる．その特徴から，SX15 の c 層は基本土層の第 5 層，あるいは第 6 層に対応している．また d 層も同じ特徴がみられるため，オリーブ褐色（2.5Y4/4）の層である d 層も基本土層の第 5 層，あるいは第 6 層に対応している．

a 層は黒褐色（10YR2/3）を呈し，粒径はシルト粒子を主体とし，粘性が高く，少量のバブルウォール型火山ガラスが含まれる．その特徴から，SX15 の a 層は基本土層の第 4 層に対応している．

g 層は黒褐色（10YR2/3）を呈し，粒径はシルト粒子を主体とし，粘性が高く，少量のバブルウォール型火山ガラスが含まれる．その特徴から，SX15 の g 層は基本土層の第 4 層に対応している．

h 層は暗褐色（10YR3/3）を呈し，粒径はシルト粒子を主体とし，粘性が高く，バブルウォール型火山ガラスが含まれる．その特徴から，SX15 の h 層は基本土層の第 3 層に対応している．

i 層は暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）を呈し，粒径はシルト～砂粒子を主体とし，粘性がやや高く，少量の石質岩片が含まれる．特徴が一致する層は基本土層に含まれていないが，基本土層の第 4 層（粘性がありシルト質），もしくは第 5 層（石質岩片が含まれる）にあたると推察される．

b 層，e 層，f 層，j 層，k 層に関しては，試料の採取を行っていないので，現地調査時の観察結果から判断した．

b 層に関しては，隣接する c 層より大きい礫（最大 3 cm）を含んでいるが，砂粒子を主体とし，粘性が低く，色調が c 層と類似していることから，c 層と同じく基本土層の第 5 層，あるいは第 6 層に対応している．

e 層に関しては，黒色の土壌が混ざっているが，砂粒子を主体とし，粘性が低く，色調が c 層と類似していることから c 層と同じく基本土層の第 5 層，あるいは第 6 層に対応している．混ざっている黒い土壌は粘性が高いため，第 4 層のものと考えられる．

f 層に関しては，色調が h 層に類似しているため，h 層と同じく基本土層の第 3 層に対応している．

j 層，k 層に関しては，双方とも色調が同じで d 層の色調と類似している．また，砂質粒子を主体とし，粘性が低いことから d 層と同じく，基本土層の第 5 層，あるいは第 6 層に対応している．

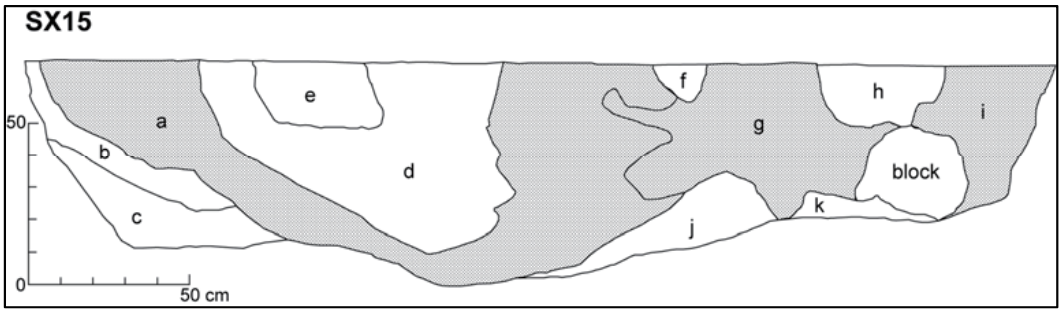


図 7 ：（上）SX15 の断面（下）断面図

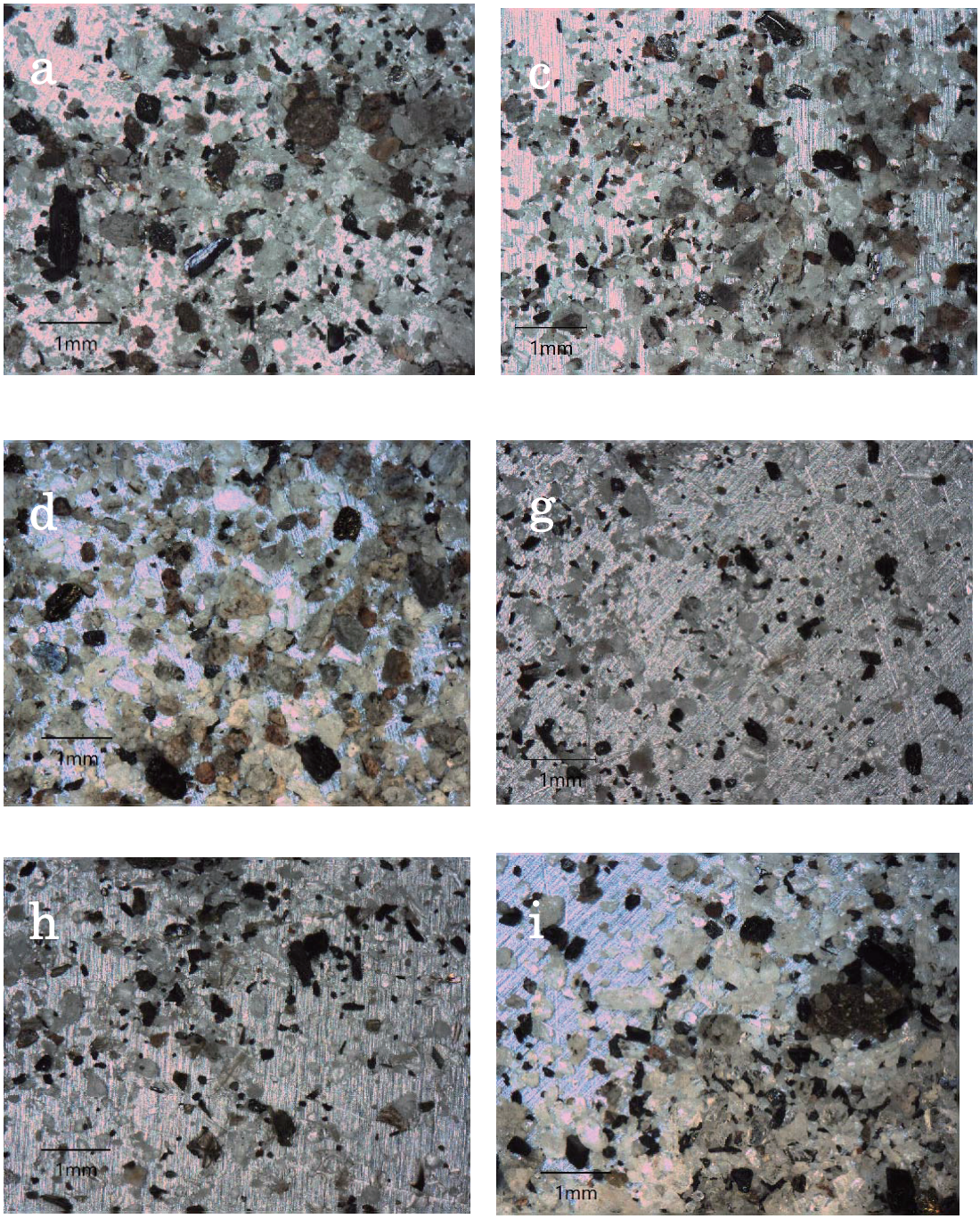


図 8：SX15 各層構成物（a)a 層（c)c 層（d)d 層（g)g 層（h)h 層（i)i 層

（※注釈）
付編報告者の熊本大学谷口氏が調査した下油堀遺跡６区および７区では、本編で記載した７層～９層が欠落しており、１０層も大部分が欠落していた。そのため、付編第６層より下位では、本編の層序番号とはズレが生じている。例えば、AT 火山灰混じりとされる付編第１０層は、本編の第１４層にあたり、一本松火砕流堆積物相当層とされる付編第１３層は本編では第１７層にあたる。

報告書抄録

ふりがな	かみあぶらぼりいせき・しもあぶらぼりいせき
書　　名	上油堀遺跡・下油堀遺跡
副書名	農業競争力強化基盤整備事業　農地整備事業(畑地帯担い手育成型)三会原第3地区に伴う埋蔵文化財発掘調査
巻　　次	
シリーズ名	島原市文化財調査報告書
シリーズ番号	第17集
編著者名	宇土靖之　竹田将仁　加世田尊　横山精士　吉岡慈文
編集機関	島原市
所在地	〒855－8555　長崎県島原市有明町大三東戊1327番地　TEL 0957－68－5473
発行年月	西暦2017年12月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かみあぶらぼりいせき 上油堀遺跡	ながさきけんしまばらし 長崎県島原市 あぶらぼりちょうかみあぶらぼり 油堀町上油堀	203-006	092-047	32° 48′ 43″	130° 19′ 5″	20170522 ～ 20170831	900㎡	農業競争力強化基盤整備事業　農地整備事業(畑地帯担い手育成型)三会原第3地区
しもあぶらぼりいせき 下油堀遺跡	ながさきけんしまばらし 長崎県島原市 あぶらぼりちょうかみあぶらぼり 油堀町上油堀	203-005	092-046	32° 48′ 48″	130° 19′ 15″	20161216 ～ 20170224 20170522 ～ 20170831	2244㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上油堀遺跡	遺物包含地	縄文時代		縄文土器	
下油堀遺跡	遺物包含地	縄文時代/弥生時代	土坑・落し穴状遺構・焼土	縄文早期～縄文晩期土器	

島原市文化財調査報告書　第17集

上油堀遺跡・下油堀遺跡

発行月　平成29(2017)年12月

編集・発行　島原市教育委員会
長崎県島原市有明町大三東戊1327番地
TEL　0957(68)5473

印刷　株式会社　松尾印刷所
長崎県島原市湖南町6940番地
TEL　0957(62)2962